定シタルニ乙直ニ實行セントスルニ當リ甲其非ヲ悟リ與ヘタル毒薬ヲ取戻シタルカ如キ場合ニアリテハ甲ノ責任如何ト云フニ正犯ハ毒殺未遂罪ナリト雖モ甲ハ中止犯タルノ條件ヲ具備スルヲ以テ無罪タル可シ但此場合ニ甲ノ止ムルヲ肯ンセスシテ乙毒薬ヲ戻サス之ヲ丙ニ服用セシメ以テ死ニ至ラシメタルトキハ結果ノ顯ハレタルノ故ヲ以テ甲ハ有罪タル可シ尚前例ニ於テ乙ナル正犯者カ甲ノ意思ニ因ラスシテ中止シタル場合ニ於テハ如何多數説ハ同シク甲ハ中止犯トシテ無罪ナリト云フモノヽ如シ。

本條第二項ハ新ニ設ケタル規定ニシテ實行正犯ノミナラス教唆者ヲ教唆シタル者モ亦之ヲ罰スルモノナリ舊法ニ於テ此規定ナカリシ為メ實際上往々不良ノ徒ヲシテ其刑ヲ免レシメタルコトナキニ非ス本法ハ此理由ニ因リ教唆者ヲ教唆シ教唆罪ヲ實行セシメタルモノモ亦實行正犯ヲ教唆シタル者ト同ク準正犯ト為スコトヲ規定シタルナリ例ヘハ甲ナル者乙ヲ教唆シテ曰ク汝丙ヲ教唆シテ丁ヲ殺サスヘシト因テ丙ナル者丁ヲ殺シタリトセンニ甲ハ乙ノ教唆ヲ教唆シタルモノニシテ實行正犯タル丙ノ殺人ヨリ觀レハ其教唆ノ教唆カ犯罪實行ノ原動力ナルヲ以テ實行正犯ヲ直接ニ教唆シタルモノト何等選フ所ナシ從テ之ヲ同一ニ罰スルノ必要アリ是レ本條第二項ノ規定アル所以ナリ

第六十二條　正犯ヲ幇助シタル者ハ從犯トス
從犯ヲ教唆シタル者ハ從犯ニ準ス

本條第一項ハ舊法第百九條ト同一ノ規定ナリ舊法ハ幇助ニ付テノ方法ヲ列擧シタルモ是レ唯例示ニ過キスシテ何等ノ實益アルコトナシ是ヲ以テ本法ハ別段方法ヲ示サス苟シクモ正犯ヲ幇助シタル者ハ總テ之ヲ從犯ト為スコト、セリ然レトモ廣ク學説ニ所謂事後從犯ノ如キモノヲモ包含セシムル趣旨ニ非スシテ舊法ト同シク事前ノ從犯ノミニ限ルモノトス唯其幇助ノ方法ニ付キ舊法ノ如ク制限セサルノミナリ蓋シ事後ノ從犯トハ正犯カ既ニ罪ヲ犯シタル後ニ於テ其終成ヲ補シタルモノヲ謂フ例ヘハ強盜ニ因テ得タル贓物ノ寄藏又ハ故買者ノ如キ是ナリ此等ノ行為ハ正犯ニ直接關與セサルモノニシテ別ニ一種ノ犯罪トシテ規定シタルヲ以テ茲ニ之ヲ含マサルモノトス。
從犯トハ犯罪ヲ生セシムルニ至ラスシテ之ヲ行ハントスル者ヲ故意ニ幇助

シ其實行ヲ容易ナラシメタル者ヲ云フ從テ從犯タルニハ次ノ三條件ヲ必要トス。

第一正犯タルヘキ犯罪アルコトヲ要ス

從犯ハ主タル正犯アリテ初メテ存在スル從タル犯罪ナルヲ以テ正犯アルヲ要スルハ論ヲ俟タス從テ刑法ニテ罰スルコトナキ所爲ヲ幇助スルモ從犯トナルコトナシ又原則上從犯ハ主タル正犯ト其運命ヲ倶ニス可キモノナリ故ニ主犯成立セサレハ從犯モ又成立セス主犯未遂罪ナレハ從犯モ又未遂罪ナリトス正犯中止シタルトキハ從犯亦利益ヲ受クルモノトス而シテ自殺幇助ノ如キ一見從犯ノ如シト雖モ從犯ノ場合ニハ他ニ犯罪ト爲ル可キ正犯アルヲ要スルカ故ニ罪ト爲ラサル自殺ト云フ行爲ヲ幇助シテ之カ爲メ處罰サルヽモ之レ獨立ノ犯罪ニシテ從犯ナリト云フヲ得ス又例ヘハ甲乙ニ墮胎ノ方法ヲ傳授シ乙ハ之ヲ丙女ニ試ミタルモ丙女姙娠シ居ラサリシヲ以テ墮胎ノコトナクシテ止ミタリトセンニ乙ハ不能犯トシテ責ヲ負ハス從テ罪ニアラサル行爲ヲ幇助シタル甲モ又無罪タル可シ。

第二正犯ヲ幇助シタルコトヲ要ス。

茲ニ幇助ト云フハ其犯罪ニ影響スル所ハ輕少ナルヲ意味スル字句ナルヲ以テ假令犯罪ノ豫備行爲ヲ助力シタル者ト雖トモ其影響スル所ノ重大ナル性質ノ者ニ在リテハ從犯ニ非スシテ正犯タリ又既ニ正犯カ實行ニ着手シタル後一定助力ヲ與ヘタル者トスルモ若シ助力ノ輕少ナリトスレハ正犯ニ非スシテ從犯タルナリ又本法ニ於テハ正犯ヲ幇助スル手段方法ヲ示サヽルヲ以テ如何ナル手段方法ヲ採ルモ單ニ犯罪ノ實行ヲ容易ナラシムルニ過キサルモノナルトキハ從犯ナリトス例ヘハ殺人ノ用ニ供スル刀劔ヲ貸與スルカ如キ又ハ強竊盜ノ案内ヲ爲スカ如キ凡テ從犯ナリトス。

第三故意ニ正犯ノ犯罪行爲ヲ幇助シタルコトヲ要ス。

從犯者ハ正犯者ト互ニ通謀シテ或犯罪ヲ實行シタルコトヲ必要トセサルモ從犯者ハ正犯者カ罪ヲ犯スコトヲ知リテ之ヲ幇助シタルコトヲ要ス從テ犯罪ノ用ニ供スルコトヲ知ラスシテ刀劔ヲ貸與シタル場合ノ如キハ從犯タル能ハス必ス人ヲ殺スコトヲ知リテ刀劔短銃等ヲ貸與シタル場合ニ非サレハ殺人罪

ノ從犯タルヲ得サルモノトス。

本條第二項ハ新ニ設ケラレタル規定ニシテ從犯ノ教唆者ヲ準從犯ト爲ス規定ナリ蓋シ本法ハ既ニ教唆者ノ教唆ヲ正犯ニ準スト爲ス旨ヲ規定シタリ因テ從犯ヲ教唆シテ幇助ヲ實行セシメタル者モ亦之ヲ從犯ニ準スト爲スニアラサレハ聊カ不權衡ノ嫌ナキニ非ラサルヲ以テ本條第二項ノ規定ヲ新設シタルナリ從テ例ヘハ丁ヲ殺サンコトヲ計レル丙毒藥ヲ供センコトヲ乙ニ教唆シタル甲ハ乙ト等シク從犯ヲ以テ論セラル可キモノタルナリ。

第六十三條　從犯ノ刑ハ正犯ノ刑ニ照シテ減輕ス

本條ハ舊法第百九條ト同シク從犯ノ刑ハ正犯ノ刑ヨリ之ヲ減輕シテ罰ス可キコトヲ規定シタルモノナリ蓋シ從犯ハ正犯ト異ナリ犯罪ノ成立ヲ幇助シタルニ止マリ其情狀ニ於テ大ニ正犯ヨリ輕キ所アリ從テ之ト同一ノ刑ニ處スルハ重キニ失スルヲ以テナリ。

第六十四條　拘留又ハ科料ノミニ處ス可キ罪ノ教唆者及ヒ從犯ハ特別ノ規定アルニ非サレハ之ヲ罰セス

本法ニ於テ拘留又ハ科料ノミニ處ス可キ罪ハ罪質極メテ輕微ナルヲ以テ拘留又ハ科料ノミニ處スヘキ罪ノ教唆者及ヒ從犯ハ罪質更ニ輕微ニシテ一般ニ之ヲ處罰スルノ必要ナシ但シ其特ニ必要アルモノニ限リ各本條ニ於テ規定ス可キモノナリ之レ本條ニ拘留又ハ科料ノミニ處ス可キ罪ノ教唆者及ヒ從犯ハ特別ノ規定アルニ非サレハ之ヲ罰セスト規定シタル所以ナリ。

第六十五條　犯人ノ身分ニ因リ構成ス可キ犯罪行爲ニ加功シタルトキハ其身分ナキ者ト雖モ仍ホ共犯トス

身分ニ因リ特ニ刑ノ輕重アルトキハ其身分ナキ者ニハ通常ノ刑ヲ科ス

本條第一項ハ新ニ設ケタル規定ニシテ身分カ犯罪構成要件タル場合ニ於ケル共犯ニ關スル規定ナリ舊法ニ於テハ此場合ニ關スル規定ナキ爲メ學說二派ニ別レ一ハ之ヲ共犯ニ非スト爲スト雖モ本法ハ第二ノ主義ヲ採リ身分ナキモノカ身分アル者ト共ニ身分ニ依リ構成ス可キ罪ヲ犯シタルトキハ之ヲ共犯ト

爲スコト、爲セリ、從テ彼ノ官吏收賄罪ハ官吏タル特別ノ身分ヲ有スル者ニ非サレハ犯スコトヲ得サル犯罪ナリト雖モ之ニ加功シタル一私人ハ同シク官吏收賄罪ノ共犯者ナリト云フヲ得ヘキナリ例ヘハ一私人カ官吏ニ勸メテ自己ノ提供シタル賄賂ヲ收受又ハ聽許セシメタルトキハ其一私人ハ官吏收賄罪ノ敎唆者トシテ處罰スルコトヲ得ルナリ。

此規定ハ又間接正犯ニ付テ其ハ適用アルハ可シ即チ直接正犯タルコトヲ得サルモノハ間接正犯タルコトヲ得ルヤ否ヤハ問題ニ付キ本條ノ趣旨ヲ演繹シテ積極說ヲ採リ常ニ間接正犯トナルコトヲ得ルモノト解ス。例ヘハ收賄ノ意思ナキ官吏ヲシテ收賄セシメタル場合ノ如キ官吏自身ハ收賄罪ヲ犯シタル者ニ非サルモ官吏ヲシテ其職務ニ關シ收賄スルニ至ラシメタル者ハ又間接正犯トシテ收賄罪ノ責任ヲ負ハシメサルヘカラサル可キモノトス。

本條第二項ハ舊法第百六條及第百十條ト同一ノ規定ニシテ共犯者ノ身分カ犯罪加重要件タル場合ヲ規定シタル者ナリ即チ身分ニ因リ特ニ刑ノ輕重アルトキハ其身分ナキ者ニハ通常ノ刑ヲ科ス可キモノトス例ヘハ共犯者ノ一人本法第二百條自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ヲ殺シタル場合ニ於テハ其子孫タル身分アル者ハ通常殺人罪ヨリ重罰セラルヽト雖モ子孫タル身分ナキ者ハ第二百條ノ通常殺人罪ノ罪ニ處セラルヽニ過キサルカ如キ又身分ニ因リ特ニ罪ノ輕キトキ例ヘハ心神耗弱者ト共ニ罪ヲ犯シタル場合ニ於テハ其者ハ特ニ本法第三十九條ニ依リ罪ヲ輕減セラルヽモ他ノ共犯者ハ各本條ノ規定シタル通常ノ罪ニ處セラルヽカ如キ則チ是ナリ。

第十二章　酌量減輕

本章ハ舊法第一編第四章第三節ノ規定ト其旨趣ヲ同フス本法ハ舊法ノ刑ノ範圍狹キニ失シ實際上刑ノ權衡ヲ失スル弊アリシヲ避クル爲メ刑ノ範圍ヲ擴クスルコトヲ目的ト爲シ各本條ニ於テ各罪ニ對スル刑ノ範圍ヲ廣クシ情狀ニ因リ裁判所ヲシテ自由ニ適宜ノ刑ヲ定メシムルコト、爲セリ從テ本章ノ規定ハ殆ント其必要ナキニ似タルニ至リタリト雖モ或ル場合ニアリテハ尚ホ刑ノ重キニ失スト爲ス可キコトナシトセス是ヲ以テ更ニ酌量シ減輕制ヲ設ケ適當

ノ刑ヲ科セシメント欲シ本章ノ規定ヲ存シタルナリ。

第六十六條　犯罪ノ情狀憫諒ス可キモノハ酌量シテ其刑ヲ減輕スルコトヲ得

本條ハ所謂裁判上ノ減輕タル酌量減輕ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第八十九條第一項ハ其趣ヲ同フス。

即チ如何ナル犯罪タルトヲ問ハス其情狀憫諒ス可キモノアルトキハ裁判官ハ其刑ヲ減輕スルコトヲ得ルノ職權ヲ有スルモノトス蓋シ若シ法律又ハ命令ヲ以テ犯罪ニ對シ或刑ヲ科スルコトヲ示シタルトキハ更ニ之ヲ動カス法令ナケレハ裁判官ハ之ヲ變スルコトヲ得ス故ニ加重ヲ許シタル規定ナキヲ以テ裁判上ノ加重ナルモノ之レアルコトナシト雖モ之ニ反シテ減輕ニ付テハ本條ノ明文アルヲ以テ初メテ減輕スルコトヲ得ル職權ヲ有スルニ至ルモノトス、而シテ酌量ス可キ情狀アルヤ否ヤハ事實ノ認定ナリ故ニ之ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得ス又裁判官ニ於テ刑ヲ減輕ス可キ情狀アリト認ムレハ其事情カ主觀的ナルモノハ客觀的ノモノハナルトハ之ヲ區別セサルモノトス例ヘハ竊盜罪ニ付キ其竊盜カ貧苦ニ迫リ[眞]ニ憐ム可キ事情アリト云フ主觀的ニ其理由存スル場合アリトスルモ又竊取シタル物品カ僅ニ柿ノ實一個ナリト云フカ如キ客觀的ニ極メテ情ノ輕キ場合モ双方ヲ包含スヘキモノナリトス。

第六十七條　法律ニ依リ刑ヲ加重又ハ減輕スル場合ト雖モ仍ホ酌量減輕ヲ爲スコトヲ得

本條ハ酌量減輕ヲ適用ス可キ範圍ヲ規定シタルモノニシテ舊法第八十九條第二項ト其趣旨ヲ同フス、即チ法律ニ於テ刑ヲ加重スル場合ト雖モ仍ホ情狀憫ム可キモノアルトキハ酌量減輕ヲ爲スコトヲ得ルモノトス例ヘハ併合罪再犯又ハ第二百條ノ如キ法律カ特ニ嚴罰スヘキ者ト看做シテ刑ヲ加重スル旨ヲ規定シクルトキニ於テモ仍ホ憫諒ス可キ事情アル時ハ之ヲ酌量シテ刑ヲ減輕スルコトヲ得ルモノトス、又若シ犯人カ官ニ發見セサル前ニ自首シタルトキハ第四十二條ニ依リ刑ノ減輕ヲ受ク是レ法律カ犯人ノ心情ヲ酌量シテ既ニ其刑ニ減輕ヲ與ヘタルモノナルカ故ニ其以上減輕ヲ與フルノ必要ナキカ如シト雖モ同シク此種類ノ犯人中ニアリテモ憐ム可キ事情ノ下ニ於テ罪ヲ犯ス者ト然ラ

サル者トアルカ故ニ尙ホ裁判官ニ減輕ノ職權ヲ與ヘサル可カラス是レ本條ニ法律ニ依リ刑ヲ減輕スル場合ト雖モ仍ホ酌量減輕ヲ爲スコトヲ得ト規定シタル所以ナリ尙ホ其他從犯未遂罪又ハ瘖啞者ノ行爲等ニ付キテモ本條ニ依リ更ニ酌量減輕スルコトヲ得ルハ勿論ナリトス。

第十三章　加減例

本章ニ所謂加減例トハ舊刑法第一編第三章加減例及ヒ第六章加減順序ノ二章ヲ合シタルモノナルカ故ニ本章規定ノ內容ハ法律上刑ノ加重減輕スヘキ必要アリタル場合ニ如何ナル方法ニヨリテ加減ヲナシ又刑ヲ加減スヘキ場合ノ併發シタルトキハ如何ナル方法ニ從フヘキヤニ關スル準繩ヲ定メタルモノナリ蓋シ刑法ハ罪質ニ相當スル一定ノ刑ヲ規律スルモ又罪性ノ如何ニヨリテハ更ニ其行爲ト刑罰トノ權衡ヲ量ランカ爲メニ裁判官ヲシテ適從セシムヘキ各種ノ規定ヲ設ケテ實際上刑ノ適用ニ關シ遺漏驛欹ナカラシメンコトヲ期セシム而シテ刑ノ加重輕減ヲナスヘキ原因ハ或ハ罪獨ニ生スルコトアリ或ハ數個ノ原因同時ニ併發スルコトアリ前者ノ場合ニハ別ニ疑義ノ存スルナキモ後者ノ場合ニハ其適用ノ前後スルニヨリ犯人ニ影響スル利害ノ關係小ナラストセス是レ本條ノ規定アル所以ニ外ナラス

第六十八條　法律ニ依リ刑ヲ減輕ス可キ一個又ハ數個ノ原由アルトキハ左ノ例ニ依ル

一　死刑ヲ減輕ス可キトキハ無期又ハ十年以上ノ懲役若クハ禁錮トス

二　無期ノ懲役又ハ禁錮ヲ減輕ス可キトキハ七年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮トス

三　有期ノ懲役又ハ禁錮ヲ減輕ス可キトキハ其刑期ノ二分ノ一ヲ減ス

四　罰金ヲ減輕ス可キトキハ其金額ノ二分ノ一ヲ減

ス

五、拘留ヲ減輕ス可キトキハ其長期ノ二分ノ一ヲ減
ス

六、科料ヲ減輕ス可キトキハ其多額ノ二分ノ一ヲ減
ス

本條ハ法律上刑ノ減輕ヲナスヘキ一個又ハ數個ノ原因存スルトキニ準據スヘキ標準ヲ定メタルモノナリ

本法ハ舊刑法ニ於ケルカ如ク刑ノ種類ヲ細別セス刑名ヲ減少シテ專ラ刑ノ範圍ヲ廣大ニシタル結果減輕ノ分量ヲ定ムル方法ニ至リテモ舊法ト異ナリ舊法ハ其第六十六條以下第七十二條ニ亘リテ鎖細ナル規定ヲ設クルモ本法ハ縱ニ本條ニ於テ法律上ニ於ケル減輕ノ場合ヲ規定シ其第一號乃至第六號ニ揭クル標準ニヨルヘキモノトセリ詳言スレハ本條第一號乃至第六號ハ實際ノ場合ニ於テ適用スヘキ適宜ノ範圍ニ減輕ヲ施スヘキ標準並ニ順序ヲ定メタルモノナリ

然リ而シテ本條ニ規定スル所ハ獨リ法律上ニ於ケル減輕ノ場合ノミニシテ加重ノ例ヲ示サヽルハ法律上加重ニ關スル規定ハ既ニ再犯及ヒ併合罪ノ各章ノ下ニ於テ明ニシタルヲ以テナリ

如斯舊法ニ於テハ刑ノ種類ヲ細別シ多クノ階級ヲ設ケ加減ノ原因數個アルトキハ一個毎ニ加減ヲナスコトヽシタルモ本條ハ刑名ヲ簡潔ニ且其範圍ヲ擴張シタルヲ以テ其原因ヲ一個毎ニ加減セハ其結果トシテ著シク刑ヲ輕キニ失セシムル恐アルヲ以テ本法ニ於テ減輕ノ原因數個アルモ之ヲ合シテ一個トシ一度刑ヲ減輕スルニ止ム然レトモ酌量減輕ニ至リテハ第六十七條ニ規定スルカ如ク其原因自カラ別途ニ出テ全ク裁判上ニノミ存スルモノナレハ其減輕ノ有無ハ一ニ裁判官ノ認定スル所ニ依ラシムルカ故ニ他ノ原因ト獨立シテ加重減輕ス可キ場合ト雖モ仍ホ酌量減輕スルコトヲ得セシム(第六十七條參照)

第六十九條　法律ニ依リ刑ヲ減輕ス可キ場合ニ於テ各本條ニ二個以上ノ刑名アルトキハ先ツ適用ス可キ刑ヲ定

又其刑ヲ減輕ス

本條ハ法律上減輕ノ必要アル場合ニハ必ス先ツ其本刑ヲ定メサルヘカラサルコトヲ規定シタルモノナリ

既ニ述ヘタルカ如ク本法ニ於テハ專ラ刑名輕少シ其範圍ノ擴張セラレタル結果其裁量ハ之ヲ裁判所ノ自由ニ任シタル場合多シ從テ各本條ニ於テ二個以上ノ刑名ヲ定メタル場合ニハ裁判所ハ先ツ其一ヲ選ヒテ本刑トシ而シテ後刑ヲ減輕セサルヘカラサルナリ

第七十條　懲役、禁錮又ハ拘留ヲ減輕スルニ因リ一日ニ滿タサル時間ヲ剩ストキハ之ヲ除棄ス

罰金又ハ科料ヲ減輕スルニ因リ壹錢ニ滿タサル金額ヲ剩ストキ亦同シ

本條ハ法律上ハ減輕ヲナスニ際シ自由刑ニ付キ一日(第一項)財産刑ニ付キ壹錢(第二項)ニ滿タサル時間若クハ金額ヲ剩ストキハ之ヲ除去スヘキコトヲ明ニシタルモノナリ

法律上減輕ノ方法ハ即第六十八條ニ定メタル所ニシテ同條ニヨレハ刑期金額ノ二分ノ一ヲ減スル場合アルヲ以テ實際ノ適用上時トシテ減輕ノ結果一日未滿ノ時間若クハ壹錢未滿ノ金額ヲ剩餘スルコトナキニアラサルヘシ今若シ此剩餘ノ時間若クハ金額ヲ嚴格ニ科刑セントスルトキハ實際上ノ不便尠ナカラストセス又必スシモ强ヒテ之ヲ科刑スルノ必要ヲモ見ス故ニ法律ハ寧ロ之ヲ除棄スルヲ允當トナシタルナリ

而シテ本條ハ舊刑法第七十三條ヲ修正セルモノニシテ舊刑法ニハ獨リ體刑ノ場合ノミノ規定アリテ罰金科料ニ關シテハ何厘何毛ノ如キ小數ヲ生スルモ法律ハ除去ヲ命セサリシカ本法ニ至リテ本條第二項ノ規定ヲ置キ之カ缺如ヲ補正シタルモノトス

第七十一條　酌量減輕ヲ爲ス可キトキ亦第六十八條及ヒ前條ノ例ニ依ル

本條ハ酌量減輕即チ裁判上ハ減輕ヲナスヘキ標準ヲ與ヘタルモノトス

本法ハ第十二章第六十七條ニ規定シタルカ如ク法律上ノ減輕ニ拘ラス更ニ酌量シテ減輕スルコトヲ得ルモノトス蓋シ若シ法律上ノ減輕ニ因ル刑ノ範圍カ犯罪ニ比シテ重キニ失スルノ場合アルトキハ即チ之ヲ調和スルノ方法ナカルヘカラス故ニ若シ此等ノ必要アル場合ニハ法律上ノ減輕ヲナシタル刑ヨリ更ニ第六十八條及ヒ前條ノ例ニ從ヒ減輕ヲナサヽルヘカラス

第七十二條　同時ニ刑ヲ加重減輕ス可キトキハ左ノ順序ニ依ル

一　再犯加重
二　法律上ノ減輕
三　併合罪ノ加重
四　酌量減輕

本條ハ即チ同時ニ刑ヲ加重減輕ス可キ場合ニ準據スヘキ順序ヲ定メタルモノニシテ舊刑法第一編第六章加減順序ノ規定ニ該當スルモノナリ

本法本條ハ加減ノ順序ヲ定ムルニ付キ先ツ第一位ニ再犯加重ヲ置キタリ蓋シ之ヲ先キニシタル所以ハ再犯ノ場合ハ其刑期本刑ノ二倍以下ナルコト(第五十七條參照)ヲ規定シタルカ故ニ若シ之ヲ第一位ニ置カサレハ他ノ減輕ヲ施スモ實益ナク次ニ法律上ノ減輕ヲ置キタルハ各場合ニ於テ各犯罪ニ付キ減輕ス可ク更ニ第三位ニ併合罪ノ場合ニ於ケル加重ヲ置キタルハ併科ノ必要上ヨリ前二ツノ加減例ニヨリ各罪ニ付キ一目刑ヲ定メサルヘカラサルカ為メナリ最後ニ酌量減輕ヲ置キタルハ本來酌量減輕ハ其性質異ナルカ故ニ一ニ裁判官ノ自由ニヨリテ減輕スヘキモノナル結果法律上ノ加重減輕ニ先ツコトヲ得サルハ亦當然ノ順序ナリト云フヘク且法律カ之ヲ認メタル精神一ニ罪情ノ如何ニヨリテ所刑ノ公平ヲ維持センカ為メニ設ケタルモノニ外ナラサルコト自カラ明白ナリト云フヘシ

要之法律上加減ノ順序ヲ一定シタル所以ノモノ蓋シ裁判官ヲシテ其適用ノ順序ヲ裁判官ノ任意ニ托スルコトナク各場合一途ニ出ツルノ方法ヲ定メサル限リハ加減順序ノ如何ニヨリテ甲乙者間ニ不公平ノ刑ヲ受クルコト保シ難キ

ヲ以テホルヘシ

本論 終

各論

第二編 罪

本編ハ各種ノ犯罪ニ關スル特別ノ成立要件及ヒ之ニ伴フヘキ刑罰ヲ規定シタルモノニシテ即チ舊法第二編第三編及ヒ第四編ヲ修正補充シタルモノナリ第一編總則ハ各犯罪ニ通スル一般ノ原則ヲ規定シタルモノニシテ所謂法理ノ神髓ヲ網羅シタルモノナレハ刑法ハ總則ヲ研究スレハ足レリ各論ノ如キ條文ヲ一讀セハ可ナリトハ吾人ノ屢々耳ニスル所ナリト雖モ決シテ然ルヘキモノニアラス、刑法ノ總則ト各論トハ互ニ經タリ緯タルヘキモノニシテ二者相待テ茲ニ初メテ刑法ノ研究ヲ完全ナラシムルモノナリ、例之本編第二十三章ニ所謂賭博及ヒ富籤トハ如何ナル事ヲ指示スルモノナルヤヲ知得スルニアラサレハ假令總則ノ研究ニヨリ罪ニハ犯意及ヒ之ニ伴ヒタル行爲アルヲ要スルモノタルコトヲ明ラカニストモ到底之ノミニ依リテハ完全ナル研究ヲ爲スヲ得サルナリ、從テ本編ノ必要ナルコト決シテ第一編總則ニ讓ラサルナリ、敢テ讀者諸

君此弊ニ陷ラサランコトヲ戒ム

今左ニ本法カ本編規定中舊法ヲ改廢シタル主要ナル點ヲ擧ケテ其理由ヲ説明スヘシ

一舊法ハ全編ヲ別チテ四編ト爲シ第二編以下ニ於テ各種ノ重罪輕罪ヲ大別シテ二トナシ一ヲ公益ニ關スル重罪輕罪、一ヲ身體財産ニ關スル重罪輕罪トセリ、然レトモ此區別タルヤ刑法編纂上何等ノ實益ナキノミナラス却テ疑義ヲ釀生スルノ虞アリトス、蓋シ若シ此區別ノ標準ヲシテ或犯罪ハ直接ニ國家ヲ害シ他ノ犯罪ハ直接ニ一個人ヲ害シテ間接ニ國家ヲ害スルモノナリトノ理由ニ基クモノトシ前者ヲ公罪トシ後者ヲ私罪トセンカ是レ一見明晰ナルカ如シト雖モ元來國家ハ一個人ヨリ集成シタル團體ニシテ國家ト之ヲ組織スル各個人トハ互ニ其利益ヲ共ニスルモノニシテ國家ニ對シテ行ハレタル犯罪ノ害惡ハ國家ノ害惡タルト同時ニ又一個人ノ害惡ナリ亦タ之ト等シク國家ノ一員タル一個人ニ對シテ行ハレタル犯罪ノ害惡ハ其一個人ノ害惡タルト同時ニ又國家ノ害惡ナリ此間何等間接直接ノ區別ヲ立ツルヲ得サルナリ、尚且彼ノ内亂罪ノ如キ場合ニヨリテハ公罪又ハ私罪ノ何レニモ屬スト云フヲ得ヘク又時ニ始メヨリ何レニ屬スト斷定スルヲ得サルカ如キ場合ヲ生スルコトアルヘシ、爰ヲ以テ本法ハ全然此種ノ區別ヲ廢棄シ以テ單ニ廣ク罪ト爲シタルナリ

二舊法ハ第四編ニ於テ違警罪ヲ規定シタリト雖モ前ニ緒論ニ於テ述ヘタルカ如キ理由ノ下ニ本法ハ違警罪中刑法ニ規定スヘキモノハ拘留又ハ科料ニ處スヘキ罪トシテ之ヲ本編ニ收容シ他ノ罪ト共ニ其種類ニ從テ之ヲ各章ニ參酌シ其他ハ悉ク特別ノ立法ニ讓ルコトヽ爲シタリ

三舊法ノ罪目中他ノ法令ノ罰則ト相俟テ行ハルヘキモノ少ナカラス抑モ此等ノ罪目ヲ刑法ニ規定スルハ實際上極メテ不便ナルノミナラス往々他ノ法令ノ罰則ト抵觸シ或ハ重複シテ解釋上ノ困難ヲ生スルコト敢テ尠シトセス、是ヲ以テ本法ハ此等ノ規定ハ成ル可ク之ヲ特別法ニ讓ル目的ヲ以テ著シク舊法ノ罪名ヲ減少シタリ例之舊法第二編第三章第五節、第五章第三節、第四節及ヒ第五節等ニ規定スル罪ノ如キ即チ是ナリトス、尚ホ舊法第二編第三章中ノ第九節同上第四章中ノ第七節、第八節及ヒ第九節、同上第五章中ノ第六節等ハ凡テ他ノ

法令ニ讓ルハ目的ヲ以テ本法ハ之ヲ删除シタリ、之ト共ニ舊法ニハ國交ニ關スル罪ノ規定ヲ缺クヲ以テ本法ハ本編第四章ニ之ニ關スル規定ヲ新設セリ

四　前ニ述ヘタルカ如ク舊法ハ法典編纂ノ體裁上編章節ニ三分スト雖モ本法ハ之ヲ編章ニ二分スルニ過キサルカ故ニ其結果曾テ舊法ニ於テ章中ノ數節ヲ爲セルモノニシテ本法ニ至リ一章トナリ或ハ獨立ノ一節ナリシモノハ別レテ二章トナリ又ハ他章中ニ收容セラルヽニ至リタルモノアルヲ見ル例之舊法第三章中第三節ハ別レテ本法ノ第六章及ヒ第七章トナリ、同上第四章第三節第四節第五節ハ合シテ第十七章ニ規定セラレ、同上第三編第一章中ノ第五節ハ第二十六章中ニ收容セラレ、同上第二章中第一節及ヒ第二節ハ合シテ第三十六章トナリ、同上第九節第十節ハ合シテ第四十章トナレルカ如シ

五　本法其規定ノ内容ヲ同ウスルモ用語ヲ改正シタルモノ又尠ナカラス例之兇徒聚衆罪ヲ騷擾ノ罪ニ、官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪ヲ公務ノ執行ヲ妨害スル罪ニ、謀殺故殺ヲ殺人罪ニ、毆打創傷ノ罪ヲ傷害ノ罪ニ、遺失物埋藏物ニ關スル罪ヲ横領罪ニ改メタルカ如キ即チ是レナリ。

以上ハ本法カ改正ヲ施シタル概要ナリトス詳細ハ更ニ各章下ニ至リ之ヲ論スヘク茲ニ之ヲ贅セサルヘシ

第一章　皇室ニ對スル罪

本章ハ天皇以下皇族ノ御身體ニ對スル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第二編第一章ノ規定ヲ少シク修正シタルニ止リ其趣旨ニ於テハ全ク同一ナリトス只其修正シタル主要ノ點ハ舊法ハ本章ノ罪ニ對シ附加ノ罰金刑ヲ科スルコトアリシト雖モ本法ハ本罪ノ性質上單ニ懲役ノミヲ科スルヲ以テ足レリトシ罰金ヲ科スルコトヲ止メタルト、舊法ハ本章不敬罪中ニ神宮ニ對スル不敬ノ所爲ヲ罰スル規定ナカリシモ本法ハ之ヲ皇陵ニ對スル不敬ノ所爲ト同一ニ罰スルコトヽ爲シタルニアリ。

本章所謂皇室ニ對スル罪トハ天皇以下皇族ノ御身體ハ勿論皇室ニ屬スル財産ニ對スル罪マテヲモ尙ホ之ヲ包含スルカ如キ觀アリト雖モ本罪ノ沿革上ヨリ考ヘ且ツ後ニ述フルカ如キ危害云々ノ文字ヨリ推ストキハ本罪ハ唯天皇以

下皇族ノ御身體ニ對スル罪ヲ規定シタルニ過キサルモノトス故ラニ如斯廣漠ナル文字ヲ用ヰタルハ是レ蓋シ皇室ノ御尊嚴ヲ瀆シ奉ランコトヲ慮カリタレハナルヘシ

第七十三條 天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

本條ハ各陛下及ヒ殿下ニ對シ奉ル所謂危害罪及ヒ其未遂罪ヲ規定シタルモハニシテ舊法第百十六條ト其趣旨ヲ同ウス唯舊法ニ三后トアルヲ本法ハ太皇太后、皇太后皇后ト改メ且ツ皇室典範ノ規定ニ準據シテ皇太孫ヲ加ヘ奉リタルニアルノミ（皇室典範第十五條參照）

本條規定ノ犯罪成立ニハ次ノ二條件アルヲ要ス即チ第一天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太孫ニ對シ奉ルコト、第二御身體ニ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルコト是レナリ

第一、天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太孫ニ對シ奉ルコトヲ要ス、

(一)天皇トハ皇室典範第一章ノ規定ニ基キ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ現ニ大日本帝國ヲ統治シ給フ所ノ御方ヲ奉稱スルモノトス、從テ外國君主大統領ヲ含マサルコトハ勿論假令嘗テ萬世一系ノ帝位ヲ踐マセラレタル御方ト雖モ一旦皇位ヲ去リ給ヒタルトキハ茲ニ所謂天皇ニアラス蓋シ古來我國ノ慣例ニヨレハ天皇ニシテ御在世中皇位ヲ去リ給フコト屢々之レアリテ而モ此等ノ御方ヲ太上天皇ト稱シ奉リタルコトアルモ現行皇室典範ノ規定ニヨレハ天皇御在世中皇位ヲ去リ給フコトナキヲ以テ太上天皇ノ制ハ既ニ廢セラレタルモノト云ハサルヘカラス（皇室典範第十條參照）舊法編纂ノ當時ニアリテハ或ハ天皇以外ニ太上天皇ヲモ舊法文中ニ包含セシムルノ意ナリシナランモ憲法幷ニ皇室典範ノ制定アリテ以後ハ此場合ナキニ至リシモノトス、亦タ假令然ラストスルモ單ニ天皇ト謂フトキハ我國ヲ統治セサセ給フ所ノ君主即チ一天萬乘ノ主權者ヲ奉稱スルノ謂ニシテ天ニ二日ナク國ニ二君ナシ吾人臣民タル者同時ニ二人ノ君主ヲ奉戴スルコトアルヲ得ス從テ何レニセヨ茲ニ天皇ト稱シ奉ルハ太上天皇ヲ包含セサルモノナリトス。

(二)太皇太后トハ先先帝ノ皇后ヲ奉稱シ(三)皇太后トハ先帝ノ皇后ヲ奉稱ス

從テ今上天皇ノ御母又ハ御祖母ハ常ニ必スシモ皇太后又ハ太皇太后ニアラサルヘシ蓋シ皇族支系ヨリ入リテ大統ヲ繼カセ給フトキニ往々此例アルヲ見レハナリ。

(四)皇后トハ皇室典範第十六條ノ規定ニヨリ皇后ニ立タセラレタル御方ヲ奉稱ス。

(五)皇太子トハ皇室典範第十五條及ヒ第十六條ノ定ムル所ニ依リ皇太子ニ立タセラレタル御方ヲ奉稱ス。

(六)皇太孫トハ皇室典範第十五條ニ據リ皇太子在ラサルトキ儲嗣タル皇孫ニシテ皇太孫ニ立タセ給フ御方ヲ奉稱スルモノトス。

第二、御身體ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルコトヲ要ス

茲ニ所謂危害トハ文字上ヨリ見レハ身體及ヒ生命ニ對スル害ト云フカ如キ制限的解釋ヲ爲スヲ得サルカ如シト雖モ如斯解釋セサルヘカラサルニハ二個ノ理由存ス蓋シ一ハ他ノ法文トノ比較ヨリ來ル所ニシテ即チ物ニ對スル加害行爲ナルニ於テハ通常損壞、毀損、破毀等ノ語使用セラレ居レリ而シテ他ノ一ハ本罪ノ沿革上ヨリ來ル所ニシテ本罪ノ規定ヲ生出シタル佛文草案第百三十一條及ヒ舊法草案第三百三十一條ヲ案スルトキハ本罪ハ疑ヒモナク身體ニ對スル加害ノ所爲ヲ規定シタルモノナルコト明ラカナリトス然ラハ苟クモ身體ニ對スル加害ノ所爲ハ生命ニ對スルト身體即チ肉體ニ對ズルト自由ニ對スルト榮譽ニ對スルトニ論ナク總テ之ヲ包含スルモノナルヤト云フニ蓋シ本章ニ於テハ別ニ不敬罪ナルモノヲ設ケアルヲ以テ榮譽ニ對スル加害ノ所爲ハ之ヲ除外シタルモノニシテ唯生命身體自由ニ對スル加害ノ所爲ヲ規定シタルモノト云ハサルヘカラス、

本條所謂危害ヲ加ヘタルトハ各陛下又ハ殿下ノ玉體御生命等ニ對シ奉リ兇行アリタルカ若クハ自由ヲ侵シ奉ル所爲アル場合ヲ云フモノニシテ其成立要素トシテハ只加害ノ意思ト其所爲アルヲ以テ足レリトス從テ例ヘハ若シ恐レ多クモ陛下又ハ殿下ヲ弑シ奉ラント欲シテ遂ケス僅カニ微傷ヲノミ負ハセ奉リタル者アリトセハ是レ其犯人ハ君主ノ身體ヲ害シ奉ラント云フカ如キ漠然タル意思ニ因リテ此兇行ヲ爲シタルニ非スシテ之ヲ弑シ奉ラントノ特定ノ意

思ヲ以テ其事ヲ行ヒタルモ未タ其目的タル所爲ヲ遂ケサルモノナルカ故ニ之ハ危害ヲ加ヘタルモノニ非スシテ危害ヲ加ヘントシタルモノナリト謂フヲ得ヘキカ如シト雖モ本罪ノ要求スル所ハ意思ハ決シテ斯ノ如ク特定ノモノニアラサルナリ苟クモ廣キ意味ニ於テ身體ニ害ヲ加フルノ意思ト害ヲ加ヘタルハ所爲トアルトキハ常ニ危害ヲ加ヘタルノ罪ヲ以テ擬スヘキモノトス(此事ニ付キテハ後ニ述フル所ノ第七十五條ノ釋義ヲ參照セラレタシ)

本條所謂危害ヲ加ヘントシタルトハ各陛下又ハ殿下ニ對シ奉リ危害ヲ加フル意思ヲ以テ兇行ヲ實行セントシタル決心ヲ事實上ニ顯ハシタルモ未タ玉體ニ對シ奉リ加害行爲ナカリシ場合即チ上述危害罪ノ未遂犯ヲ意味スルモノナリトス蓋シ本罪ハ危害ヲ加ヘタル所爲ト意思トアルヲ以テ其要求條件ヲ充實スルカ故ニ其之ニ對シテ危害ヲ加ヘントシタルトハ是レ明ラカニ意思ハ危害ヲ加フルニ在ルモ所爲ノ未タ之ニ及ハサル場合ヲ意味スルモノニシテ明文上意思ト所爲トノ會合ヲ認メサレハナリ從テ之ハ危害罪ノ未遂罪以下ヲ意味スルモノニシテ何等一個獨立ノ犯罪ヲ規定シタルモノニ非サルナリ而ラハ茲ニ危害ヲ加ヘントシタルトハ危害罪ノ未遂犯以下何レマテヲ包含スルモノナルヤ蓋シ其用語極メテ廣濶ニシテ單ニ文字上ニ於テハ劃然タル標界ヲ定ムルヲ得サルカ故ニ其用語自身ハ無制限ニシテ上ハ着手若クハ缺效未遂ヨリ下ハ決心ニ至ルマテ悉ク之ヲ包含セシムルヲ得ルモノト云ハサルヘカラス且ツ本罪ノ如キハ實ニ大罪中ノ大罪ニシテ非常ノコトニ屬スルヲ以テ茲ニ危害ヲ加ヘントシタルトハ上ハ着手若クハ缺效未遂ヨリ下ハ豫備及ヒ陰謀ヲモ包含スルモノトス但シ決心ニシテ未タ陰謀ト云フヲ得サルモノハ刑法ノ大原則上之ヲ罰スル能ハサルコト勿論ナリトス尚ホ且ツ本罪如何ニ大罪ナリトハ云ヘ危害ヲ加フルノ意思ナク知ラス識ラス危害ヲ及ホシタルカ如キ場合ニ於テモ本條ニヨリ論スヘキモノニアラサルコト勿論ナリトス(第三十八條參照)

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ死刑ニ處スヘキモノトス

第七十四條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス

神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同シ

本條第一項ハ各陛下及ヒ各殿下ニ對シ奉ル不敬罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百十七條ニ該當スルモノトス。

本罪ノ成立ニハ第一天皇太皇太后皇太后皇后皇太子又ハ皇太孫ニ對シ奉ルコト及ヒ第二不敬ノ行爲アリタルコトノ二條件ヲ必要トス。

第一、天皇太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ奉ルコトヲ要ス。天皇陛下及ヒ各殿下ノ説明ハ前條既ニ述ヘタルヲ以テ玆ニ之ヲ贅セス、只玆ニ一言スヘキハ御歴代ノ天皇ニ對スル不敬ノ所爲モ又本條ニ依リ罰スヘキモノナルヤ否ヤニアリ從來此問題ニ付キテハ議論ノ存スル所ナリト雖モ前述ノ如ク法文所謂天皇トハ現代ノ陛下ヲ奉稱スルノ意ナルカ故ニ御歴代ノ天皇ハ之ヲ包含セサルモノト信ス但シ若シ御歴代ノ天皇ニ對スル不敬ノ行爲延テ現帝ノ御尊嚴ヲ瀆シ奉ルトキハ本條ニヨリ罰スヘキモノナルコト勿論ナリトス

第二、不敬ノ行爲アリタルコトヲ要ス、玆ニ所謂不敬ノ行爲トハ皇室ノ尊嚴ヲ汚瀆スル性質ノ所爲ヲ云フモノニシテ各陛下又ハ殿下ニ對シ奉リ罵詈、嘲笑、誹毀又ハ侮辱シタルカ如キ所爲アリタルトキハ勿論其他ノ所爲ト雖モ苟クモ各陛下又ハ殿下ニ對シ奉リ不敬ノ所爲アリト認ムルモノハ皆以テ不敬罪タルヘキモノトス、又法律何等手段方法ヲ限定セサルヲ以テ其言語ヲ以テスルト文書ヲ以テスルト擧動ヲ以テスルト公然タルト否ト又其積極的タルト消極的タルトヲ問ハサルナリ、斯ク其範圍極メテ廣大ナリト雖モ之ヲ罪トシテ論スルハ不敬ヲ加フルノ意思アル所爲ニ限ルモノトス從テ彼ノ田夫野人カ車駕御通過ノ際感涙ノ餘リ賽錢ヲ投シタルカ如キ假令其結果ニ於テ不敬ト爲ルヘキ所爲アルモ何等不敬ヲ加ヘントノ意思ナキモノナルヲ以テ本罪ニ據リ論スヘキモノニアラス先年彼ノ田中正造翁カ陛下貴族院ニ行幸鳳輦御還幸ノ途路鑛毒事件ニ關スル直訴ヲ企テタルカ如キ不敬ヲ加フルノ意思ナキモノトシテ不問ニ附セラレラルハ其好適例ナリトス。

以上ノ條件ヲ具備スルニ於テハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

本條第二項ハ神宮又ハ皇陵ニ對スル不敬罪ヲ規定シタルモノナリ、玆ニ所謂

神宮トハ伊勢ノ宗廟大神宮ヲ指稱スルモノニシテ我國ノ傳說幷ニ吾人臣民ノ信仰上之ヲ以テ皇祖ノ祖先トシテ尊敬シツヽアルカ故ニ天皇ノ御陵ト何等輕重ノ差異ナキモノナリ是レ本法カ新ニ之ヲ以テ本罪ノ客體ト爲シタル所以ナリ又茲ニ皇陵トハ御歷代ノ天皇ノ御墳墓ヲ指スモノナリトス蓋シ之ニ付キテハ御歷代ノ天皇ノ外ニ三后及ヒ皇太子ノ御墳墓ヲモ同シク皇陵ト解スヘシトノ異說アリ然レトモ單ニ文字上ノ解釋トシテモ曾テ御位ニ即カセラレタル所謂歷代ノ天皇ノ御墳墓ノミヲ指スモノト爲スヲ正當トスヘシ。

右神宮又ハ皇陵ヲ汚損、毀壞、發掘其他不敬ノ所爲アリタルモノハ前項同樣三月以上五年以下ノ懲役ニ處スヘキモノハトス。

終リニ一言スヘキハ本條所謂不敬罪ニ豫備又ハ未遂犯アリヤ否ヤノ問題ナリトス若シ不敬ナル文字カ或ル所爲ノ狀然ヲ意味スルモノナリセハ豫備又ハ未遂ト云フカ如キ種々ノ狀態アルヲ得ヘシト雖モ元來不敬トハ法律カ或ル具象的事實ヲ取リテ之ニ或ル形容的即チ抽象的名稱ヲ附シタルモノニシテ現ニ行ハレタル具象的行爲カ法律上不敬ト形容スヘキモノナルヤ否ヤニヨリ不敬カ然ラサルカノ一ニ歸スルモノニシテ不充分ナル不敬又ハ不敬ノ豫備ナルモノヲ想像スルコトヲ得ス從テ本罪ハ豫備又ハ未遂犯ナルモノハ之レナシト云ハサルヘカラス。

第七十五條　皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處シ危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期懲役ニ處ス

本條ハ皇族ニ對シ奉ル危害罪及ヒ其未遂罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百十八條ニ該當スルモノトス。

本條ノ成立ニハ第一皇族ニ對シ奉ルコト及ヒ第二御身體ニ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルコトノ二條件ヲ必要トス

第一、皇族ニ對シ奉ルコトヲ要ス、

茲ニ所謂皇族トハ皇室典範第三十條ニ所謂皇族ノ中ヨリ皇太子、皇太孫、皇后皇太后、太皇太后ヲ除キタル以外ノ皇族即チ皇太子妃、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王ヲ指稱シ奉ルモノトス蓋シ皇太子、皇太孫、皇后、皇太后、太皇太后ニ付キテハ本章別ニ規定スル所アレハナリ。

第二、御身體ニ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルコトヲ要ス、

茲ニ所謂危害ヲ加ヘタルトハ前第七十三條ニ説明シタルカ如ク犯人ニ於テ謀殺又ハ故殺ト云フカ如キ特定ノ意思アル特定ノ行爲ヲ遂クルコトヲ要セス苟クモ廣キ意味ニ於テ身體ニ害ヲ加フルノ意思ト害ヲ加ヘタルノ所爲トアルトキハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス蓋シ然ラサルニ於テハ例ヘハ恐レ多クモ皇族ニ傷害ヲ與ヘ奉ラント欲シテ其事ヲ遂ケタル者ハ危害ヲ加ヘタルモノトシテ死刑ニ處セラルニモ拘ラス皇族ヲ弑シ奉ラント欲シテ遂ケサルモノハ假令因テ重傷ヲ負ハシメ奉リタルモ危害ヲ加ヘントシタル者トシテ却テ無期懲役ニ處セラルヽノ不都合ヲ生スヘケレハナリ、尚ホ本條危害ヲ加ヘントシタル者トハ前同樣危害ヲ加ヘタルモノヽ未遂罪ナリトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ其加ヘントシタル者ハ無期懲役ニ處セラルヘキモノトス。

第七十六條 皇族ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ皇族ニ對シ奉ル不敬罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百十九條ニ該當スルモノトス、茲ニ所謂皇族及ヒ不敬罪ノ如何ナルモノナルヤハ既ニ前二條ニ於テ説明シタルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セサルヘシ、本罪ヲ犯シタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

第二章 内亂ニ關スル罪

本章ハ舊法第二編第二章第一節ノ規定ヲ改廢修正シタルモノナリ、蓋シ舊法ニアリテハ第二編第二章ヲ國事ニ關スル罪ト爲シ更ニ之レヲ内亂罪及ヒ外患罪ニ區別スト雖トモ此ノ二罪ハ其ノ性質同一ナラス即チ國事ニ關スル罪ハ主トシテ内國ニ於ケル暴動即チ本章規定スル所ノモノヲ意味シ外患罪ハ主トシテ我カ帝國ヲ侵害セントスル外敵行爲ヲ謂フモノトス、是ヲ以テ本法ハ此ノ二種ノ罪ヲ別チテ全ク別章トナシ國家内部ニ於ケル暴動ヲ内亂罪トシテ本章ニ規定シ國家ノ外部ヨリ我統治權ノ主體ニ對スル攻撃ハ之レヲ外患罪トシテ次章ニ規定スルコトヽ爲シタリ、尚ホ舊法第百二十三條第百二十四條及ヒ第百二

十八條ハ共ニ其ノ必要ナキヲ以テ本法ハ之レヲ刪除シタリ。

抑々本章ニ規定スル罪ハ國家ノ生存ヲ危クスルモノニシテ危險ノ程度極メテ重大ナリト雖トモ其ノ犯人タルヤ敢テ自己ノ利益ノ爲メニ之レヲ企ツルニ非スシテ多クハ公衆ノ利益ヲ目的トシテ之レヲ行ハントスルモノナリ此ノ故ニ此等國事犯人ニ對シ通常ノ犯人ニ科ス可キ懲役ノ刑ヲ科スルハ罪ノ性質ト刑ノ種類ト相應セスシテ全ク科刑ノ趣旨ニ反スルノ嫌アルヲ以テ本章ニ於テハ本法ハ舊法ト等シク禁錮ノ刑ヲ科スルコトヽ爲シタリ。

第七十七條　政府ヲ顚覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的トシテ暴動ヲ爲シタル者ハ内亂ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁ハ死刑又ハ無期禁錮ニ處ス

二　謀議ニ參與シ又ハ群衆ノ指揮ヲ爲シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ禁錮ニ處シ其ノ他諸般ノ職務ニ從事シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

三　附和隨行シ其ノ他單ニ暴動ニ干與シタル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之レヲ罰ス但シ前項第三號ニ記載シタル者ハ此ノ限リニ在ラス

本條ハ内亂罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百二十一條ニ該當スルモノナリ蓋シ舊法ニアリテハ内亂ヲ起シ云々トアルモ斯クスレハ往々國内ニ於ケル現實ノ戰爭開始ノ場合ノミヲ意味スルヤノ疑義アルヲ以テ本法ハ之レヲ暴動ヲ起シ云々ト改メ未タ戰爭ニ至ラサル狀況ニアルトキト雖トモ既ニ暴動ヲ爲ストキハ本條ノ罪タルコトヲ明ラカニシ以テ内亂ノ意義ヲ擴張スルコトヽ爲シタリ尚ホ舊法ハ其ノ第一號ニ於テ首魁及ヒ敎唆者ハ死刑ニ處スト規定シタルモ本法ハ既ニ總則ニ於テ首魁ノ敎唆者ヲ罰シ得ヘキコトヽ爲シタルヲ以テ特ニ内亂自體ノ敎唆者ヲ罰スル必要ナキカ故ニ本條ニ於テ單ニ首魁ハ死

刑又ハ無期禁錮ニ處スト改メタリ、本條第二號ノ規定ハ舊法ノ其ト同一ナルモ只樞要ノ職務トアルハ意義不明ナルヲ以テ本法ハ之レヲ謀議ニ參與シト改メ以テ其ノ據ル可キ標準ヲ明瞭ナラシメタリ。

本條所謂內亂罪ノ成立ニハ朝憲ヲ紊亂スルヲ目的トシタルコト及ヒ暴動ヲ起シタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的トシタルコトヲ要ス。

本條第一項ニ政府ヲ顚覆シ又ハ邦土ヲ潛竊シ其ノ他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的トシ云々ト規定シタルニヨリ政府顚覆邦土僭竊ハ朝憲紊亂以外ノ行爲ナルヤノ觀ナキニアラスト雖トモ此ノ二者共ニ朝憲紊亂ノ重ナル例示タルニ過キス而シテ茲ニ政府顚覆トハ政治ノ中樞ヲ破壞セントスルヲ謂フニシテ帝國ヲ變シテ共和國トシ若クハ現在ノ皇統ヲ廢シテ更ニ他ノ帝國ヲ組織セントスルカ如キヲ謂フモノトス、邦土ノ僭竊トハ領土ノ一部ニ對シ帝國主權ノ實力ヲ排除セントスルノ謂ニシテ我カ帝國領土ノ一部ニ割據シテ獨立ヲ企ツルカ如キ或ハ現政府ノ一部ヲ顚覆セントスルカ如キヲ謂フモノトス、然レトモ本條ニ所謂朝憲紊亂トハ如何ナル意義ナルカ法律ハ何レノ處ニ於テモ之レヲ定義セスト雖トモ恐ラク茲ニ朝憲紊亂トハ國家ノ政治的秩序若クハ組織ヲ紊亂スルコトヲ意味スルモノニシテ國家ノ政治秩序若クハ組織ハ憲法ノ定ムル處ナルカ故ニ畢竟朝憲紊亂トハ憲法ノ變更ヲ意味スルモノハナラン然シ之レヲ以テ直チニ形式的憲法即チ現行ノ制定憲法ヲ指稱スルモノト謂フ可カラス要スルニ是レヲ實質的ノ意味ニ解ス可ク結局國家存立ノ基本制度ヲ指スニ外ナラサルナリ、從テ彼ノ皇位繼承ノ順位ヲ變更シ代議制ヲ變シ奴隸制度ヲ設ケントスルカ如キ皆朝憲ヲ紊亂スルモノタル可シ。

而シテ此ノ朝憲紊亂テフ目的ハ實ニ緊要ノモノニシテ此ノ目的コソ暴擧暴動トシテ內亂罪タラシムル所以ノモノナリトス蓋シ此ノ目的即チ朝憲紊亂ノ結果ヲ得ントノ希望アリテ始メテ社會ノ組織ニ直接ノ害ヲ與フルモノニシテ若シ此ノ目的ナキトキハ暴動ノ結果如何ニ大ニシテ假令內國ヲ擾亂シタリト雖トモ未タ以テ本條ノ罪ト爲スニ足ラサルナリサレハ此ノ朝憲紊亂テフ暴動ハ原因ハ暴動ノ行爲ヲシテ內亂罪タラシムル唯一ノ要點タルナリ。

第二、暴動ヲ起シタルコトヲ要ス。

暴動トハ多數共同シタル不法ノ腕力又ハ脅迫ヲ謂フ、故ニ多數ノ人員共同シテ腕力ヲ用ヒ又ハ脅迫ヲ加フルコトアルモ之レヲ稱シテ暴動ト云ハンニハ不法ノモノタルコトヲ要ス、又本罪ノ目的ハ既ニ述ヘタル如ク我憲法ヲ變更セントスルカ如キ國家的犯罪ナルヲ以テ一人二人ノ到底企テ及フ所ニ非ス必ス多數合同ノ勢力ニ由テ以テ國家ヲ騷亂セシムルノ所爲アルヲ要ス、但シ共同シタル人員ノ數ニ付キテハ別ニ明文ナキヲ以テ實際ノ事情ニ照シ內亂ト云フニ相當シタル數ニ達シタルコトヲ以テ足ル、而シテ是等多數ノ人員必スシモ皆軍事的訓練アル者タルヲ要セス如何ナル者ト雖トモ多數人共同シテ本條規定ノ目的ヲ有シ以テ不法ノ暴行脅迫ヲナスニ於テハ本罪ノ主體タルコトヲ得ルモノトス、而シテ又其ノ暴行脅迫ハ其ノ人ニ對スルモノハナルト財産ニ對スルモノハナルトヲ區別セス但シ少クトモ一地方ノ人心ヲシテ不安ナラシムル程度ノモノナルコトヲ要ス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ首魁ハ死刑又ハ無期禁錮(第一號)其ノ謀議ニ參與シタルモノ及ヒ群衆ヲ指揮シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ禁錮(第二號前文)其ノ他暴動ノ要スル諸般ノ役務ニ從事シタル者ハ其ノ情狀ニ從ヒ一年以上十年以下ノ禁錮(第二號後文)唯單ニ附和隨行シテ暴動ニ干與シタルニ止マル者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス可キモノトス(第三號)蓋シ本條ノ罪ハ其ノ性質又多數犯人ヨリ成立スル犯罪ナルヲ以テ其ノ組織上首領及ヒ兵卒等ノ階級アリ、階級アルカ故ニ其ノ執ル所ノ職務ニ由リ其ノ罪ニ輕重ナカル可ラス從テ刑罰モ亦多少其ノ情狀ニ依リ差異ナキヲ得ス是レ本條カ役務ノ階級ニ因リ刑罰ヲ區別シタル所以ナリ、而シテ玆ニ(一)首魁トハ內亂軍ノ首領ニシテ全軍ヲ指揮統率スル者ヲ云フ實ニ全軍ノ運動ハ全ク此ノ者ノ方寸ヨリ出ツルモノニシテ內亂罪ハ首魁ノ之レヲ起シタルモノナリト云フモ敢テ不可アルコトナク其ノ情最モ重キモノナルヲ以テ此ニ科スル所ノ刑罰モ亦重カラサルヲ得ス、(二)謀議ニ參與シタル者トハ所謂參謀ノ如キ者ヲ謂ヒ又群衆ヲ指揮シタル者トハ內亂軍ノ一方ノ隊長ト爲リタルモノヲ云フナリ、(三)其ノ他諸般ノ職務ニ從事シタル者トハ所謂士官軍醫軍吏等ノ如キ者ヲ謂フ、次ニ(四)附和隨行シタル者トハ其ノ內亂軍タ

ルコト之レヲ確知スト雖トモ特ニ一定ノ目的アルニアラス唯他人ノ使嗾ニ煽動セラレテ附隨セル者即チ兵卒ノ類ヲ謂ヒ、其ノ他單ニ暴動ニ干與シタル者トハ雇員小使軍吏ノ如キ者ヲ謂フナリ。

本條第二項ハ內亂罪ノ未遂罪ニ付キ規定シタルモノナリ蓋シ以上述フル所ニヨリ明ラカナルカ如ク本罪ハ犯罪自體カ國家ノ存廢ニ關スル最モ危險ナル罪ナルヲ以テ其ノ未遂ノ時ニ於テ之レヲ罰シ事ヲ未發ニ豫防スルノ必要アレハナリ、但シ第一項第三號ニ規定スルカ如キ附和雷同的從犯ハ何等深キ目的アルニアラス單ニ暴動ニ干與シタリト云フニ過キスシテ毫モ危險ナル分子ニアラサルヲ以テ此等ノ者ノ未遂罪ハ之レヲ罰スルノ必要ハ之レナキナリ是レ本條第二項カ前項ノ未遂罪ハ之レヲ罰ス但シ前項第三號ニ記載シタル者ハ此ノ限リニ在ラスト定メル所以ナリ。

第七十八條　內亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處ス

本條ハ舊法第百二十五條ト同一ノ趣旨ニシテ前條ハ豫備陰謀ヲ罰スルコトヲ規定シタルモノトス唯舊法ハ兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ云々トノ豫備ノ方法ヲ例示スト雖トモ本法ハ之レヲ刪除シタリ。

本條所謂豫備トハ內亂首領カ兵隊ヲ招募シ或ハ兵器金穀ヲ準備スル等朝憲ヲ紊亂スルノ目的ヲ遂センカ爲メニ暴動ヲ爲スニ必要ナル準備ヲ爲シタルコトヲ云フモノトス、又陰謀トハ暴動ヲ起スノ準備ニ未タ着手セサル前主謀者二人以上內亂ヲ起ス計畫ニ關スル謀議ヲ爲シタルコトヲ謂フ從テ單ニ內亂ヲ起スノ希望ニ止マラス既ニ二人以上共ニ謀議畫策シテ其ノ犯意ヲ外部ニ發表シタルコトヲ要スルモノトス、而シテ凡テ犯罪豫備陰謀ハ之レヲ罰セサルヲ原則トナスニ拘ラス內亂罪ニ付テ特ニ之レヲ罰スル所以ノモノハ蓋シ此ノ罪タル事體甚タ重大ニシテ實ニ國家ノ安危人民ノ休戚ニ關シ若シ一歩ヲ誤ル時ハ恐ルヘキ結果ヲ生スルニ至ルヲ以テ之レヲ其ノ未發ニ防クノ必要アルヲ以テナリ、然リト雖トモ犯罪ノ豫備陰謀ハ未タ社會ニ何等ノ實害ヲ生セシメタルモノニアラサルヲ以テ之レヲ既遂罪ト同一ニ論スルヲ得ス是レ本條カ此等ノ者ハ一年以上十年以下ノ禁錮ニ處スト規定シタル所以ナリ。

第七十九條　兵器、金穀ヲ資給シ又ハ其ノ他ノ行爲ヲ以テ前二條ノ罪ヲ幇助シタル者ハ七年以下ノ禁錮ニ處ス

本條ハ舊法第百二十一條第三號ノ一部及ヒ第百二十七條ヲ合シ概括的ニ一般ハ內亂ノ幇助ノ場合ヲ罰スル規定ヲ設ケタルモノハニシテ舊法ハ幇助ヲ罰スル場合狹キニ失スルヲ以テ之レヲ補修シタルモノトス。

本條所謂兵器金穀ヲ資給シタル者トハ自カラ內亂軍ニ從事セスシテ唯之レニ兵器軍費又ハ糧食等ヲ寄贈シタル者例之彼ノ四十七士ニ於ケル天野屋利兵衞ノ如キ所爲ヲ爲シタル者ヲ謂フナリ、尙ホ本條所謂其ノ他ノ行爲ヲ以テ前二條ノ罪ヲ幇助シタル者トハ內亂罪又ハ其ノ豫備陰謀ナルコトヲ知リテ犯人ニ集會所ヲ給與シ又ハ兵器ノ製造所船舶等內亂ニ必要ナル物件ヲ資給スルカ如キ或ハ又軍器兵糧其ノ他直接間接ニ內亂軍ノ用ニ供ス可キ物件ヲ藏置スル爲メニ家屋倉庫其ノ他ノ場所ヲ給與スルカ如キ以テ內亂罪ヲ幇助シ便利ヲ與ヘタル者ヲ謂フナリ。

本條ノ罪ハ正犯ヲ幇助シテ內亂罪ヲ容易ナラシムルモノ即チ從犯ニシテ從犯ノ處分ハ第六十二條ニ規定スル所ナリ然ルニ法律カ特ニ本條ノ規定ヲ置キ七年以下ノ禁錮ニ處ストシタル所以ハ是レ內亂罪ノ正犯ハ種々ノ階級アリテ刑亦各々異ナルカ故ニ其ノ孰レノ正犯ヲ標準トシテ其ノ刑ヲ定ム可キヤヲ知ル可カラサルニ因ルモノトス。

第八十條　前二條ノ罪ヲ犯スト雖トモ未タ暴動ニ至ラサル前自首シタル者ハ其ノ刑ヲ免除ス

本條ハ舊法第百二十六條ノ法文ヲ修正シタルモノニシテ即チ內亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ企テ若シクハ是等ノ情ヲ知リテ兵器金穀ヲ資給シ或ハ其ノ他ノ行爲ヲ以テ內亂罪ヲ幇助シタル者其ノ暴動ニ着手セサル前官ニ自首シタルトキハ其ノ刑ヲ免除ス可キコトヲ規定シタルモノナリ。

本條ハ第四十二條規定ノ自首減刑ニ對スル例外規定ナリ即チ第四十二條ノ規定ニ依レハ罪ヲ犯シ未タ官ニ發覺セサル前自首シタル者ハ其ノ刑ヲ減輕スルコトヲ得トアリ、然ルニ本條ハ適用ヲ受ク可キ者ハ犯罪着手前ニ自首シタルコトヲ要シ且ツ其效力ハ單ニ刑ヲ減輕スルニ止マラスシテ其ハ本刑ヲ全免ス

ルモノハトス、是レ蓋シ内亂ハ一旦發生スルニ至リテハ多數ノ人命ヲ喪失ス可ク或ハ巨萬ノ富ヲ損フカ故ニ之レニ因リテ自首ヲ勸誘シ以テ大事ニ至ラサラシメントノ政策ニ出ツルモノトス。

玆ニ注意ス可キハ本條ノ恩典ハ第七十七條規定ノ如キ者ニ及フコトナクシテ單ニ前二條ノ罪ヲ犯シタル者ハミニ適用アルコトナリトス是レ蓋シ内亂ヲ起サントノ決意ヲナスカ如キ者ハ其ノ所爲自體ノ性質上初メヨリ生命ヲ賭スルノ覺悟アルヲ常トスルモノナルヲ以テ此等ノ者ニ對シ自首ノ特例ヲ置クモ實益ヲ見ルコト極メテ稀ナル可キモ之レニ反シテ前二條規定ノ犯人ノ如キハ此ノ如キ鞏固ナル決心アルコトナキカ故ニ之レヲ待ツニ本條ノ特典ヲ以テセハ却テ立法ノ本旨ヲ全フスルコト多ケレハナリ。

第三章　外患ニ關スル罪

本章ハ舊法第二編第二章第二節ヲ修正シタルモノニシテ主トシテ戰時ニ於ケル帝國ノ軍事上ノ利益ヲ保護スル事ヲ目的トス舊法第百三十三條及ヒ第百三十四條ハ寧ロ國交ニ關スル罪ニ屬スヘキモノナルヲ以テ本法ハ之レヲ第四章ニ移シタリ。

抑々外患ニ關スル罪ハ一國ノ對外的安固及ヒ軍備ニ對スル攻撃ニシテ本罪ハ列國對特ノ關係ニ於テ始メテ存在スルコトヲ得ルナリ、即チ内亂罪ト異リ犯人カ帝國ニ對スル忠實ノ義務ニ違背シテ外國ニ與ミスルコトヲ以テ特徴トス從テ本章ニ關スル犯罪ハ戰時ニ關スルモノハナルコトヲ必要トス故ニ一般平時ハ勿論戰爭ハ切迫セル狀態ニ於テモ苟クモ交戰狀態成立セサル以上ハ本章ノ範圍ニ入ラサルモノトス、平時其ノ他本章ニ洩レタル場合ニ關シテハ軍器保護法、要塞地帶法、軍港要港規則等アリ、而シテ戰時ト平時トノ分界ニ關シテハ通例宣戰ノ布告アリタル時ヲ以テ開戰ト看做スヲ原則トス然シ本法ノ適用上ニ付テハ宣戰公布ノ有無ニ關セス國際公法上ヨリ抗敵行爲アリト看做スヲ得ヘキ時ハ裁判所ハ國際公法ノ原則ニ照シ幷戰時期ヲ定ムルコトヲ得ヘキモノトス而シテ又本章ニ規定スル所爲ニシテ或ハ彼ノ軍律ニ規定スルト同一ナルモノアリ故ニ常人ト雖トモ敵前若クハ軍中又ハ臨戰合圍地ニ在リテ此等ノ罪ヲ犯

シタルトキハ軍律ニ從ヒ處斷セラルヘキモノトス、又本法ニ規定アリテ軍律ニ規定ナキ罪ハ軍人軍屬ト雖トモ本法ノ適用ヲ受ク可キモノトス。

本法ハ外患ニ關スル罪ト云フ罪名ノ下ニ二種ノ犯罪ヲ規定セリ第一ハ背叛罪ニシテ又之レヲ別チテ抗敵罪及ヒ敵國幇助罪ノ二トス第二ハ間諜罪ナリ、而シテ尙ホ本法ハ最後ニ包括的規定ヲ設ケテ遺漏ナカランコトヲ期シタリ、舊法ノ外患罪ハ單ニ帝國臣民ニ適用アルニ止マルモ本章ノ規定ハ犯人ノ內外人タルト否ト犯罪地ノ內地ナルト否トヲ區別セサルモノトス（第二條三號參照）

第八十一條　外國ニ通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメ又ハ敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵シタル者ハ死刑ニ處ス

本條ハ背叛罪中ノ抗敵罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百二十九條ヲ修正シタルモノナリ蓋シ舊法ニハ外國ヲシテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシムルノ所爲ニ關スル規定ヲ缺クヲ以テ本法ハ之レヲ補ヒタリ。

本條ハ外國ニ通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメタル罪ト敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵シタル罪トヲ區別シテ規定シタルヲ以テ茲ニ之レヲ各別ニ論ス可シ。

第一、外國ト通謀シテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメタル罪

本罪ノ成立ニハ外國ト通謀シタルコト、及ヒ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメタルコトノ二條件アルヲ必要トス。

（一）外國ト通謀シタルコトヲ要ス。

本條ハ外國ニ通謀スルノ事實ヲ必要トスルカ故ニ通謀ノ事實ナク單ニ一種ノ計畧ヲ以テ外國ヲシテ帝國ニ對シ戰端ヲ開カシムルニ至ラシメタル場合ハ本罪ヲ構成セス而シテ通謀トハ畢竟二人以上ノ間ニ一定ノ罪ヲ犯ス意思ノ共通シタル狀態ヲ謂フモノトス例之日本臣民ニシテ外國ニ對シ日本ト開戰セシムルノ目的ヲ以テ之レニ必要ナル諸般ノ協議ヲ爲スカ如キ是レナリ。

（二）帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメタルコトヲ要ス。

我カ日本帝國ニ對シ戰端ヲ開カシメタルコトヲ要スルカ故ニ實際外國カ我カ帝國ニ對シ抗敵行爲ヲ開始シタルコトヲ必要トス從テ未タ開戰ニ至ラサルトキハ本罪ヲ構成スルコトナキモノトス。

第二、敵國ニ與シテ帝國ニ抗敵シタル罪。

此ノ場合ハ下ノ二要素ヲ以テ成立ス(一)敵國ニ與シタルコト(二)帝國ニ抗敵シタルコト是ナリ。

(一)敵國ニ與シタルコトヲ要ス。

敵國トハ何ソヤ曰ク敵國トハ日本帝國カ戰ヲ宣シタル外國ヲ謂フ而シテ外國トハ日本ノ版圖以外ニ於テ別ニ一定ノ土地ト主權トヲ有セル人民ノ團體ヲ云フモノトス蓋シ刑法上如何ナル場合カ我カ帝國ノ敵國ニシテ又戰爭ナルカハ國際公法上ノ原則ニ因テ決ス可キモノナリ故ニ我カ帝國カ其ノ外國ト國際法上戰爭ト認ム可キ事實ノ開始セサル間ハ未タ以テ敵國ト云フコトヲ得ス從テ國際紛議ニ就キ假令國際談判破裂スルモ仍ホ未タ敵國ニアラス、次ニ與スルトハ合同ノ意ニシテ其ノ意義極メテ廣シ畢竟敵國ノ兵力ノ一部ニ加ハルコトヲ謂フモノトス但シ必スシモ武器ヲ執テ戰鬪ニ加ハルヲ要セス軍隊ノ醫療輜重ノ事ニ從事スルモ可ナリ、舊法ニ於テハ帝國ニ抗敵スル場合敵兵ニ附屬スル場合トヲ區別シタリト雖モ本法ハ兩者ヲ包括シ一般ニ敵兵ニ附屬シ其ノ兵力ヲ構成スルヲ抗敵ト爲セリ。

(二)帝國ニ抗敵シタルコトヲ要ス。

帝國トハ我日本帝國ヲ指ス、抗敵スルトハ兵器ヲ執テ日本國ニ敵對スルヲ謂フ而シテ茲ニ敵對ト云フハ必スシモ已ニ實戰ヲ爲シタルト否トハ敢テ問フ所ニ非ス唯干戈ヲ執リテ日本國ニ敵對スルノ姿勢ヲ執ルヲ以テ足ルモノトス。

以上ノ條件具備スルトキハ第一及ヒ第二ノ場合共ニ之レヲ死刑ニ處ス可キモノトス蓋シ此等ノ犯人ハ我カ帝國ノ獨立ニ危害ヲ加ヘントスルモノナルヲ以テ之レニ科スルニ刑罰ノ極刑ヲ以テスル必要アレハナリ。

第八十二條　要塞、陣營、軍隊、艦船其他軍用ニ供スル場所又ハ建造物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス。

兵器、彈藥其他軍用ニ供スル物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

本條ハ敵國幇助罪ノ一ニシテ即チ軍用ニ供スル物件ヲ敵國ニ交付スル行爲ニ付キ規定シタルモノナリ故ニ舊法第百三十條若クハ以下ノ規定ニ該當ス

ヘキモノハナリ。

本條第一項ハ軍用ニ供スル場所建物等ノ如キ交付ハ比較的重要ナル場合ヲ規定シタルモノニシテ其ノ成立條件トシテハ第一我カ帝國ノ軍用ニ供スル要塞陣營軍隊艦船其ノ他軍用ニ供スル場所又ハ建造物タルコト、及ヒ第二敵國ニ交付シタルコトノ二條件アルヲ必要トス。

第一、要塞陣營軍隊艦船其ノ他軍用ニ供スル場所又ハ建造物タルコトヲ要ス軍用ニ供スルモノトハ軍事上ノ需要ヲ充タス爲メ政府ノ所持シ又ハ所有スルモノヲ謂フ例ヘハ火藥製造所艦船製造所等ノ如シ而シテ政府ノ所持スル場合ニ於テハ個人ノ所有物例ヘハ御用船ノ如キモノト雖モ尚可ナリ又政府ノ所有ニ係ルトキ個人ノ所持ニ屬スルモ尚ホ可ナリ例ヘハ修繕ノ爲メニ個人ニ委託シタルモノヽ如シ、而シテ其ノ直接ニ戰鬪ノ用ニ供ス可キモノナルト否トハ問フ所ニ非ルナリ茲ニ要塞陣營軍隊艦船トハ軍用ニ供スルモノヲ例示シタルニ過キサルモノトス。

第二、敵國ニ交付シタルコトヲ要ス。

交付トハ有償又ハ無償ニテ引渡ストノ意ナルヲ以テ此等ノ物ヲ破壞又ハ毀損シタル場合ニハ假令敵國ヲ利スルノ意思タルモ本罪ヲ構成セサルモノトス故ニ例ヘハ敗軍ノ將カ退却ノ際ニ其ノ兵營ヲ拋棄シテ敵ノ占領ニ放任スルカ如キハ交付ニアラサルヲ以テ本罪ヲ構成セサル可シ、又本條特ニ敵國ニ交付シタル者ト規定シタルヲ以テ我カ帝國カ外國ト戰爭中ニ際シ其ノ外國ニ對シ軍用ニ供スルモノヲ交付シタルコトヲ要スルモノトス。

以上ノ二條件ヲ具備シタルトキハ死刑ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ハ軍用ニ供スル物件ヲ交付シタル場合ヲ規定シタルモノナリ、本罪ノ成立ニハ第一兵器彈藥其ノ他軍用ニ供スル物件タルコト、第二敵國ニ交付シタルコトノ二條件ヲ必要トスト雖モ前述シタル所ト大差ナキヲ以テ茲ニ別ニ説明スルノ要ナシ只本罪ニ付テハ前罪ニ於テ説明シタル以外ノ軍用品タル兵器彈藥金穀被服等ノ物品ニ付キ規定シタルニ過キス而シテ本罪ヲ犯シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處セラル可キモノトス。

軍用ニ供スル土地家屋物件ヲ敵ニ交付スルノ所爲ハ特別法ニモ之レヲ罪ト

スルハ明文アリ即チ軍人軍屬ニシテ之レヲ犯ストキ及ヒ常人ト雖トモ敵前、軍中、臨戰地、合圍地ニ於テ之レヲ犯ストキハ特別法タル陸軍刑法又ハ海軍刑法ヲ以テ處罰セラルヽモノトス(陸軍刑法第五十三條及ヒ第十三條海軍刑法第五十九條及ヒ第四條參照)

第八十三條　敵國ヲ利スル爲メ要塞、陣營、艦船、兵器、彈藥、汽車、電車、鐵道、電線其他軍用ニ供スル場所又ハ物ヲ損壞シ若クハ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

本條ハ敵國幇助罪ノ一即チ軍用ニ供スルモノハ使用ヲ不能ナラシメタル行爲ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法之レヲ缺ケリ蓋シ本條ニ列擧シタル物ヲ毀損シ又ハ之レカ使用不能タラシムルカ如キ行爲ハ實際上頻繁ニ生ス可キ罪ナルヲ以テ刑法ニ之ヲ規定スル必要ヲ感シ本法ハ陸軍刑法第五十八條海軍刑法第六十一條ノ規定ヲ基礎トシテ本條ヲ設ケタルナリ。

本罪ノ成立ニハ次ノ三條件アルヲ必要トス第一敵國ヲ利スル目的ナルコト第二軍用ニ供スル場所及ヒ物ナルコト第三損壞其他使用スルコト能ハサルニ至ラシメタルコト即チ是レナリ。

第一、敵國ヲ利スル目的ナルコトヲ要ス。

本罪ハ我カ帝國ト戰爭ヲ開始シタル外國ニ利益ヲ與フルノ目的ヲ以テ犯サレタルコトヲ要スルカ故ニ未タ我カ國ト戰爭開始セサル外國ニ軍事上ノ利益ヲ與フル爲メ軍用ニ供スル場所又ハ物ヲ損壞シ若クハ使用不能タラシムルコトアルモ本罪ヲ構成セサルモノトス。

第二、軍用ニ供スル場所又ハ物タルコトヲ要ス。

法文列擧ノ要塞、陣營、艦船、兵器、彈藥、汽車、電車、鐵道、電線等トハ單ニ軍用ニ供スル場所又ハ物件ヲ例示シタルニ過キス故ニ其他軍用ニ供スル道路、橋梁、造船所等帝國ノ軍用ニ供スルモノハ總テ本條中ニ包含セラルヘキモノトス。

第三、損壞其他使用スルコト能ハサラシメタルコトヲ要ス。

茲ニ使用不能トハ必スシモ絕對的ニ使用不能ナラシムルヲ要セス其ノ之ヲ

困難ナラシムルモ亦タ本條ニ包含セラル丶モノトス例ヘハ物件ヲ遠隔ノ地ニ運搬シテ放置スルカ如キ又ハ藏匿スルカ如シ。

以上ハ三條件ヲ具備シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處スヘキモノトス。

第八十四條　帝國ノ軍用ニ供セサル兵器、彈藥其他直接ニ戰鬪ノ用ニ供ス可キ物ヲ敵國ニ交付シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス。

本條ハ敵國幇助罪ノ一即ナ軍用ニ供セサル物件ヲ敵國ニ交付シタル行爲ニ付キ規定シタルモノニシテ亦舊法ノ缺如セル所ナリ。

本條所謂軍用ニ供セサル物件ニ就キテハ前條所謂軍用ニ供スル物件ニ反シ直接戰鬪ノ用ニ供ス可キ物ニ限ルナリ、但其所有者又ハ所持者ノ內國人タルト否トヽ又其所在地ハ內地ナルト否トハ問フ所ニ非サルナリ而シテ軍用ニ供セサル物件トハ例ヘハ現時帝國軍隊ニ於テ採用スル以外ノ兵器彈藥ノ如キ物ヲ謂ヒ直接ニ戰鬪ノ用ニ供ス可キ物トハ例ヘハ物ノ性質上軍用品トシテ備フル物ニ屬セサルモ一朝戰端ヲ開ク場合ニ於テハ直接ニ必要ナル物件ヲ謂フナリ。

此等ノ物件ヲ帝國ト交戰中ナル外國ニ引渡シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス可キモノトス蓋シ本罪ハ前條ノ罪ニ比シ情狀稍輕キヲ以テ死刑ニ處セサルモノトス。

第八十五條　敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ幇助シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

軍事上ノ機密ヲ敵國ニ漏泄シタル者亦同シ。

本條ハ間諜罪及ヒ機密漏泄罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百三十一條ノ規定ヲ修正シタルモノナリ蓋シ舊法ハ間諜ノ方法及ヒ敵國ノ間諜幇助ノ方法ヲ示スト雖トモ本法ハ之ヲ刪除シ概括的ノ規定ヲ設ケタリ。

第一、敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲ス罪

本罪ノ成立ニハ次ノ二條件ヲ必要トス即チ敵國ノ爲メナルコト、間諜ヲ爲シ

タルコト是レナリ。

（一）敵國ノ爲メナルコトヲ要ス。

敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲シタルコトヲ要スルカ故ニ帝國カ或ル外國ト交戰中ナルヲ必要トス從テ未タ戰爭ヲ開始セサル平時ニ於テ外國ノ間諜トナルモ本罪ヲ構成セルモノトス、又敵國ノ爲メナルヲ要スルカ故ニ帝國ノ敵手國タル外國ニアラサル第三國ノ爲メニ間諜ヲ爲スモ本罪ニ該當セサルモノトス。

（二）間諜ヲ爲シタルコトヲ要ス。

間諜トハ交戰國ノ一方ノ爲メ扮裝シテ自己ノ眞狀ヲ隱シ自ラ敵國ノ機密事項又ハ圖書物件ヲ探知收集スル者ヲ謂フ、而シテ其間諜ハ我帝國臣民タルト外國人タルトヲ問ハス、又敵國ヨリ報酬ヲ受ケ若クハ受クルノ約束ヲ爲シタルト否トノ如キハ之ヲ問ハサルモノトス、彼ノ舊法例示ノ帝國ノ軍隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ヘ通知スルカ如キ間諜罪ノ最モ普通ナルモノトス。

第二、敵國ノ間諜ヲ幇助スル罪

本罪ノ成立ニハ敵國ノ間諜タルコト、及ヒ幇助シタルコトノ二條件ヲ必要トス。

（一）敵國ノ間諜タルコトヲ要ス。

即チ本罪ノ成立ニハ帝國ノ交戰國タル敵國ノ爲メニ帝國ノ軍狀ヲ探索報告セントスル間諜ヲ幇助シタルコトヲ要ス、而シテ敵國ノ間諜タル以上ハ外國人ニシテ敵國ノ間諜タル者ナルト日本人ニシテ敵國ノ間諜タルモノナルトヲ區別セサルナリ但シ斯クノ如キ場合ニハ其所謂日本人タルモノハ前罪ノ犯人ナルカ故ニ其之ヲ幇助シタル者ハ前罪ノ從犯トナルニ過キストノ說アレトモ是レ曲解ナリ蓋シ間諜ノ日本人ナルト外國人ナルトニヨリ一ハ本罪ニ問ヒ他ハ前罪ノ從犯トシテ之レヲ論シ以テ彼此刑罰ニ輕重ヲ爲ス可キ理由ナケレハナリ。

（二）幇助シタルコトヲ要ス。

間諜幇助トハ帝國ノ軍事機密事項ヲ探知收集セントスル者ヲ或ハ誘導シ或ハ藏匿シ其他ノ便宜ヲ與フル所爲ヲ云フ、而シテ其幇助ノ方法ニ就テハ法文別ニ明示セサルヲ以テ如何ナル方法ニ依リタルヲ問ハス苟クモ敵國ニ便宜ヲ與

ヘタル事實アル以上ハ本罪成立ス而シテ此ノ場合ニ於テハ其ノ敵國ノ爲メニ便宜ヲ與ヘルノ意思ヲ以テ故意ニ幇助シタルヲ要スルヤ勿論ナリトス從テ敵ノ間諜タルコトヲ知ラスシテ之ニ便宜ヲ與ヘタルカ如キハ本罪ヲ構成スルコトナカル可シ

第三　軍事上ノ機密ヲ漏泄スル罪

本罪ノ成立ニハ次キノ二條件ヲ必要トス即チ軍事上ノ機密ナルコト及ヒ敵國ニ漏泄スルコト是レナリ

（一）軍事上ノ機密ナルコトヲ要ス

軍事上ノ機密トハ軍事上ノ事項ニシテ帝國カ外國トノ交戰上之レヲ秘密ニスルノ必要アルモノヲ總稱ス故ニ例ヘハ兵器ノ精粗兵員ノ多寡軍隊ノ進退増減戰鬪ノ場所時日作戰方畧等ニシテ苟クモ秘密ニ屬スルモノハ總ヘテ之ヲ包含ス從テ其ノ事實カ帝國ニ於テ既ニ公然何人モ知ル可キコトニ屬スルトキハ本條ノ問フ所ニ非サルナリ

（二）敵國ニ漏泄スルコトヲ要ス

漏泄トハ所謂通知ト同一ノ意義ナリ然ルニ其之ヲ通知ト言ハスシテ漏泄ト言ヘルハ是レ其通知ノ事項ハ通常敵國ノ得テ知ルヘカラサルモノ即チ秘密ナルカ故ノミ故ニ機密漏泄トハ職務ニ因リテ又ハ偶然ノ原由ニヨリ知得領有シタル帝國ノ秘密事項圖書物件ヲ通知交付スルヲ謂フモノトス而シテ敵國トアルカ故ニ帝國ト開戰シタル外國政府ノ耳朶ニ通スル故意及ヒ所爲アルヲ要ス但シ漏泄ノ方法ニハ制限ナキヲ以テ書面タルト口頭タルト又直接ニ敵國ノ官吏ニ通知スルト臣民ヲ經由シテ間接ニ通知スルトハ問フ所ニ非ルナリ

以上ハ條件具備スルトキハ各其情狀ニ從ヒ死刑又ハ無期懲役若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス可キモノトス而シテ尚ホ軍機保護法ハ一般的ニ軍機ノ漏泄及ヒ秘密ノ場所ニ入ルノ所爲ヲ處罰ス然レトモ本條ハ特ニ戰時ニ於ケル間諜及ヒ秘密漏泄ニ關シ規定ヲ設クルヲ以テ軍機保護法ノ適用ハ本條ノ適用ノ及ハサル所ヲ補フモノト解セサル可カラス

第八十六條　前五條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シ

タル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

本條ハ前五條ニ記載シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘ又ハ我カ帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル罪ニ付キ規定シタルモノナリ故ニ畢竟本條ハ一切ノ場合ニ關シテ遺漏ナキコトヲ期スルノ法條ニシテ舊法ノ全ク缺如スル所ナリ蓋シ前數條ハ種々ノ場合ヲ規定シタルモ尚ホ本章規定ノ犯罪ハ國家ノ生存ニ關スル事體容易ナラサル罪ナルヲ以テ概括シテ廣ク各場合ヲ網羅シ遺ス所ナキヲ要スルカ故ニ本法本條ヲ新設シタルモノナリ。

本條ハ第八十條乃至第八十五條ニ規定シタル以外ノ方法ヲ以テ敵國ニ軍事上ノ利益ヲ與ヘタル罪及ヒ第八十一條乃至第八十五條ニ規定スル以外ノ方法ヲ以テ我帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害シタル罪ヲ規定シタルモノナルヲ以テ彼ノ舊法カ特別規定ヲ設ケテ明示シタル交戰中敵兵ヲ誘導シテ帝國管內ニ入ラシムル罪ノ如キ(舊法第百三十條)又ハ陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又賄賂ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル罪ノ如キ(舊法第百六十二條)總テ本條ニ包含セラルヘク又第百八十一條以下ニ規定シタル罪ノ從犯モ本條ニ入ルヘク總則從犯ニ關スルノ規定ヲ適用スルノ餘地ナカル可シ

第八十七條　前六條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ハ前六條ニ規定シタル罪ノ未遂罪ヲ罰スルコトヲ規定シタルモノニシテ舊法ニハ之ニ類似ノ規定ナシト雖トモ各本條ニ總則ノ規定ヲ適用シタル結果ト同一ニ歸スルコトナル可シ。

抑々前數條ニ記載シタル外患罪タルヤ其目的トスル處前章規定ノ內亂罪ノ如ク社會ノ組織權ニ害ヲ及サントスルモノニ非スト雖トモ其外國ニ與シテ我憲法ヲ破壞セントスルモノニシテコレ政府ニ怨ミヲ抱キテ之ニ報ヒントスルニ出ツルカ或ハ利ノ爲メニ自國ヲ賣ラントスルノ所爲ニ出ツルモノニシテ最モ惡ム可ク且ツ國家ニトリテ實ニ危險大ナルモノナルヲ以テ若シ此等ノ犯罪カ意外ノ障礙ニヨリテ遂行スルコトヲ得サリシ場合ト雖トモ尚ホ之ヲ所罰スルノ必要アリ是レ本條ノ規定アル所以ナリトス。

本條所謂前六條ノ未遂罪トハ例ヘハ犯人正ニ外國ノ政府ニ說キ我帝國ニ向

ツテ戰端ヲ開カシメント計リ事稍々熟シタルニ際シ端ナク我駐在公使ノ爲メニ發見セラレ因テ其目的ヲ遂クルコト能ハサリシ場合ノ如キ、又ハ兵器彈藥ヲ我帝國ト交戰中ナル敵國ニ交付スル目的ヲ以テ正ニ船舶ニ積込ミ出航セントスルニ際シ我官憲ノ爲メニ發見セラレタルカ如キ、又或ハ我帝國ノ軍事上ノ利益ヲ害スルノ目的ヲ以テ軍隊輸送列車ノ進行ヲ妨ケンカ爲メ鐵道線路上ニ障害物ヲ置キタルモ番人ノ爲メニ發見サレ因テ滊車轉覆ニ至ラサリシカ如キ、又ハ彼ノ所謂露探ノ如キ敵國ノ爲メニ間諜ヲ爲サントシ帝國ノ軍略ヲ書面ニ記シ正ニ敵國ニ送附セントスルニ當リ我官憲ノ爲メ發見セラレタルカ如キ、皆外患罪ノ未遂罪ニシテ本條ニヨリ所罰セラル可キモノトス。

第八十八條　第八十一條乃至第八十六條ニ記載シタル罪ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ本章ニ規定スル所ノ外患罪ハ上述ノ如ク一般ノ犯罪ヲ異ニシテ其ノ國家ニ關係スルコト重大ナルヲ以テ其ノ豫備又ハ陰謀ノ場合ニモ尚ホ之レヲ十年以下ノ懲役ヲ以テ罰スルノ規定ナリ、而シテ本條ハ本法ニ於テ特ニ之ヲ新設シタルモノナリ蓋シ内亂罪ト相對シテ其ノ權衡ヲ得タルモノト云フ可シ。

本條所謂第八十一條乃至第八十六條ニ記載シタル罪ノ豫備又ハ陰謀トハ例ヘハ兵器彈藥其ノ他軍用ニ供スル物件ヲ我帝國ト交戰中ナル敵國ニ賣却シ以テ巨利ヲ博センコトヲ計リ正ニ發送ノ準備ヲ爲シタルカ如キ場合ハ即チ第八十二條規定ノ犯罪ノ豫備ヲ爲シタル者ト謂フヲ得可シ、又或ハ外國ニ通謀シテ我帝國ニ對シ戰端ヲ開ラカシメント欲シ外國政府ノ官吏ト謀議策略ヲ爲スカ如キ是レ第八十一條規定ノ叛背罪ノ陰謀ナリト謂フ可シ從テ此等ノ犯罪者ハ總テ本條ニ依リ一年以上十年以下ノ懲役ニ處セラル可キモノトス。

第八十九條　本章ノ規定ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ亦之ヲ適用ス

本條ハ戰時同盟國ニ對スル行爲ニ付キ規定シタルモノナリ舊法ニアリテハ其ノ第百二十九條及ヒ第百三十條ニ於テ同盟國ニ對スル行爲ニ關スル規定ヲ

設クト雖トモ本法ハ一般ニ廣ク此ノ規定ヲ適用センカ爲メ一括シテ本條ニ之ヲ規定シタルモノトス且ツ舊法ハ單ニ同盟國ト爲スト雖トモ元來本條規定スル所ノ罪ヲ罰スル所以ノモノハ其所爲ノ本國ニ抗敵スルト同一ナルカ故ニシテ非戰時同盟國ニ抗敵スル所爲ハ他ノ罪ニ該當ス可キコトアルノミニテ本國ニ抗敵スルト同一視ス可キ理由存スルモノナキヲ以テ本法ハ之ヲ戰時同盟國ト改正シタルモノトス而シテ其ノ同盟國ニ對スル抗敵ヲ我帝國ニ對スル抗敵ト同視スル所以ハ此ノ場合ニ於テハ同盟國ノ戰闘力ニ敵對スルハ即チ我帝國ノ戰闘力ニ敵對スルト被害點ニ於テ異ナルナキヲ以テナリ。

第四章　國交ニ關スル罪

本章ハ帝國ニ現在スル外國ノ君主大統領又ハ使節ニ對スル暴行脅迫又ハ侮辱ハ罪及ヒ外國ニ對スル非禮ノ罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法ニ於テハ之ニ關シテ別ニ章節ヲ設ケス唯外患罪中ニ於テ外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタルモノト局外中立ノ命令ニ違背シタルモノトニ付キ之ヲ犯罪トスルノ規定ヲ設ケタルニ過キサルナリ。

元來各國ノ立法例ニ於テモ特ニ國交ニ關スル犯罪ヲ類別シテ規定シタルモノ極メテ尠ナシトス是レ蓋シ近世ニ至ルマテハ國際上ノ關係未タ密接ナラサリシヲ以テ從テ國際法規ハ發達ヲ見サリシニ原因スルモノハナリ然レトモ近世人文ノ發達ト共ニ一方ニ於テハ尚ホ國家的生存競爭ノ甚タ盛ナルニモ不拘又一方ニ於テ國際的關係ノ日ニ繁雜ヲ加フル傾向アルヲ以テ自ラ外國ノ主權及ヒ國王又ハ其ノ代表者等ヲ優遇スルノ必要ヲ生シ之ニ關スル特別規定ナキカ爲メ往々不便ヲ感スルコト決シテ尠ナシトセス現ニ彼ノ先年大津ニ於テ津田三造ナルモノヽ露國皇太子ニ對スル犯罪ヲ處分スルニ當リテモ大ニ議論ヲ生シ政府ニ於テハ舊法第十六條ニ依リ處斷スヘシトナシタリト雖モ時ノ大審院ハ舊法第百十六條所謂皇太子中ニ外國皇族ヲ包含セスト爲シ遂ニ三造ヲ普通謀殺未遂罪ニ擬シ以テ無期徒刑ニ處シタルカ如キ又彼ノ明治二十八年五月清國使節李鴻章カ馬關ニ於テ暴漢ニ傷ケラレタル時ニ於テモ刑法中特別ノ罰條ナカリシヲ以テ普通毆打罪ニ擬シテ處罰シタルカ如キ是レ凡テ本章ノ規定ヲ

缺如セシヨリ生セシ所ノ結果ナリトス爰ヲ以テ本法ハ特ニ此ノ一章ヲ設ケテ國交ニ關スル凡テノ犯罪ヲ規定シタル所以ナリトス。

凡ソ國交ニ關スル罪ヲ設クルニ付キ立法例二アリ、一ハ相互主義ニシテ外國ノ刑法ニ於テ本章ノ罪ヲ設ケタル場合ニ限リ內國ニ於テモ本章ノ規定ヲ適用スルモノ一ハ單獨主義ニシテ外國法ニ於テ本章ノ罪ヲ設クルト否トヲ問ハス之ヲ罪ト爲スモノニシテ本法ハ實ニ此ノ第二ノ主義ニ準據シタルモノナリトス。

第九十條　帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス但外國政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

本條第一項ハ帝國ニ滯在セル外國ノ君主又ハ大統領ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ之ヲ通常ノ暴行罪ニ問擬セスシテ特ニ本條ニ因テ處分シ以テ此等ノ貴賓ヲ敬遇スルノ趣旨ヲ明ラカニシタルモノニシテ本法ノ新設ニカヽル規定ナリトス蓋シ苟クモ一國ノ統治權ヲ總攬スル君主カ我國內ニ滯在スルトキハ之ヲ賓客トシテ優遇セサル可カラサルハ國際公法上當然ノ義務ナレハナリ

本罪ノ成立ニハ第一帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對スルコト及ヒ第二暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトノ二條件アルヲ必要トス。

第一、帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對スルコトヲ要ス。

茲ニ所謂外國ハ君主トハ我日本帝國以外ノ國ニシテ苟クモ普通國際公法上獨立國トシテ公認セラルヽ國家ノ統治權ヲ總攬スル者ヲ指稱スル意ナリトス而シテ其ノ國カ我條約國タルト否ト又現在ニ於ケル我國トノ關係如何ハ之ヲ問ハサルモノトス尙ホ君主トアルカ故ニ外國ノ皇后以下皇族ニ付キテハ本條ニ據ルコトナク普通暴行罪ニ準據スヘキモノトス而シテ又茲ニ大統領トハ共和政體ノ國ニ於テ或ル階級ノ者又ハ一般人民ヨリ選擧セラレタル一國ノ最高

代表者ヲ指稱スルモノトス元來大統領タルヤ一國ノ主權ヲ總攬スル元首ニアラサルカ故ニ普通國際公法上ニ於テモ何等元首ノ賓禮ヲ受クルノ特權ヲ有セサルモノナリト雖モ通例其ノ職權ヲ保護スルノ必要ト其ノ本國ニ對スル敬意上トニ於テ之ヲ元首ニ準シ優遇スルノ慣例アルヲ以テ刑法又之ニ倣ヒ本法ニ於テモ茲ニ君主ト同一ノ待遇ヲ與ヘタルモノナリトス。

第二、暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトヲ要ス。

茲ニ所謂暴行トハ人ノ身體ニ對シテ用フル不法ノ腕力ヲ意味スルモノナリトス蓋シ汎ク暴行ト云フトキハ家屋物件ヲ破壞スルカ如キモ亦之ヲ包含ストト雖モ我刑法及ヒ其ノ母法タル佛國刑法ノ用例ニ依レハ暴行脅迫ト連書シタルトキハ常ニ人ニノミ對スル暴行ノ義ニシテ物ニ對スル暴行ハ破壞損壞等ノ語ヲ用ヒタリ（第百八條乃至第百二十九條第百四十七條第百九十條第百九十一條第二百六十條等參照從テ本條ノ場合モ亦單ニ人ニ對スル暴行ニ限ルモノトセサルハ可カラス而シテ尙ホ人ニ對スル暴行ナルニ於テモ其所爲ノ結果疾病若クハ創傷ヲ致シタルトキハ第二百五條及第二百六條第二百七條規定ノ傷害罪ニ該當スヘキモノニシテ通常刑法上ノ用例トシテ茲ニ之ヲ包含セサルモノトス然レトモ身體ニ對スル暴行ト云フヲ解シテ皮膚ニ直接ナル暴行ト爲スハ固ヨリ狹キニ失ス假令直接人ノ身體ニ手ヲ觸ルヽコトナシト雖モ騎馬ヲ仆スカ爲メニ馬ヲ打ツカ如キ間接且物質的ニ身體ニ及フモノモ又茲ニ暴行ナリトス從テ例ヘハ車上ノ君主ヲ强制スル爲メニ車ノ幌、梶棒若クハ車夫ニ對スル如キモ尙車上ノ君主ニ對スル暴行タルヲ妨ケサルモノナリトス。

又茲ニ脅迫トハ廣ク之ヲ言ヘハ故意ニ人ニ畏怖心ヲ起サシムル總テノ所爲ニ名クル所ナリト雖モ本條所謂脅迫ハ之ヲ暴行ト對立セシメタルヨリ見ルニ一般ノ用例上單ニ無形ノ暴行ノ意ニシテ人ノ心裡上ニ畏怖ノ感念ヲ生セシムルノ所爲ヲ謂フモノトス從テ單ニ目ヲ瞋ラシ肩ヲ張ルカ如キ言語又ハ姿勢ヲ兇惡ニシタルニ過キサルカ如キハ茲ニ所謂脅迫ニアラス汝ヲ殺ス可シトテ白刄ヲ振リ上クルカ如キ急迫ナル危害ヲ與ヘントスルノ所爲アルヲ要スルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス

本條第二項ハ帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對スル侮辱罪ヲ規定シタルモノニシテ通常侮辱罪ニ對スル特別規定ナリトス而シテ本罪ヲ構成スルニハ次ノ二條件アルヲ要ス即チ第一帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對スルコト及ヒ第二侮辱ヲ加ヘタルコト是レナリ。

第一、帝國ニ滯在スル外國ノ君主又ハ大統領ニ對スルコトヲ要ス、

本條件ニ付キテハ前項既ニ述ヘタルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セス。

第二、侮辱ヲ加ヘタルコトヲ要ス、

本條侮辱ヲ加フトハ君主又ハ大統領ノ品格又ハ尊嚴ヲ毀損スヘキ不敬ノ所為アリタルヲ謂フ而シテ其如何ナル行為カ侮辱ノ行為タルヤハ法律之ヲ列擧セサルカ故ニ其ノ判定ハ偏ニ裁判官ノ斷案ニ委スルモノナリト雖モ罵詈、嘲笑ハ勿論其ノ他誹毀トナルヘキ言語又ハ擧動ヲ為シタルトキハ凡テ本罪ヲ構成スルモノトス從テ暗ニ社會公衆ヲシテ善惡ノ評論ヲ為サシメンカ為メ外國君主又ハ大統領ノ惡事醜行ヲ叙述シテ之ヲ社會ニ紹介スル所為ノ如キ又或ハ某君主ハ痴漢ナリト云フカ如ク他人ニ拘ラス自家自ラ善惡ノ評論ヲ試ムル所為ノ如キ凡テ茲ニ所謂侮辱ナリトス而シテ其ノ目前ニ於テスルト否ト又其ノ事實タルト虚事タルトハ之ヲ問ハサルモノトス、而シテ前罪本罪共ニ外國ノ君主又ハ大統領ナルコトヲ知リテ故ラニ不敬ニ渉ルノ所為アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ三年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

然リト雖モ元來本罪ハ其ノ性質上通常侮辱罪ト同シク親告罪ニ屬ス可キモノニシテ直ニ之ヲ處分スルコトヲ得ルモノニアラス蓋シ特ニ其ノ國風慣習ノ異ナルヤ往々我國ニ在テ侮辱ニ相當スルモノモ彼國ニ於テハ否ラサルモノアリテ起訴不起訴ヲ當該檢事ニ一任スヘカラサルモノアレハナリ又彼ノ告訴ニハ一定ノ法式ヲ要スルヲ以テ之ヲ外國政府ニ命スルトキハ外國政府ヲシテ手續上ノ困難ヲ感セシムル煩累アルカ故ニ之ヲ告訴トナスハ妥當ニアラス爰ヲ以テ本條ハ其ノ但書ニ於テ本罪ハ外國政府ノ請求ヲ待テ其ノ罪ヲ論スト為シタルナリ。

第九十一條 帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ暴

行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對シ侮辱ヲ加ヘタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但被害者ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

本條第一項ハ帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對スル暴行脅迫ノ罪ヲ規定シタルモノニシテ總テ前條ト同一ノ理由ニ出テタルモノナリトス。

本罪ノ成立ニハ第一帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對スルコト及ヒ第二暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトノ二條件ヲ必要トス。

第一、帝國ニ派遣セラレタル外國ハ使節ニ對スルコトヲ要ス、

本條所謂帝國ニ派遣セラレタル外國ハ使節トハ自國ヲ代表シテ我帝國ニ滯留シ國際公務ヲ處理スル外交機關ヲ謂フモノトス、凡ソ使節ハ其ノ派遣ノ目的ニ由リ之ヲ二種ニ大別スルコトヲ得即チ第一種ハ國際友道ニ基キ弔賀ノ意ヲ表センカ爲メニ派遣スルモノニシテ此種ノ使節ヲ儀式的使節ト云フ而シテ第二種ハ外交事務ヲ執ル爲メニ派遣スルモノニシテ之ニハ特派ト常置ト二種アリトス或ハ之ヲ總稱シテ事務的使節ト云フ而シテ方今之ヲ四級ニ分ツ即チ大使、特命全權公使、辨理公使、代理公使是ナリトス大使ハ直接ニ主權者ノ身體ヲ代表スルモノ、特命全權公使ハ主權者ノ名ヲ以テ外交事務ヲ代理スルモノ、辨理公使ハ其ノ性質全權公使ニ異ナルナク只席次ニ於テ其下ニアルモノ、代理公使ハ單ニ本國政府ノ名ヲ以テ外交事務ヲ代理スルモノナリトス以上列擧ノ者ヲ以テ使節ト爲スカ故ニ彼ノ領事官條約締結ノ爲メニ派遣セラレタル全權委員、內政ニ屬スル事務ノ爲メ又ハ皇室事務ノ爲メニ外國ニ派遣セラレタルモノ及ヒ國際委員會々員ノ如キハ茲ニ所謂使節ニアラサルモノトス。

凡ソ使節ハ其職務上ノ地位ノ爲メニ駐剳國ヨリ特別ノ尊敬ヲ受ク可ク且ツ駐剳國ノ統治權外ニ立ツノ要アルヲ以テ普通國際公法上使節ハ二種ノ重大ナル特權ヲ享有ス即チ不可侵權及ヒ治外法權是ナリトス從テ刑法又之カ名譽ト尊敬トヲ保護スルハ必要上之ニ對スル犯罪ハ之ヲ通常罪ニ問擬セスシテ本條即チ特別規定ニ因テ所分スルコトヽ爲シタルナリ。

第二、暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトヲ要ス

暴行脅迫ノ何タルヤハ既ニ之ヲ説明シタルヲ以テ茲ニ之レヲ贅セス。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ三年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

本條第二項ハ帝國ニ派遣セラレタル外國使節ニ對スル侮辱罪ヲ規定シタルモノニシテ本罪ノ成立ニハ第一帝國ニ派遣セラレタル外國ノ使節ニ對スルコト及ヒ第二侮辱ヲ加ヘタルコトノ二條件ヲ要スルモノナルカ前條以下既ニ説明シタル所ヲ以テ明ラカナルカ故ニ茲ニ再述ノ煩ヲ避ク可シ尙ホ前條侮辱罪ト同一理由ニヨリ本罪モ又被害者ノ請求ヲ待テ初メテ其ノ罪ヲ論スルモノトス。

本罪ヲ犯シタルモノハ二年以下ノ懲役ニ處セラル可キモノトス。

第九十二條　外國ニ對シ侮辱ヲ加フル目的ヲ以テ其國ノ國旗其他ノ國章ヲ損壞、除去又ハ汚穢シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス但外國政府ノ請求ヲ待テ其罪ヲ論ス

本條ハ外國ハ國旗其ノ他ハ國章ヲ損壞除去又ハ汚穢スルノ手段ニ依リテ外國ニ侮辱ヲ加フルハ罪ヲ規定シタルモノナリ蓋シ國家モ亦一私人ト等シク國際公法上人格ヲ有シ公權私權ノ主體タルヲ得ルモノナルカ故ニ之ニ對スル侮辱モ又一個ノ犯罪トシテ處罰セサル可カラサレハナリ。

本罪ヲ構成スルニハ第一外國ニ對シテ侮辱ヲ加フル目的ナルコト及ヒ第二外國ノ國旗其ノ他ノ國章ヲ損壞、除去又ハ汚穢シタルノ所爲アルコトノ二條件ヲ必要トス。

第一、外國ニ對シテ侮辱ヲ加フル目的ナルコトヲ要ス、

苟クモ外國ニ對シテ侮辱ヲ加フルノ目的アルニ於テハ其ノ個人的私憤ニ出ツルト將タ忠君愛國ノ思念ニ出テタルトヲ問ハス常ニ本罪ヲ構成スルモノトス、從來往々淺薄ナル思量ヨリ忠君愛國ノ意ヲ誤解シ以テ此ノ種ノ暴擧ヲ爲ス者一再ニ止マラサリシト雖モ抑々國交益々頻繁ヲ加ヘ和親交通ヲ主トスル近時ハ國際關係ニ於テハ若シ一朝斯ル暴擧ニ出ツル者アランカ是レ畢竟國家災

害事端ヲ惹起セシムルモノニシテ却テ我帝國ノ爲メ最モ忌ム可キ不忠ノ臣民タルモノナルヲ以テ其ノ意ノ那邊ニアルヲ問ハス之ヲ嚴罰スルノ必要アルヨリ本法本罪ヲ新設シタルモノナリトス而シテ茲ニ所謂侮辱ノ意義ニ付キテハ旣ニ前二條ニ於テ詳論シタルヲ以テ茲ニ之ヲ說明セス。

第二、外國ノ國旗其ノ他ノ國章ヲ損壞除去又ハ汚穢シタルコトヲ要ス、

（一）外國ノ國旗其ノ他ノ國章タルコトヲ要ス、

茲ニ國旗トハ他國ニ對シテ一國ノ目標トスル旗章卽チ我日ノ丸ノ旗ノ如キヲ云ヒ國章トハ一般國家ヲ表章ス可キ凡テノ徽章ヲ總稱スルモノトス、法文國旗其ノ他云々トアルヲ以テ茲ニ國旗ハ單ニ國章ノ一例ヲ示シタルニ過キサルモノトス從テ苟クモ一國ヲ表章スル徽章タル以上ハ紋章記章等凡テ本罪ノ客體タルコトヲ得ルモノトス蓋シ此等ノモノハ其ノ國ヲ表章スル徽章ナルカ故ニ之ヲ損壞シ又ハ除去シ汚穢スルカ如キ所爲ハ畢竟其ノ外國ヲ侮辱シタルモノナルヲ以テ特ニ之ヲ保護スルノ必要上本罪ノ新設ヲ見ルニ至リシモノナリトス。

（二）損壞、除去又ハ汚穢シタルコトヲ要ス。

茲ニ損壞トハ有形的ニ國章ノ本體ヲ毀損スルヲ云ヒ、除去トハ國章ノ附置セラレアル場所ヨリ之ヲ取リ去ルコトヲ云ヒ、汚穢トハ國章ヲ不淨ナラシムル、ヲ云フモノトス故ニ例ヘハ外國ノ國旗ヲ破損又ハ燒棄スルカ如キ或ハ外國ノ紋章ノ附着セル物ヨリ紋章ヲ取リ去ルカ如キ又或ハ落書其ノ他ノ所爲ヲ以テ外國ノ國旗其ノ他ノ徽章ヲ汚損スルカ如キ凡テ本罪ニ依リ問擬セラル可キモノトス但シ本罪ノ成立ニハ外國ノ國章ナルコトヲ知リテ之ヲ損壞除去又ハ汚穢シタルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス從テ例之彼ノ屑屋カ自カ買受ケタル屑中ニアリシモノカ某國ノ國旗ナルコトヲ知ラスシテ之ヲ以テ洟打チカミタルカ如キハ本罪ニ依リテ處分スルノ限リニアラサルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノハトス但シ彼害國政府ノ請求ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス可キコト前々條ニ於テ說明シタルト同一ナリトス。

第九十三條　外國ニ對シ私ニ戰鬪ヲ爲ス目的ヲ以テ其豫

備又ハ陰謀ヲ為シタル者ハ三月以上五年以下ノ禁錮ニ處ス但自首シタル者ハ其刑ヲ免除ス

本條ハ外國ニ對シ私ニ戰鬪ヲ為スノ所為ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百三十三條ヲ修正シタルモノナリトス。

本罪ノ成立ニハ第一外國ニ對シ私ニ戰鬪ヲ為ス目的ナルコト及ヒ第二豫備又ハ陰謀ヲ為シタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一外國ニ對シ私ニ戰鬪ヲ為ス目的ナルコトヲ要ス

(一)外國ニ對スルコトヲ要ス

普通外國トハ前ニ述ヘタルカ如ク一定ノ土地ノ上ニ或ル獨立ノ主權ヲ有セル人民ノ團體ヲ指稱スルモノナリト雖モ茲ニ所謂外國トハ單ニ外國政府ノミヲ指示スルハ意ニアラス外國政府ハ勿論彼ハ一人又ハ數人ノ外國人ニ對スル行為モ亦本罪構成ノ要件タルヲ得ルモノナリトス蓋シ苟クモ外國政府又ハ其ノ團體員ニ對シ私ニ戰鬪ヲ為スノ目的ヲ以テ之ニ必要ナル豫備又ハ陰謀ヲ為スカ如キハ和親交通ヲ主トスル今日ニ於テ假令一私人ノ所為ナリト雖モ為メニ國際法ヲ破リ延イテ列國ノ和親ヲ害シ以テ善隣ノ交ヲ傷クルニ至ルモノナルヲ以テ之ヲ嚴罰スルノ必要アレハナリ而シテ本罪ノ構成ニハ其ノ主體カ單ニ日本臣民ニ限ルヲ要セサルヤ勿論ナリトス(第一條參照)

(二)私ニ戰鬪ヲ為ス目的ナルコトヲ要ス

茲ニ私ニトハ日本政府ノ命令又ハ許可ニ因ラスシテトノ義ナリ蓋シ抑モ外國ト戰鬪ヲ為スノ權ハ憲法上我天皇ノ大權ニ屬スルヲ以テ假令外國政府又ハ人民如何ニ暴狀ヲ逞フスルモ之ヲ膺懲スルハ我天皇ノ大權ニ屬シ一私人ノ自由ニ任ス可キモノニアラサレハナリ舊法所謂戰端ヲ開ク云々トアルヲ本法戰鬪ヲ為ス云々ト改メタル所以ハ戰端ハ即チ戰爭ヲ開始スルノ義ニシテ戰爭ナル用語ヲ實際ニ適用スルニ付テハ疑ナキ能ハサルカ故ニ寧ロ戰鬪ト為シ對手ノ一私人タル場合ニモ廣ク之ヲ適用スルヲ便宜トシタルヲ以テナリ從テ舊法ニアリテハ假令多數外國臣民ト爭鬪スルモ其ノ意外國政府ヲ敵トスルニアラサル以上ハ之ヲ罰スルコト能ハサリシモノナリト雖モ本法ニアリテハ如斯不都合ヲ見ルコトナキニ至リシモノトス。

第二其ハ豫備又ハ陰謀ヲ爲シタルコトヲ要ス、

其ノ豫備陰謀ノ程度如何ハ法文別ニ之ヲ規定セスト雖モ苟クモ外國ニ對シ戰鬪ヲ爲スノ目的ヲ以テ同志ヲ募リ又ハ兵器ヲ準備スルカ如キ又或ハ同士相集マリテ謀議策畧ヲ凝ラスカ如キハ凡テ茲ニ所謂豫備陰謀ナリトス、舊法ハ其ノ戰端ヲ開ク豫備ノ所爲ノミヲ罰スルコト、爲シタリト雖モ是レ實際ニ適セサルノ嫌アルヲ以テ本法ハ其ノ陰謀ノ所爲ヲモ仍ホ之ヲ罰スルコト、爲シタリ。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ三月以上五年以下ノ禁錮ニ處ス可キモノナリトス、但シ此ノ種ノ犯罪ハ犯人自首シタルトキハ其ノ刑ヲ全免シ自首ヲ奬勵シ以テ大害ヲ未發ニ豫防スルノ必要アルカ故ニ本條但書ハ自首シタルトキハ其ノ刑ヲ免除スト爲シタリ然シ其ニハ一般自首ノ條件ヲ具備スルヲ要スルヤ勿論ナリトス（第四十二條參照）

第九十四條　外國交戰ノ際局外中立ニ關スル命令ニ違背シタル者ハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ局外中立ノ命令ニ違反シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百三十四條ニ修正ヲ施シタルニ止リ其ノ立法趣旨ハ同一ナリトス蓋シ近世ノ開明諸國ニ於テハ若シ外國互ニ干戈ヲ交フルニ際シ第三國タル自國ハ一方ノ爲メニ交戰上ノ便宜ヲ與フルカ如キ行動ヲ爲スコトヲ避クルノ義務ヲ有スルト共ニ又兩國ト平和ノ交通ヲ繼續スルノ權利ヲ有ス斯ク兩國間ノ交戰ニ關與セサルコトヲ稱シテ局外中立ト謂フ然リ而シテ此中立ヲ全ウセンカ爲メニハ獨リ政府ノミナラス尙ホ進ミテ一般臣民ヲシテ之ヲ嚴守セシメ以テ爲戰者ノ一方ヲシテ我ニ疑ヲ懷カシムルコトナキヲ要ス此ニ於テカ刑法又局外中立違背ノ罪ヲ規定シテ以テ違背者ヲ嚴罰スルコト、爲シタルモノナリ。

本罪ノ成立ニハ第一外國交戰ニ際シ局外中立ノ命令アルコト及ヒ第二局外中立ノ命令ニ違背シタル所爲アルコトノ二條件ヲ要ス。

第一外國交戰ニ際シ局外中立ノ命令アルコトヲ要ス、

（一）外國交戰ハ際タルコトヲ要ス、

茲ニ外國交戰ノ際トハ自國以外ノ二國カ互ニ干戈ヲ交フルノ際ハ勿論尙ホ

或ル外國中ノ甲黨ト乙黨トカ互ニ戰ヲ交フルノ際ヲモ之ヲ包含スモノナリト雖モ是レ畢竟蛇足ノ條件ニ過キサルナリ蓋シ局外中立ナルモノハ上述ノ如ク素ト他國交戰ノ際其ノ何レニモ關與セサルコトヲ意味スルモノニシテ外國交戰ノ際ニ非サルヨリハ決シテ局外中立ナルモノノ存在ス可キコトナケレハナリ

（二）局外中立ハ命令アルコトヲ要ス

抑モ局外中立ノ狀態ハ事實上他ノ兩國間ノ交戰ニ關與セサルニ由リテ自然ニ成立スルモノニシテ決シテ中立宣言ノ發布ヲ待テ初メテ成立スルモノニ非ス而シテ其ノ宣言ノ目的タルヤ畢竟自國ノ臣民ニ對シ若干ノ行動ニシテ交戰ノ助ト爲ル可キモノヲ禁スルニ在リ而モ中立國政府ハ國際公法上此種ノ行動ヲ禁スルノ義務アルニアラス唯外交政畧上之ヲ禁スルヲ要スルコト多キヲ以テ普通中立宣言ノ發布ヲ爲スモノナリ從テ時アリテハ政畧上却テ右等ノ行動ヲ許サント欲スルカ爲メニ全ク中立宣言ヲ發布セサルコトモアルモノトス斯ルカ故ニ本國ニ於テ局外中立ヲ守ルヤ否ヤハ一ニ政府ノ意思如何ニ依リテ定マルモノニシテ政府ノ意思ハ其ノ之カ表示タル法律又ハ命令ニ依ルニ非スンハ之ヲ確知スルコトヲ得サルモノナルヲ以テ假令局外中立ノ實アルコトヲ知リナカラ之ニ違背スト雖モ未タ何等ノ命令ナキ以上ハ本罪構成ノ限リニ在ラサルモノトス但シ法律ノ不識ハ刑罰ヲ免ルヽノ原因タラサルカ故ニ苟クモ一旦局外中立ノ布告アリタル以上ハ其ノ布告ハ之ヲ知ラスト稱シテ本罪ノ責任ヲ免ルヽコトヲ得サルヤ勿論ナリトス（第三十八條參照）

第二　局外中立ノ命令ニ違背シタル所爲アルコトヲ要ス

本條局外中立ニ關スル命令違背トハ我國局外中立ヲ宣言シ尚ホ其ノ中立ニ必要ナル禁令又ハ命令ヲ發布シタルニ際シ其ノ禁令ヲ犯シ又ハ命令ヲ遵奉セサル所爲ヲ意味スルモノトス而シテ其ノ禁令又ハ命令ハ中立命令發布ノ曉ニアラサレハ之ヲ詳ニスルヲ得スト雖モ今從來ノ國際慣例ニ依リテ其ノ一班ヲ示サハ凡ソ中立國政府ハ兩交戰國ノ一方ニ對シテ作戰上ニ付キ他ノ一方ヲ援助セサルノ義務ヲ負フモノナルカ故ニ或ハ之ニ軍需品若クハ資金ヲ供給シ或ハ我臣民ニシテ其戰鬪員ニ充ルカ如キハ常ニ中立違背ノ所爲トシテ何人モ異論ナキ所ナリトス其詳細ハ戰時國際公法ニ於テ論ス可キモノナルヲ以テ茲ニ

深ク究ムルコトヲ避ケン。

以上ノ條件ヲ具備スルニ於テハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處セラル可キモノトス。

因ニ本章規定ノ犯罪ハ未遂罪ヲ罰スルノ明文ナキヲ以テ本罪各種ノ犯罪ハ凡テ其ノ未遂ノ所爲ハ之ヲ罰セサルモノト知ル可シ。

第五章　公務ノ執行ヲ妨害スル罪

本章ハ公務員ノ職務執行ヲ妨害スル罪及ヒ官ノ封印ヲ損壞スル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第二編第三章第二節及ヒ第八節ノ規定ヲ合シ之ニ修正ヲ加ヘタルモノトス今本法修正ノ主要ナル點ヲ擧グレハ次ノ如シ。

一、舊法ハ唯官吏ノ職務執行ヲ妨害スル罪ニ付テノミ其ノ規定ヲ設クルヲ以テ其ノ保護ノ範圍極メテ狹ク其ノ他公吏議員ニ關シテハ特別法アリ又議員ノ保護ニ關シテハ明治二十二年法律第二十八號アリト雖モ未タ一般ノ公務ノ執行ヲ保護スルノ法ナキヲ以テ本法ハ廣ク公務員ノ職務執行ハ安全ヲ保護スルノ目的ヲ以テ舊法ノ不備ヲ補ヒタリ。

二、舊法第百四十一條幷ニ改正確定原案第百十四條中ニハ本章ニ公務員ニ對スル侮辱罪ヲ規定シタルモ特ニ官吏タル身分アル人ヲ保護スルハ法律ノ前ニ平等ナル今日ニ於テ許ス可カラサル規定ナリトシテ遂ニ削除セラルヽコトヽ爲リタリ。

三、舊法ハ第八節ニ於テ官ノ封印ヲ破棄スル罪ヲ規定スト雖モ是レ又單ニ公務ノ執行ヲ妨害スル罪ノ一種ニ過キサルヲ以テ本法ハ之ヲ本章ニ加フルコトヽ爲シ且ツ舊法第百七十五條即チ官ノ封印ヲ破毀シテ物件ヲ竊取シタルモノニ對スル罪ハ本編第三十六章竊盜及ヒ强盜罪中ニ移シテ規定シタリ又舊法第百七十六條ハ必要ナキモノトテシ之ヲ削除シタリ。

第九十五條　公務員ノ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

公務員ヲシテ或處分ヲ爲サシメ若クハ爲サヽラシムル爲メ又ハ其職ヲ辭セシムル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者亦同シ

本條ハ公務員ノ職務執行ヲ妨害スル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百三十九條ノ官吏ニ關スル規定ヲ改メテ廣ク公務員ニ關スルモノト爲シタル外ハ趣旨ニ於テ舊法ヲ少シモ變更シタル所ナク唯舊法カ職務執行ノ原由ヲ列擧シタルヲ本法删除シタルニアルノミナリトス。

本條第一項ノ罪ヲ構成スルニハ次ノ三條件ヲ必要トス即チ第一、一箇人カ公務員ニ對シテ爲シタルコト第二、公務員ノ職務執行中其ノ職務ニ對シテ爲シタルコト及ヒ第三暴行脅迫ヲ加ヘタルコト是ナリトス。

第一、一箇人カ公務員ニ對シテ爲シタルコトヲ要ス、

本條所謂公務員ハ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ常ニ必ラス職務ヲ執行スルノ權ナキ一箇人タルヘキモノトス蓋シ職務執行ヲ妨害スルノ所爲トハ公權ノ執行ニ對シ不正ノ腕力ヲ弄スルコトヲ意味スルモノナルカ故ニ其ノ暴行ハ公權ノ執行權ヲ有セサル者ノ所爲ニ出ツルモノナラサル可カラサレハナリ、然リト雖モ茲ニ執行權ヲ有セサル者トハ公務員ノ資格ヲ有セサル者トノ義ニアラサルカ故ニ公務員ト雖モ職務ノ執行ニアラサル以上ハ又本罪ノ主體タルコトヲ得ルモノトス蓋シ公務員モ職務權限外ニ於テハ一私人ト何等異ル所ナケレハナリ從テ之ヲ例ヘハ甲巡査犯罪人ヲ逮捕セントスルニ當リ乙巡査甲ノ手ヲ執ヘ又ハ之ヲ抱キ止メテ以テ其ノ逮捕ヲ妨害シタルカ如キハ假令乙ノ身分ハ公務員ナリトハ云ヘ何等職務ノ執行ニアラサルカ故ニ當然本罪ヲ犯シタル者ナルカ如シ、而シテ尚ホ職務執行ヲ妨害シタル以上其ノ者カ其ノ職務執行ヲ受クル者ナルト否トハ之ヲ問ハス即チ利害關係ノ有無ニ拘ラス本罪ヲ構成スルモノトス。

公務員ノ何タルヤニ付キテハ既ニ第一編第一章第七條ニ於テ述ヘタルヲ以テ茲ニ之ヲ詳論セサルモ畢竟本條ハ彼ノ司法警察官、巡査、憲兵卒、執達吏、收税吏税關吏等ノ下級公務員ニ對シ多ク適用アルモノトス蓋シ此等ノ者ハ直接人民

ニ接スルノ結果或ハ人民ノ暴力ニ遭遇シ職務ノ執行ヲ妨害セラルヽコトアルヲ以テ法律特ニ本條ヲ設ケ此等公務員ノ職務執行ヲ保護シタルモノナレハナリ而シテ彼ノ外國ノ公務員ハ公法上ニ於テハ素ヨリ我公務員ト同一ニアラサルカ故ニ本條ノ範圍ニ屬セサルヤ勿論ナリトス。

第二、公務員ノ職務執行中其職務ニ對シテ爲シタルコトヲ要ス、

本條所謂職務ヲ執行スルニ當リト云々トアルヲ以テ暴行脅迫ハ必ラス公務員ノ職務執行中ニ爲サレタルモノナルヲ要ス即チ例之巡査カ現行犯人ヲ逮捕セントスルノ際又ハ收税官吏カ張簿ヲ檢査セントスルニ際シ之ヲ妨害スルカ如キヲ意味スルモノトス、然レトモ又元來法律カ公務員ヲ保護スルハ是レ公務員タル身分ヲ有スルカ爲メニアラスシテ全ク公權ヲ代表スルカ故ナルヲ以テ假令公務員職務執行中ナリト雖モ其ノ職務ニ對シテ暴行脅迫ヲ加ヘタルニアラスンハ本條ニ依リ處分スルヲ得サルモノトス即チ之ヲ例ヘハ職務執行中便事ヲ爲スヲ妨クルカ如キハ本罪ニ依リ論スルノ限リニアラサルカ如シ而シテ尚ホ其ノ公務員ノ執行中ナル職務ハ適法ノモノタルコトヲ要ス蓋シ前ニモ述ヘタルカ如ク本罪ハ公務員ノ公權執行ヲ保護スルヨリ生シタル制裁ナルニ拘ラス凡ソ公務員ノ違法行爲ハ之ヲ公權ノ作用ト謂フヲ得サレハナリ從テ假令其ノ公務員自身ハ職務行爲ナリト信シテ執行スル場合ト雖モ法令ニ依リ其ノ職務ニ屬セサルモノ又ハ法令ノ執行ニアラサルモノハ其ノ實質違法ノ行爲ニシテ公務員ノ行爲ト云フヲ得サルヲ以テ之ヲ妨クルモ本罪ヲ以テ論スルコトヲ得サルモノトス例ヘハ巡査令狀ヲ有セスシテ非現行犯人ヲ逮捕セントシタルニ際シ其ノ執行ヲ受クヘキ一私人之ヲ拒ムト雖モ本罪ニ依リ之ヲ處分スルヲ得サルカ如シ。

第三、暴行脅迫ヲ加ヘタルコトヲ要ス、

公務員ノ職務ヲ妨害スル手段ハ暴行又ハ脅迫タルヲ要ス而シテ暴行脅迫ノ何タルヤニ付キテハ既ニ第九十條ニ於テ詳論シタルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セス、然レトモ其ノ暴行脅迫ノ結果職務ノ執行ヲ爲シ得サリシト否トハ之ヲ問ハサルモノトス而シテ又直接ニ公務員ノ身體ヲ强制シテ妨害シタルト間接ニ其職務執行ヲ妨害シタルトハ之ヲ問ハス從テ例之彼ノ收税官吏カ檢査ノ爲メニ開カ

ントスル戸扉ヲ内部ヨリ押ヘテ入ラサラシムルカ如キハ即チ物ヲ介シテ人ニ加フル暴行ニシテ畢竟間接ノモノタリト雖モ決シテ本罪ノ構成ヲ妨クルコトナキモノトス。

尚ホ公務員ノ職務執行中ナルコトヲ知リ且ツ之カ職務執行ヲ妨クルノ意思アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス故ニ假令職務執行ヲ妨害スト雖モ其ノ公務員タルコトヲ知ラサルカ或ハ又假令之ヲ知ルモ其職務執行中ナルコトヲ知ラサランカ尚ホ更ニ一歩ヲ進メ之等ノコトヲ知ルモ之ヲ妨害スルノ意思アルニアラサレハ本罪ヲ以テ論スルコトヲ得サルモノトス(第三十八條參照)。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ノ一部ハ明治二十二年法律第二十八號第四條ノ規定ヲ修正補充シタルモノニシテ同條ハ議員ヲシテ辭職セシムル爲メ暴行脅迫ヲ爲シタル場合ノ規定ナルモ本法ハ之ヲ擴充シ汎ク公務員ニ關スル概括ノ規定ヲ設ケタルナリ而シテ本罪ノ成立ニハ第一公務員ヲシテ或ル處分ヲ爲サシメ若クハ爲サヽラシムル爲メ又ハ辭職セシムル爲メナルコト及ヒ第二暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一公務員ヲシテ或ル處分ヲ爲サシメ若クハ爲サヽラシムル爲メ又ハ辭職セシムル爲メナルコトヲ要ス。

茲ニ所謂或ル處分ヲ爲サシメトハ公務員ノ資格ヲ以テ其ノ爲ス可カラサルノ處分ヲ一私人カ爲サシメントシタルヲ謂フモノニシテ而シテ其ノ爲ス可カラサルノ處分トハ即チ執行官吏トシテ爲スコトヲ得サル背法ノ處分ヲ指スモノトス例ヘハ彼ノ執達吏ヲシテ差押命令ナキニ他人ノ財産ヲ不法ニ差押フルコトヲ强制スルカ如シ又或ル處分ヲ爲サヽラシムル爲メトハ公務員トシテ法令上爲サヽル可カラサル義務アル處分ヲ爲サヽラシムルヲ謂フモノトス例ヘハ巡査カ適法ナル令狀ニ依リ犯人ヲ逮捕セントスルニ當リ之ヲ强制シテ逮捕スルコトナカラシムルカ如シ而シテ又其ノ職ヲ辭セシムル爲メトハ公務員タルノ資格ヲ棄ツルコトヲ强制スルカ如キヲ謂フモノトス而シテ其ノ結果犯人カ目的ヲ遂ケタルト否トハ之ヲ問ハサルモノトス。

第二暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタルコトヲ要ス。

是レ前ニ說明セシ所ナリ請フ前段ヲ參照セヨ。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ第一項ト同シク三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス可キモノハトス。

第九十六條　公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ封印又ハ標示ヲ無效タラシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ無効ナラシメタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百二十四條ヲ修正シタルモノナリ蓋シ舊法ハ單ニ封印ヲ破棄シタル場合ノミヲ規定スト雖モ本法ハ之ヲ擴張シ封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シタル場合ハ勿論其ノ他ノ方法ヲ以テ封印又ハ標示ヲ無効ナラシメタル場合ニモ適用スルコト、為シタルナリ而シテ又舊法ノ第二項ハ其ノ必要ナキヲ以テ本法之ヲ刪除シタリ。

抑モ公務員カ法律又ハ命令ノ定ムル所ニ依リ自己ノ權限ニ屬スル職務ノ執行ヲ為スニ當リ物ノ保全ヲ要スルコトアルハ枚擧ニ遑アラス然レトモ其ノ保全ヲ要スルモノアル每ニ一々監守人ヲ附シ若クハ官署ニ保管スト云フカ如キハ勞多クシテ効尠ナキヲ以テ之ニ代ユルニ封印又ハ差押ノ標示ニ法律上重大ナル効力ヲ認メ之カ損壞ヲ豫防スルニ於テハ保全ノ目的ヲ全ウスルニ庶幾キカ故ニ此等ノモノヲ損壞スルノ所為ハ公權ヲ侵害スルモノト看做シ以テ本罪ニ依リ處罰スルコト、ナシタルナリ是レ本條ノ依リテ生セシ所以ナリトス。

本罪ノ成立ニハ第一公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ナルコト及ヒ第二封印又ハ差押ノ標示ヲ破壞シ又ハ無効タラシメタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、公務員ノ施シタル封印又ハ差押ハ標示ナルコトヲ要ス。

茲ニ封印又ハ差押ハ標示トハ公務員カ或ル財團若クハ證據物件ノ散逸湮滅ヲ防キ若クハ秘密ヲ保護センカ為メニ法律ノ規定ニ依リ特ニ施ス所ノ處分禁止ノ封印又ハ差押ノ標目ヲ謂フモノトス從テ此等ハモノハタルヤ彼ノ公務員カ法

令ヲ執行スル爲メ其ノ權限ヲ以テ施サレタルモノナルコトヲ要ス一私人ノ施シタルモノ又ハ公務員カ權限ヲ超越シタルモノニ依ルトキハ之ヲ損壞スルコトアルモ本條ニ依リ論スルノ限リニアラサルモノトス例之下級官吏ノ命令アルニアラサレハ執行スル能ハサル行爲ヲ命令ナクシテ實行シタルカ如キ又假令上官ノ命令アリタリトスルモ上官ノ權限外ニ渉ルカ若クハ下級官吏ノ權限外ニ屬スルカ如キ場合ニアリテハ是レ越權ノ處分ニシテ封印ヲ施シ又ハ差押ヲ爲シタル行爲自身已ニ法律上無效ノモノナルヲ以テ其ノ封印差押モ又法律ノ保護ヲ受クルコトナキモノトス故ニ彼ノ執達吏カ全部差押フ可カラサルモノヲ差押ヘタルカ如キ場合ニハ其ノ封印ヲ損壞スルモ本罪ヲ構成スルコトナキモノトス。

而シテ元來公務員カ法令ニ依リ職權ヲ以テ施シタル封印又ハ差押ノ標示ハ何人ト雖モ取消又ハ解除ノ命令若クハ判決ナキ以上之ヲ破棄スルコト能ハサルモノナルカ故ニ其ノ後差押ノ必要全ク消滅シタルトキ例ヘハ債務ヲ辨濟シテ差押ノ理由消滅シタルカ如キ場合ニ於テモ債務者タル一私人ハ仍ホ公務員ノ命令アルニ非ラサレハ自ラ之ヲ損壞又ハ無效ナラシムルコトヲ得サルモノトス。

第二、封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ無效タラシメタルコトヲ要ス。

茲ニ損壞トハ其ノ種類ニ應シ物ノ用ヲ失フ程度ノ物質的損害ヲ謂フモノトス而シテ法文ニハ損壞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ云々トアルカ故ニ損壞ハ單ニ封印又ハ差押ノ標示ヲ無效タラシムルノ一方法ヲ例示シタルニ過キサルモノトス故ニ假令物質的ニ之等ノモノヲ毀損若クハ破壞セサルモ尚ホ除去其ノ他如何ナル方法ニ依ルトモ封印又ハ差押ノ標示ヲ無效タラシムルノ所爲アルニ於テハ本罪ヲ構成スルモノトス而シテ又法文ニハ封印又ハ差押ノ標示ヲ無效タラシメタル者云々トアルカ故ニ本罪ノ成立ニハ必スシモ封印又ハ差押ノ效力ヲ全滅セシメタルコトヲ要セス唯單ニ其ノ封印又ハ差押ノ標示タル效力ヲ失ハシメタルノ事實アルヲ以テ足ルモノナリトス故ニ封印ヲ施シタル物件ヲ破壞又ハ盜取スルニ至ラサルモ損壞ノ所爲アレハ直チニ本罪ヲ構成スルモノトス從テ假令封印ヲ施サレタル物件ヲ盜取、横領又ハ損壞若クハ封印ヲ施シ

タル儘ニ之ヲ使用スルモ封印又ハ差押ノ標示ヲ無効タラシムル行爲ナクンハ第九章第五十四條ノ規定ニ依リ處罰セラルヽハ兎ニ角本條ニ依リ其ノ罪ヲ論スルコトヲ得サルモノトス例ヘハ封印ヲ施シタル船舶アルニ當リ其ノ封印ヲ破壞セスシテ船舶ヲ使用シタル者ノ如キ本罪ヲ以テ論ス可カラサルカ如シ。

以上ノ條件ヲ具備シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス。

第六章　逃走ノ罪

本章ハ舊法第二編第三章第三節中囚徒逃走罪ノ規定ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ蓋シ舊法ノ用ヒタル囚徒ナル語ハ二人以上ノ囚人タルコトヲ要スルカ如キ嫌アルヲ以テ本法ハ之ヲ囚人ト改メタリ又舊法ハ唯囚徒ニ關スル罪ノミヲ認ムト雖トモ其ノ自由ヲ剝奪セラレテ一定ノ設備中ニ拘禁セラルヽモノハ必ラスシモ囚人ニ限ラス懲役場ニ留置セラルヽモノヽ如キ其ノ最モ顯著ナル事例ナリトス尙ホ舊法ニヨレハ囚人逃走ヲ爲シタルトキハ之ヲ罪ト爲スト雖トモ留置人同一ノ行爲ヲ爲シタルトキハ少クトモ刑法上ノ罪責ヲ負擔セス其ノ他留置人ノ奪取其ノ逃走幇助等ノ行爲ニ付テモ亦同一ナリトス是レ決シテ事宜ニ適スル立法ナリト謂フヲ得ス是レヲ以テ本法ハ單純ノ逃走罪ハ囚人ニノミ之ヲ認ムト雖トモ其ノ他ノ罪ニ付キテハ汎ク法令ニヨリ拘禁セラレタルモノニ付キ之ヲ認メタリ且又舊法第百四十三條及ヒ第百四十四條但書ノ規定ハ本法ノ再犯及ヒ併合罪ノ規定修正ノ結果其ノ必要ヲ認メサルヲ以テ之ヲ刪除シタリ尙ホ舊法第百五十條ノ規定ハ刑法ニ規定スル必要ナキヲ以テ是レ又本法ニ於テハ刪除シタリ尙ホ最後ニ現時ノ實際ニ於テ囚人ノ逃走スル者稍々多キヲ加フルハ舊法ノ刑輕キニ過クルモ亦其ノ原因ノ一タラスンハアラサルヲ以テ本法ハ此ノ弊ヲ防遏スル爲メ少シク其ノ刑ヲ重クセリ。

抑々刑法カ逃走ノ所爲ヲ罪トシテ處罰スルハ逃走ト云フ更ニ新ナル事實ニ基キ新ナル制裁ヲ加フルモノニシテ國法ノ解釋トシテ逃走罪ノ刑罰ハ決シテ制裁ニ加ヘタル制裁ト云フコトヲ得サルナリ而シテ此ノ規定ノ必要ナル所以ノモノハ今日如何ナル文明國ニ在リテモ其ノ國内總ヘテノ監獄及ヒ總ヘテノ

監督官吏カ總ヘテノ逃走ヲ豫防シ得ル樣ノ完全ナルモノハ有リ得サルカ故ニ之カ爲メニ實際ニ逃走ヲ斷念スル囚人ヲ多カラシメ以テ之ニ因リテ獄舍若クハ監督者ノ完全ナル所ヲ補充セシメンカ爲メナリ殊ニ我國現今ノ狀態ニアリテ尙ホ此ノ規定ノ必要ヲ感スルコト多々之レ在リト云ワサルヲ得ス是レ實ニ本章ノ規定アル所以ナリトス。

第九十七條　既決未決ノ囚人逃走シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ所謂單純逃走ノ場合ヲ規定シタルモノナリ、即チ舊法第百四十二條第一項同第百四十四條ヲ合セタルモノニシテ既決、未決ノ囚人ヲ併セテ規定シタリ而シテ未決ノ囚人ニ付キ入監中ナル文字ヲ刪除シタルハ語弊ヲ避クル爲メナリ蓋シ囚人トハ既決未決ヲ問ハス監獄ニ在ル可キ身分ノ者ヲ示ス意義ナルヲ以テ舊法ノ如ク未決ノ囚人ニ付キ特ニ入監中ト云フノ必要ヲ認メサルノミナラス、却テ疑義ヲ生スルノ虞アレハナリ。

本罪ヲ構成スルニハ囚人タルコト、及ヒ逃走ノ所爲アルコトノ二條件ヲ必要トス而シテ其ノ意思ノ必要ナルコトハ言ヲ俟タスシテ明ラカナルヲ以テ煩ヲ避ケンカ爲メ玆ニ之ヲ省畧ス。

第一、囚人タルコトヲ要ス

囚人トハ刑事判決執行ノ爲メ又ハ法律ノ規定ニ從ヒ犯罪ノ嫌疑ニ因リ、獄舍ニ拘禁セラレタル者ヲ謂フ、即チ之ヲ換言セハ囚人トハ其ノ名稱ノ如何ニ關セス法律ノ規定ニヨリ獄舍ニ繫カルヽ者ヲ謂フモノトス、今之ヲ分析スルトキハ主刑執行ノ爲メ拘禁セラルヽモノ及ヒ犯罪ノ嫌疑ニ因リ罪證ノ湮滅ヲ防カンカ爲メニ拘禁セラルヽモノヽ二トス、前者ヲ已決ノ囚人ト云ヒ後者ヲ未決ノ囚人ト云フ蓋シ元來刑法上ノ囚人トハ國法上ノ囚人ニ對スルモノニシテ國法上囚人ト云フ名稱ヲ附スルニハ國法ニヨリテ其ノ自由ヲ奪ハレタル者ナラサルヘカラスト雖トモ其ノ犯罪ノ嫌疑若クハ有罪ノ判決ニ基キタルモノニ非サレハ刑法ニ所謂囚人ト爲ラサルナリ、而シテ本條ニ謂フ所ハ唯概括的ニ刑法上囚人ノ何タルヲ示シタルニ過サルモノトス。

凡ソ囚人ト稱スルニハ獄舍ニ繫カルヽ身分ヲ有スル者タルコトヲ主要トス

故ニ適法ノ方法ニ依リ獄舍ヲ出テタルモノハ假令有罪判決執行ノ爲メ一時獄舍ニ抑留セラレタルコトアルモ既ニ一旦出獄セル以上ハ囚人ト謂フコトヲ得ス、即チ既決ノ囚人ニ在リテハ假出獄中ノ者未決ノ囚人ニ在リテハ保釋責付中ニ在ル者ノ如シ、又天災ニ因リ囚人カ一時開放セラルル場合(監獄則第九條)ニ於テハ囚人タルノ身分ヲ失却スルモノトス蓋シ其ノ解放ハ拘禁ヲ解クノ謂ニシテ解放ノ一場合ナレハナリ、且又假令有罪ノ確定判決執行中ノ者ト雖トモ獄舍ニ繫カラサル者例之財產刑執行中ニ在ル者ノ如キモ囚人ニ在ラサル可シ、蓋シ若シ囚人ナル名稱ニシテ拘禁セサル者ヲモ指スノ語ナリトセハ彼ノ未決ニシテ入監セサル者即チ單純ナル被告人ニ對シテモ亦逃走罪ハ成立スルコト、ナル可シ否假ニ一歩ヲ讓リ財產刑執行中ニ在ル者ニ對シテモ尙ホ囚人逃走罪ヲ成立スルモノトセハ其ノ逃走トハ如何ナル場合ヲ云フヤ又其ノ監督區域ハ何クニ在リヤ倒底其ノ根據ヲ見出ス能ハサル可シ是レ吾人カ囚人ト稱スルニハ獄舍ニ繫カル、身分ヲ有スル者タルコトヲ要スト爲ス所以ナリ。

第二、逃走ノ所爲アルコトヲ要ス。

逃走トハ法令ノ執行上囚人ヲ拘禁監督スル者ノ監督區域ヲ不法ニ脱出スルヲ云フ行爲ノ性質ヨリ云ヘハ廣ク監督者ノ事實上監督シ得ル區域ヲ脱出スルヲ謂フモノトス然レトモ玆ニ其ノ監督ノ方法ニ依リ區別スルトキハ次ノ如キ結果ヲ生ス即チ

當該監督官吏ノ監督アルノミニシテ他ニ之ヲ扶助スル有形物無キ場合ニハ逃走ノ所爲ハ即チ監督官吏ノ實力ヲ無效ナラシムルノ所爲ニシテ通常彼ノ獄外ニ於テ勞役中逃走スル場合ノ如キ其ノ適例ナリ此ノ場合ニ於ケル逃走ノ既遂未遂ハ其ノ監督官吏ノ實力ノ及ハサル所ニ達シタルヤ否ヤニ因リテ分界セラル即チ監督官吏ノ實力ノ及フコトヲ得ザル位置ニ脱出シタル場合ニ於テハ本罪ノ既遂ナリ之ニ反シ其ノ監督官吏ノ實力ノ達シ得ヘキ區域內ニ在ル限リハ未タ以テ本罪ノ既遂ナリト謂フコトヲ得サルヘシ從テ必スシモ其ノ距離ノ遠近ヲ以テ之ヲ決スルコトヲ得サルモノトス。

監督官吏ノ實力ヲ補フ爲メニ監獄ノ如キ建築物ノ加ハレル場合ニハ逃走ノ所爲ハ通常獄舍ト他ノ部分トヲ分タレタル疆界線外ニ脱出スル所爲ニシテ彼

ノ門戸牆壁ヲ踰越スル場合ノ如キ最モ普通ノ場合トシテ見ル所ナリ、而シテ此ノ場合ニ於ケル既遂ト未遂ハ若シ其ノ監督者ノ心付カサル間ニ外圍ヲ踰越シタルトキハ此時期ヲ以テ逃走ヲ遂ケタルモノトシテ區別セラルト雖トモ假令逃走ヲ企テ外圍ヲ踰越シタリトスルモ續テ監督者ノ追跡ヲ受ケレハ其ノ實力ノ及フ限リハ尚ホ未タ逃走ヲ遂ケタルモノト謂フヲ得サル可シ。

以上ハ二條件ヲ具備スルトキハ一年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

第九十八條　既決、未決ノ囚人又ハ拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者拘禁場又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行、脅迫ヲ爲シ又ハ二人以上通謀シテ逃走シタルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス、

本條ハ所謂複逃走ニ關スル規定ニシテ舊法第百四十二條第二項及ヒ第百四十五條ヲ合セテ一層其ハ適用ヲ大ニシテ規定シタルモノナリ、即チ本法ハ既決未決ノ囚人ノ外更ニ拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者ヲ加ヘタリ拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者ハ訊問前四十八時間之ヲ拘禁スルコトヲ得レハナリ(刑事訴訟法第七十三條第二項)尚ホ刑事訴訟法上證人ニ對シテ拘引狀ヲ發シタル場合ニ付テモ適用アリ(刑事訴訟法第百十八條民事訴訟法ニ基キ證人ニ對シテ拘引ヲ命スル場合ハ法律ハ之ヲ拘引狀ト稱セサルモ尚ホ本條ニ包含セラルルモノトス、且ツ舊法ハ囚人三人以上通謀シト規定スト雖トモ本法ハ之ヲ二人以上ト改メタリ是特ニ三人以上ノ場合ニ限リ重ク罰スル必要ナク二人以上ナルトキモ亦前條ニ比シ重キ刑ヲ科ス可キ必要アレハナリ。

前條規定ノ場合ハ本條ノ基本タル場合ナルヲ以テ其ノ構成ハ單純逃走ノ要件ヲ具備セサル可カラサルコト論ヲ俟タス依テ重複ヲ避クル爲メ本條ノ場合ノ構成ニ付テハ單ニ其ノ之ヲ構成スルニ特殊ナル點ノミヲ說明スルニ止ム可シ。

本罪ヲ構成スル特殊ナル條件ハ拘禁場又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行脅迫ヲ爲シ又ハ二人以上通謀シタル所爲アルコト、及ヒ拘禁場械具ノ損壞又ハ暴行脅迫若クハ二人以上ノ通謀ハ之ヲ逃走ノ手段ト爲シタルコト是ナリ。

第一、拘禁場又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行脅迫ヲ爲シ又ハ二人以上通謀シタル所爲有ル事ヲ要ス。

（一）拘禁場又ハ械具ヲ損壞シタルコトヲ要ス。

拘禁場トハ既決未決ノ囚人ニ對スル獄舍ト拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者ニ對スル留置場（監獄則第一條及ヒ第二條）トヲ併セ稱スルモノトス而シテ法律ハ單ニ拘禁場トアルカ故ニ苟クモ拘禁場ノ一部ヲ構成スルモノハナランカ內部監房ハ戶扉鎖鑰天井床板タルト外部ノ牆壁門扉タルトニ論ナク之ヲ損壞スルニ於テハ本罪ヲ構成スルモノトス械具トハ拘禁ノ用ニ供スル器物即チ既決未決ノ囚人若クハ拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者ヲ保全スルノ用ニ供スル器物ヲ謂フモノトス故ニ例ヘハ手若クハ足ニ施シタル鎖鑰ハ勿論縛繩ノ如キモ械具ナルヘシ然シ獄衣、食器、燈火等ノ如キ囚人ヲ拘禁スルノ用ニ供セサル物ハ之ヲ包含セサルモノトス損壞トハ有形的ニ物ノ本體ヲ毀損スル行爲ヲ謂フ故ニ門戶牆壁ヲ踰越シ手錠ヲ取去ルカ如キハ又之ヲ含マサルモノトス。

（二）暴行脅迫ヲ爲シタルコトヲ要ス

茲ニ暴行脅迫トハ人ニ對スルモノヲ指スモノニシテ物ニ對スルモノハ之ヲ包含セス暴行ハ有形力ニシテ脅迫ト趣ヲ異ニス脅迫ハ人ノ心理的作用ヲ利用スルモノ爲ルヲ以テ之ヲ無形力ト稱スルヲ得可シ而シテ茲ニ脅迫トハ害惡ヲ豫告シテ他人ニ畏怖心ヲ生セシムルヲ謂フニテ他人カ畏怖ニ依テ自由意思ヲ失ヒタルト否トヲ問ハサルモノトス且ツ茲ニ暴行脅迫トハ不法ノモノタルヲ要スルヤ勿論ナリトス。

（三）二人以上通謀シタルコトヲ要ス。

唯茲ニ注意スヘキハ通謀トハ單純ナル共犯ニ非スシテ兩者ノ間ニ相互加功ノ意思ノ交換セラレタル場合ヲ指スモノナルコト是レナリ即チ二人ノ囚人又ハ拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者相互ニ逃走ノ目的ヲ達スルコトニ協力ストノ意思交換セラレタルコトヲ要スルナリ故ニ若シ通謀ノ事實ナキ以上ハ假令同時ニ多數ノ囚人逃走スルモ本條ニ依リ論スルコトヲ得ス。

第二、拘禁場械具ノ損壞又ハ暴行脅迫若クハ二人以上ノ通謀ハ之ヲ逃走ノ手段ト爲シタルコトヲ要ス

法律ハ拘禁場又ハ械具ノ損壞若クハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者云々トアルカ故ニ拘禁場械具ノ損壞若クハ暴行脅迫ハ逃走ナル所爲ノ原因タリシコトヲ要ス即チ囚人カ逃走ヲ爲スニ當リテ其ノ手段トシテ自己ノ拘禁セラルヽ拘禁場ヲ破壞スルカ又ハ自己ノ手足ニ施サレタル鎖鑰ヲ損壞スルカ或ハ又獄吏其ノ他ノ監督者ニ對シ暴行ヲ加フルカ脅迫ヲ爲スカニヨリ以テ逃走ヲ爲シタルコトヲ要ス從テ逃走ノ際故ラニ獄衣燈火等ヲ破壞シテ去ルカ如キハ他ノ罪ノ併合罪トナルハ格別本罪ヲ構成セサルモノトス。

第九十九條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ奪取シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス。

本條ハ法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ奪取スル犯罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百四十七條ノ一部ニ該當スルモノナリ。

本罪ノ構成ニハ次キノ二條件ヲ必要トス即チ法令ニ因リ拘禁セラレタルモノナルコト、及ヒ奪取シタルコト是レナリ。

第一、法令ニ因リ拘禁セラレタル者ナルコトヲ要ス。

法令ニヨリ拘禁セラレタル者トハ既決未決ノ囚人及ヒ拘引狀ノ執行ヲ受ケテ留置セラルヽ所ノモノハ勿論其ノ他法律命令ニ依リ留置セラレタルモノ及ヒ拘禁セラレタル者ノ總テヲ指スモノトス故ニ彼ノ罰金ヲ完納スル能ハサルカ爲メ勞役場ニ留置セラレタル者又ハ民法ノ懲戒ニヨリ拘禁セヲルヽ者ノ如キ者法令ニ因リ拘禁セラルヽ者ナリトス。

第二、奪取シタルコトヲ要ス。

奪取ニ付キテハ法律上何等ノ定義ヲ下シタルモノナシト雖トモ之ヲ文字ノ上ヨリ推究スルトキハ奪トハ他人ニ屬スル物件ヲ剝キ取ルノ義ニシテ取トハ他人ノ占有ヲ離シテ之ヲ自己ノ占有ニ收ムルノ意ナリ故ニ奪取トハ他人ノ占有ニ在ル物件ヲ剝キ取リ自己ノ占有ニ歸セシムルノ謂ナリトス而シテ茲ニ所謂奪取ハ監督者又ハ護送者ニ對シテ暴行脅迫ノ方法ヲ用ユルト詐欺ノ方法ニ出ツルト其ノ他單ニ拘禁場又ハ械具ヲ損壞シテ破拘禁者ヲ誘出スルト其ノ何レノ手段方法ニ依ルトヲ問ハサルモノトス。

以上ハ條件具備シタルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

第百條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其ノ他逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス。
前項ノ目的ヲ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス。

本條ハ被拘禁者ノ逃走ヲ幇助スルノ罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百四十六條及ヒ第百四十七條ハ一部ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ蓋シ舊法ニ逃走ノ方法ヲ指示シトアルハ逃走ヲ容易ナラシムル行爲ノ一例ニ過キスシテ狹キニ失スルヲ以テ本法ハ之ヲ改メ逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲ヲ爲シト規定シタリ又舊法第百四十六條ノ末文ハ其ノ必要ヲ認メサルヲ以テ之ヲ刪除シタリ。

本條第一項ハ暴力ヲ用フルコトナクシテ被拘禁者ノ逃走ヲ幇助スルノ罪ニ付キ規定シタルモノニシテ本罪構成ニハ次ノ三條件ヲ必要トス。

第一、法令ニ因リ拘禁セラレタル者ナルコトヲ要ス。
前條ニ於テ既ニ說明シタルヲ以テ茲ニ略ス。

第二、被拘禁者ヲ逃走セシムルノ意思アルコトヲ要ス。
法律ニ被拘禁者ヲ逃走セシムルノ目的ヲ以テ云々トアルカ故ニ被拘禁者ヲ逃走セシムルヲ希望スルノ意思アルコトヲ要ス從テ此ノ目的ナキ以上ハ假令被拘禁者ノ逃走ニ加工シタルモノアルモ本罪ヲ構成セス例ヘハ差入辨當ノ箸ヲ以テ鍵ト爲シ因テ逃走シ又ハ逃走シタルカ如キ場合ニハ差入人ニ被拘禁者ヲ逃走セシムルノ目的ナキニ於テハ本罪ヲ構成セス而シテ苟クモ被拘禁者ヲ逃走セシムル目的ニ出テタル以上ハ其ノ逃走ノ目的ヲ達セシメタルト否トハ本罪ノ成立ニハ關係セサル所ナリ即チ本罪ハ囚人自身ノ逃走ニ對スル從犯ニアラスシテ獨立ノ一罪ナリトス。

第三、器具ヲ給與シ其ノ他逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲ヲ爲シタルコトヲ要ス。
被拘禁者ヲ逃走セシムルノ目的ヲ以テ與フル器具ナルカ故ニ或ハ監督者ヲ

殺傷シテ逃走スル爲メノ銃、刀、棍棒ノ如キ或ハ又單ニ逃走ノ用ニ充ツルコトヲ得ヘキ器具例ヘハ拘禁場破壞ノ用ニ供ス可キ鋸、釘ノ如キ又ハ梯子ノ如キ總テ本條所謂器具ナリトス、其ノ他逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲トハ逃走ノ目的ヲ達スルニ便宜ナル行爲ヲ云フ故ニ逃走ノ方法ヲ指示スルカ如キハ當然此ノ内ニ包含セラル可キモノトス例ヘハ戸扉ヲ開キ又ハ監督官吏ノ間隙ヲ利用シテ逃走シ得ルノ方法ヲ指導スルカ如キ皆之ニ屬ス而シテ尚法律ハ必スシモ表見ノモノナルコトヲ要セサルカ故ニ暗ニ逃走セシムルノ意思ヲ以テ戸扉ヲ開放シ置クカ如キモ亦本罪ヲ以テ問フコトヲ得ルモノトス、然レトモ逃走ヲ遂ケタル後ニ於テ逃走者ノ爲メ便利ト爲ル可キ物例ヘハ食物若クハ衣服ヲ與フルカ如キハ本條ヲ以テ處分スヘキモノニ非ス而シテ苟クモ以上ノ所爲アルトキハ直ニ本罪ヲ構成ス可ク被拘禁者ニ於テ之ヲ利用スルト否トハ問フ所ニアラサルモノトス。

以上ノ條件具備スルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ハ暴力ヲ用ヒテ被拘禁者ノ逃走ヲ幇助スルノ罪ニ付キ規定シタルモノナリ而シテ本罪ヲ構成スルニハ被拘禁ナルコト、逃走セシムルノ意思アルコト及ヒ暴行脅迫ヲ爲シタルコトノ三條件ヲ必要トス而シテ茲ニハ別ニ説明ノ要ナシ唯茲ニ注意スヘキハ被拘禁者ノ逃走スルト否トヲ論セス苟クモ逃走ヲ助クルノ意思ヲ以テ暴行脅迫ヲ爲シタルトキハ直ニ本罪ヲ構成スルモノトス本罪ノ例トシテハ彼ノ囚人護送ノ途中護送者ヲ制縛シ又ハ脅迫シテ囚人ヲ逃走セシムルカ如キ最通例ナリトス而シテ本罪ヲ犯シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處セラル可キモノトス。

第百一條　法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スル者被拘禁者ヲ逃走セシメタルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ監督ノ職責アル者被拘禁者ヲ逃走セシメタル罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百四十八條ト同一趣旨ノ規定ナリトス。

本罪ヲ構成スルニハ被拘禁者タルコト及ヒ被拘禁者ヲ逃走セシムルノ意思

アルコトヲ要スルハ明白ニシテ別ニ説明ヲ要セサルヲ以テ茲ニハ唯本罪ノ成立ニ特別ノ要素タル被拘禁者ヲ看守又ハ護送セル者タルコト及ヒ其ノ看守又ハ護送セル被拘禁者ヲ逃走セシメタルコトノ二要件ヲ説明スルニ止メン。

第一、被拘禁者ヲ看守シ又ハ護送スルモノタルコトヲ要ス。

法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ看守又ハ護送スルモノトハ法律規則ニヨリ被拘禁者ヲ看守スル職責ヲ有スル司獄官ノ如キ又ハ被拘禁者ヲ警察署裁判所監獄ニ護送スル警察官、憲兵ノ如キモノヲ謂フ而シテ其ノ看守又ハ護送者ハ必スシモ公務員タルコトヲ要セス雇員モ亦之ニ包含セラルヽモノトス。

第二、其ノ看守シ又ハ護送スル被拘禁者ヲ逃走セシメタルコトヲ要ス。

自己ノ看守又ハ護送スル被拘禁者ヲ逃走セシメタルコトヲ要スルカ故ニ司獄官其ノ他ノ官吏カ看守又ハ護送セサル被拘禁者ヲ逃走セシムルモ監護ノ職責ナキヲ以テ一個人トシテ處罰セラルヽハ格別本罪ヲ構成スルコトナキモノトス而シテ法律ハ逃走セシメタルトキト規定スルカ故ニ看守者又ハ護送者カ被拘禁者ヲシテ自己ノ監護ヲ脱セシメタル場合ニ於テ初メテ本罪ヲ成立ス、故ニ逃走セシメントシタルモ被拘禁者ニシテ未タ拘禁場ヲ脱出シ了ラサルトキハ未遂犯タルニ止マル可シ。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處セラル可キモノトス蓋シ監督ノ職責アルモノハ職務上被拘禁者ヲ監護シテ之カ逃走ヲ防遏スルノ職責ヲ有スルカ故ニ其ノ制裁稍々嚴格ナルモノナリトス。

第百二條　本章ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

本條ハ本章規定ノ罪ノ未遂罪ヲ罰スルコトヲ規定シタルモノニシテ舊法第百四十九條ト同一ノ趣旨ナリトス。

抑々本章規定ノ罪ニ付キ總テ其ノ未遂ノ所爲ヲ罰スル所以ノモノハ破獄、脱走ヲ企ツルカ如キ者ハ孰レモ社會ニ對シテ虎ヲ路ニ放ツニ等シキ危險アルヲ以テ此等社會ノ危險ヲ豫防スル爲メ嚴罰スルノ趣旨ニ外ナラサルモノトス。

本條所謂本章ノ未遂罪トハ例ヘハ有罪ノ確定判決ヲ受ケ入獄中ナル囚人逃走セント志シ監房ヲ破リ出テ正ニ墻壁ヲ踰越シタルモ看守追跡ニヨリ其ノ目的ヲ遂スル能ハサリシカ如キ、又ハ法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ奪取スルノ

目的ヲ以テ暗夜ニ乘シ拘禁場近ク忍ヒ入リシモ看守ニ發見サレ爲メニ其ノ目的ヲ遂クル能ハサリシカ如キ、或ハ又被拘禁者ヲ逃走セシムル目的ヲ以テ差入辨當中ニ合鍵ヲ入レ置キタルモ被拘禁者ノ手ニ入ラサル前ニ發見サレタルカ如キ皆本章ノ未遂罪ナリトス。

第七章　犯人藏匿及ヒ證憑湮滅ノ罪

本章ハ犯人ヲ藏匿シ又ハ證憑ヲ湮滅シテ以テ犯罪ヲ庇陰スルハ罪ヲ規定シタルモノハニシテ舊法第二編第三章第三節中ノ罪人ヲ藏匿スルノ罪ヲ修正シタルモノハナリトス蓋シ舊法ハ本章ノ罪ニ對シ輕禁錮ヲ科スト雖モ從來往々盜賊ヲ使役シテ以テ不法ノ利得ヲ圖ルカ如キ者アリシヲ以テ本法ハ本章ノ罪ニ對シテハ之ヲ嚴罰スルノ必要上懲役ニ處スルコト、爲シタルナリ又舊法ハ其第百五十二條即チ罪證ヲ隱蔽スルノ罪ヲ規定スル所實際上狹キニ失シタルヲ以テ本法ハ廣ク他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑ヲ湮滅シ又ハ偽造變造シ若クハ偽造變造ノ證憑ヲ使用シ以テ司法權ノ執行ヲ妨害シタル場合ハ凡テ之ヲ罰スルコトニ改メタリ。

本章規定スルカ如キ犯罪ヲ庇陰スルニハ凡ソ二個ノ方法アリ即チ一ハ裁判所ニ於テ偽證ノ申立ヲ爲スカ如キ無形ノ手段ニ依ルモノニシテ他ハ現實ニ罪人又ハ罪證ヲ隱匿スルカ如キ有形ノ手段ニ依ルモノ是レナリトス前者ノ犯罪ハ後段第二十章ニ於テ規定スル所ニシテ本章ニ規定スル所ノモノハ即チ後者ノ犯罪ニシテ所謂事後從犯ト稱セラル、モノナリトス。

第百三條　罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ罪人ヲ藏匿シ若クハ隱避スル罪ヲ規定シタルモノハニシテ舊法第百五十一條ヲ修正シタルモノハナリトス蓋シ監視ニ付セラレタル者ノ規定ヲ刪除シタルハ本法監視制度ヲ全廢シタル結果ナリ又舊法ハ廣ク犯人ノ藏匿隱避ニ付キテ規定ヲ設クト雖モ元來本法ニ於テ拘留又ハ科料ノミニ處スヘキ罪ノ如キ

ハ事態極メテ輕微ナルヲ以テ其犯人ヲ藏匿又ハ隱避スルモ之ヲ所罰スルノ必要ナシト思料シ本法ハ罰金以上ノ刑ニ處ス可キ罪ヲ犯シタル者ニ付テノミ本條ヲ適用スルコトニ改メタリ。

本罪ノ成立ニハ第一罰金以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ナルコト及ヒ第二藏匿シ又ハ隱避セシムル所爲アルコトノ二條件ヲ必要トス。

第一、罰金以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ナルコトヲ要ス。

茲ニ罰金以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル者トハ罰金懲役禁錮死刑ニ該當ス可キ罪ヲ犯シタル者ヲ總稱スルノ意ナリトス(第十條參照)而シテ此等ノ者タルヤ事實罪ヲ犯シタルコトアルト否ト後ニ有罪ノ判決ヲ受ケタルト否トニ論ナク苟クモ有罪ノ嫌疑ノ爲メ官ノ搜索中ニ在ル者タル以上ハ總テ本罪ノ客體タルコトヲ得ルモノナリトス蓋シ本條規定ノ趣旨ハ司法權ノ實行ヲ妨害スル者ヲ罰スルニ在リテ本罪ノ被害物件ハ畢竟官ノ搜索權ナレハナリ然レトモ又假令事實罪ヲ犯シタル者ナリト雖モ尙ホ官ニ發覺セラルヽコトナク從テ官モ亦未タ搜索ニ着手セサルモノナルニ於テハ假令之ヲ藏匿スルコトアルモ未タ以テ發見ノ不能若クハ困難ト云フカ如キ事實ハ起リ得サルヲ以テ何等司法權ノ實行ヲ妨害セリト云フヲ得ス故ニ之等ノ者ハ本罪ノ客體タルコトヲ得サルモノトス但シ此等ノ者ト雖モ其犯罪官ニ發覺シ搜索ニ着手セシ後ニ至ルモ尙之ヲ藏匿スルニ於テハ勿論本罪ヲ構成スルモノトス而シテ又茲ニ拘禁中逃走シタル者トハ罪ヲ犯シ若クハ犯シタル者トシテ嫌疑ヲ受ケ拘禁中不法ニ有形無形ノ拘禁線ヲ脫出シタル者ヲ謂フ而シテ此拘禁中逃走シタル者ノ中ニハ假令罰金以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯サヽルモ拘留ハ勿論科料ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シ換刑處分ヲ受ケ其勞役場ニ留置中逃走シタル者モ亦タ之ヲ包含スルモノトス蓋シ之等ノ者ハ既ニ逃走ニ依リ懲役ノ刑ニ該當ス可キ罪ヲ犯シタル者ナルヲ以テ上述所謂罰金以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル者ト同視シ得可ケレハナリ(第九十七條參照)而シテ又茲ニ拘禁中ノ者トハ既決タルト未決タルトヲ問ハサルモノトス。

第二　藏匿シ又ハ隱避セシムル所爲アルコトヲ要ス

茲ニ藏匿トハ自ラ被搜索者ノ發見ヲ妨ケ以テ搜索ヲ害スルノ所爲ヲ謂フモノニシテ俗ニ所謂圍マフノ義ナリトス即チ例之犯人自己ノ監視範圍ニ潜伏セシメ又ハ衣服ヲ變セシメテ以テ其發見ヲ妨クルカ如キ是レナリトス而シテ隱避トハ被搜索者ヲシテ他ニ避ケテ發見ヲ逃レシメ以テ犯罪搜索權ノ發動ヲ妨クルノ所爲ヲ謂フモノトス即チ例之旅費ヲ與ヘテ犯罪ノ地ヲ逃走セシメ若クハ潜伏スルニ適當ナル場所又ハ方法ヲ示スカ如キ是レナリトス然レトモ本條ハ藏匿又ハ隱避ハ自ラ進ンテ積極的ニ保護シ若クハ援助シタルコトヲ要スルノミナラス元來一私人ハ進ミテ公權ノ執行ヲ幇助スルノ義務ナキモノナルヲ以テ犯人カ逃走スルヲ見テ默過シ逃走ヲ容易ナラシメタルニ止マリ又ハ犯人自ラ自己ノ邸內ニ潜伏シタルコトヲ見テ相當官署ニ申告セス若クハ巡査ノ問ニ對シテ其所在ヲ知ラスト答フルカ如キハ本條ニ依リ處分スルノ限リニアラサルモノトス。

本條モ亦罰金以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪者又ハ拘禁中逃走シタル者ナルコトヲ知リ之ヲ藏匿若クハ隱避セシムルノ意思アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス故ニ假令犯罪人ナルコトヲ知ルモ單ニ其飢渴ヲ憐ミ之ニ飲食ヲ與フルニ止リ何等藏匿又ハ隱避セシムルノ意思ナキニ於テハ決シテ本罪ヲ構成セサルモノトス。

以上ノ條件具備シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノハトス。

第百四條　他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑ヲ湮滅シ又ハ僞造、變造シ若クハ僞造、變造ノ證憑ヲ使用シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ證憑湮滅又ハ證憑ノ僞造變造若クハ僞造變造ノ證憑ヲ使用シタル所爲ニ關スル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百五十二條ヲ修正シタルモノナリ舊法ハ單ニ罪證隱蔽ノ場合ノミヲ規定シ其適用甚タ狹キニ失スルヲ以テ本法ハ之ヲ修正シ總テ他人ノ刑事被告事件ニ關スル有罪若クハ無罪ノ證憑ヲ湮

滅シ又ハ僞造、變造シ若クハ僞造、變造ノ證憑ヲ使用シタル場合ニ關シテ廣ク其ノ規定ヲ設ケタリ。

凡ソ裁判官ハ自已ノ私ニ知覺シタル所ノモノニ依リ漫然判斷ヲ下スコトヲ得ス必スヤ諸般ノ證憑ヲ蒐集シ之ニ依リテ正確ナル判決ヲ爲サヽル可ラス然リ而シテ其所謂證憑ハ物證ト人證トノ二ニ歸着スルモノニシテ共ニ神聖公平ナル判決ヲ下スニ必須ノ要件ナリトス、爰ヲ以テ法律ハ箇人ヲシテ徒ラニ證憑ヲ湮滅又ハ僞造、變造シ或ハ虚僞ノ證言ヲ爲スカ如キコトナカラシムル爲メ之等ノ行爲ニ對シ十分ナル刑罰制裁ヲ設クルノ必要アリ是レ第二十章規定ノ僞證罪ト共ニ本條規定ノアル所以ナリトス

本罪ノ成立ニハ第一他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑タルコト及ヒ第二其ノ證憑ヲ湮滅シ又ハ僞造變造シ若クハ僞造變造ノ證憑ヲ使用シタル所爲アルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、他人ハ刑事被告事件ニ關ズル證憑タルコトヲ要ス、

（一）他人ノ刑事被告事件ニ關スルコトヲ要ス、

茲ニ他人ハ刑事被告事件トハ自已以外ノ者カ刑事被告人トシテ訴追セラレタル場合ヲ總稱スルモノトス蓋シ自已ノ刑事被告事件ニ關スル證憑ヲ湮滅スルハ自然ノ人情ナルヲ以テ之ヲ罰スルハ人情ニ非スト雖モ事他人ニ關スルトキハ假令其事義俠ニ出ツルモノナリト雖モ司法權ノ質行ヲ妨害スルカ如キ公權ノ侵害ハ之ヲ許ス可カラサルヲ以テナリトス而シテ本條他人ノ被告事件云々トアルヲ以テ官ニ於テ未タ犯罪ノ搜索ニ着手セサル以前ハ未タ被告事件ト云フヲ得サルカ如シト雖モ抑モ本條所謂被告事件ニ關スル證憑ハ一旦之ヲ湮滅シ犯罪ノ痕跡ヲ失ハシムルニ於テハ永久犯罪ノ搜索ヲ不能又ハ困難ナラシムモノナルカ故ニ既ニ罪ヲ犯シタル以上ハ犯罪搜索ニ着手シタルト否トヲ問ハズ其ノ證人ヲ湮滅スルニ於テハ常ニ本罪ハ成立スルモノトス。

（二）證憑タルコトヲ要ス、

茲ニ證憑トハ證據徵憑ヲ謂フ而シテ證據トハ被告人ノ自白、公務員ノ作成シタル檢證調書、證據物件、證人ノ供述等ヲ謂フモノニシテ徵憑トハ被害者ノ告訴狀、盜難屆、參考人ノ供述等ヲ云フモノトス蓋シ此等ノモノタルヤ犯罪事實ノ發

覺又ハ犯人ノ逮捕乃至處罰ニトリテ實ニ重大ナル參考ヲ與フルモノナルカ故ニ此等ノモノヲ湮滅シ以テ有罪ノ證據ノ發見ヲ不能又ハ困難ナラシムルカ如キハ司法權ノ實行ヲ妨害スル實ニ甚大ナルモノアレハナリ。

第二、其ハ證憑ヲ湮滅シ又ハ僞造變造シ若クハ僞造變造ノ證憑ヲ使用シタル所爲アルコトヲ要ス。

(一)湮滅シタル所爲アルコトヲ要ス

茲ニ湮滅トハ證據徵憑ヲ不明ナラシメ又ハ亡失セシメタル所爲ヲ謂フモノトス而シテ其人證タルト物證タルトハ之ヲ問ハサルナリ蓋シ舊法ハ他人ノ罪ヲ免レシメンコトヲ圖リ其ノ罪證トナルヘキ物件ノミニ限リタルカ故ニ彼ノ證人トシテ虛僞ノ陳述ヲ爲スカ如キハ勿論犯罪ノ痕跡ヲ失ハシムル所爲ノ如キモ又之ヲ包含セサルノ不都合アリシヲ以テ本法ハ廣ク證憑湮滅トナシ以テ犯罪ノ痕跡ヲ失ハシムル總テノ所爲ヲ包含セシメタルモノナリトス故ニ例之犯罪ノ證據トナル可キ物件ヲ燒棄損壞セシメタル所爲ハ勿論物件上ニ印セル足跡又ハ血痕ヲ拭ヒ去ルカ如キ所爲モ亦本條ニ依リ論ス可キモノナリトス

(二)僞造變造シタル所爲アルコトヲ要ス

茲ニ證憑ノ僞造トハ眞正ナル證憑以外ノモノヲ材料トシテ新ニ證憑タル價値アルモノヲ作成スルヲ謂フ即チ之ヲ箇言セハ虛構不實ノ證憑ヲ作成スルノ所爲ヲ意味スルモノトス例之椽先ニ何等犯人ノ足跡印セラレアラサリシニ不拘新ニ犯人以外ノ者ノ足跡ヲ印スルカ如キ又ハ犯罪當日ハ他所ニ宿泊シタリト僞リ宿帳ヲ作成スルカ如キ總テ證憑ノ僞造ナリトス而シテ又茲ニ證憑ノ變造トハ眞正ナル證憑上ニ眞實ノ證據ヲ害ス可キ工作ヲ施スノ義ナリ即チ之ヲ換言セハ既ニ存在シタル證憑ヲ增減變更スルノ所爲ヲ謂フモノトス例之三月一日宿泊シタルヲ五月一日ト宿帳ヲ變更スルカ如キ又ハ犯人ノ印セシ足跡ノ形狀ヲ變更スルカ如キ是レ證憑ノ變造ナリトス。

(三)僞造變造ノ證憑ヲ使用シタル所爲アルコトヲ要ス

茲ニ僞造變造ノ證憑ヲ使用スルトハ他人ノ刑事被告事件ニ關シ作成シタル僞造變造ノ證憑ヲ行使スル行爲ヲ謂フ而シテ其ノ行使トハ刑事裁判權ヲ執行スル公務所又ハ公務員例ヘハ裁判所又ハ檢事局ニ對シ僞造又ハ變造ノ證憑ヲ

提供シタル所爲ヲ謂フモノトス、故ニ何等之ニ依リテ欺カル可キ狀況ノ下ニアラサル人ニ提示スト雖モ本罪ヲ構成スルコトナキモノトス然レトモ亦假令刑事裁判權ヲ執行スル公務員ノ目ニ觸ル丶モ故ラニ之ヲ提示シタルニ非サル場合即チ偶然其ノ公務員ノ目ニ觸レタルカ如キ場合ニ於テハ之ヲ以テ使用ノ行爲アリタリト謂フコトヲ得ス、然リト雖モ其ノ所謂使用タルニハ故ラニ其ノ公務員ノ面前ニ提示スルコトヲ要セス公務員カ之ヲ目擊スルヲ得ヘキ狀況ニ置クヲ以テ足レリトス從テ假令其ノ僞造、變造ノ證憑ヲ一定ノ場所ニ一旦置キタルモ未タ其ノ公務員ノ目ニ觸レサル間ニ之ヲ訂正又ハ取消シタルトキハ中止犯トシテ無罪タル可キモノトス。

以上ハ第一及ヒ第二ノ條件ヲ具備スルトキハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス。

第百五條　本章ノ罪ハ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メニ犯シタルトキハ之ヲ罰セス

本條ハ前條及ヒ前々條規定ハ罪ト雖モ犯人又ハ逃走者ハ親族ニシテ且ツ犯人又ハ逃走者ハ利益ノ爲メニ犯シタルモノハナルニ於テハ之ヲ罰セサルコトヲ規定シタルモノニシテ舊法第百五十三條ト同一趣旨ノ規定ナリトス唯本條ハ舊法ノ規定ト異ナリ假令犯人又ハ逃走者ノ親族ナリト雖モ其ノ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メニ犯シタルモノニアラサルニ於テハ尚ホ之ヲ罰スルモノナリトス、蓋シ其ノ之ヲ罰セサル所以ノモノハ親族ノ間ニハ特ニ親密ノ關係アルモノナルカ故ニ其ノ所爲ハ自己ノ犯罪ヲ隱蔽スルト同一ニ看做ス可キモノナルヲ以テナリト雖モ事既ニ其ノ親族ノ利益ノ爲メニ犯シタルニアラサルニ於テハ何等自己ノ利害ト同一視ス可キコトニアラサレハナリ。

茲ニ親族トハ民法第七百二十五條所謂六親等內血族、配偶者及ヒ三等親內ノ姻族ヲ謂フモノトス(民法第七百二十五條乃至第七百二十八條參照)而シテ茲ニ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メトハ犯人又ハ逃走者タル親族ノ罪ヲ免ル丶爲メナルトキハ勿論妨害物ヲ除去シ又ハ汚穢物ヲ捨ツルカ爲メ若クハ親族ノ不名譽ヲ隱サンカ爲メ等ナルコトヲ意味スルモノトス。

第八章　騷擾ノ罪

本章ハ多衆聚合シテ暴動ヲ爲スノ罪ヲ規定シタルモノニシテ彼ノ博徒又ハ強盜等ノ相集リテ不良ノ事ヲ企ツルカ如キ所爲ヲ規定シタルモノニアラス、而シテ本章ハ舊法第二編第三章第一節兇徒聚衆ノ罪ヲ修正シタルモノナリトス而シテ其修正ヲ施シタル主要ノ點ハ舊法ノ題目タルヤ決シテ穩當ナル用語ト云フヲ得サルヲ以テ之ヲ改メタルニアリ蓋シ舊法兇徒云々トアルモ暴動ヲ企ツルノ前ニ於テハ未タ之ヲ兇徒ト謂フヲ得サル可ク且ツ本章立法ノ趣旨タルヤ廣ク內亂ノ目的ヲ除キ總テ其ノ他ノ目的ヲ以テ多衆聚合シ暴行又ハ脅迫ヲ爲ス場合ニ適用セントスルニアルヲ以テ本法ハ之ヲ騷擾ノ罪ト改メタルモノナリトス而シテ又舊法第百二十八條ノ規定ハ本章ニ之ヲ規定スル必要ナキヲ以テ本法ハ之ヲ刪除シタリ。

凡ソ社會ノ公權ニ最モ必要ナルハ其ノ行使カ安全ニシテ秩序アリ且ツ平穩ナラサルヘカラサルニアリ然ルニ其ノ公權ヲ蔑視シ國家カ保護セントスル所ノ公ノ安全秩序及ヒ平穩ヲ害スルカ如キハ實ニ公權ヲ侵害スルノ甚シキモノニシテ嚴ニ之ヲ處罰スルノ必要アルモノトス、此レ本章ノ規定アル所以ニシテ本章規定ノ所爲ノ如キ最モ彼ノ舊法第二編第三章所謂靜謐ヲ害スルノ所爲ニ適合スルモノトス。

第百六條　多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ騷擾ノ罪ト爲シ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

二　他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス

三　附和隨行シタル者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百三十七條ヲ修正シタルモノナリトス、蓋シ舊法ハ暴動ヲ爲ス場合ヲ例示シタリト雖モ是レ全ク不必要ナルヲ以テ本法ハ單ニ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル者ト改メ又舊法ハ暴動ノ敎唆者ヲ所罰スト雖モ其ノ必要ナシトシテ之レ亦本法刪除シタリ。

本罪ノ成立ニハ次ノ二條件アルヲ要ス、即チ第一多衆聚合シタルコト及ヒ第二暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルコト是レナリトス。

第一、多衆聚合シタルコトヲ要ス、

多衆聚合トハ讀ンテ字ノ如ク二人以上多人數相集ルコトヲ意味スルモノナリ其ノ果シテ幾人以上ヨリ之ヲ多衆ト謂フヘキヤハ法文上何等規定スル所ナキヲ以テ事實裁判官ノ判定ニ委スルモノトス、然レトモ法文ニ依レハ首魁、指揮者及ヒ附和隨行者等數十人ノ團體タルヲ要スルモノナルカ如シ、而シテ本罪ニ付キ法文何等其ノ目的ヲ限定セサルカ故ニ如何ナル目的タルヲ論セス苟クモ彼ノ內亂罪以外ノ目的ヲ以テ多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルトキハ常ニ本罪成立スルモノトス、故ニ例ヘハ彼ノ多數小作人合同シテ竹槍蓆旗ヲ押立テ地主ノ許ニ押寄セ或ル要求ヲ强制シ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲スカ如キ或ハ鑛毒其ノ他ノ事件ニ付キ請願セントシテ多衆合同シテ縣廳役場其ノ他ノ公務所ニ押寄セ暴行ヲ爲スカ如キ又或ハ近カキハ彼ノ東京日比谷騷擾事件及ヒ各地鑛山ニ於ケル騷擾事件ノ如キ凡テ本罪ノ範圍ニ屬ス可キモノトス、從テ本罪ハ其ノ目的トスル所如何ニ美ナリト雖モ又假令自己ニ屬スル權利ノ行使ナリト雖モ苟クモ其ノ目的ヲ遂スルノ手段トシテ多衆集合シテ暴行脅迫ヲ爲スニ於テハ常ニ本罪ニ依リ論セラル可キモノトス、蓋シ目的ヲ理由トシテ手段トナリタル犯罪行爲ヲ等閑ニ附スルヲ得サレハナリ、故ニ例ヘハ日本臣民ハ帝國議會ニ對シ請願ヲ爲ス權利アリト雖モ之ヲ受ケシムル手段トシテ多數人共同シテ議院ノ門前ニ到リ暴行ヲ爲スカ如キハ假令其ノ目的ハ罪ニ非スト雖モ其ノ手段タルヤ本罪ニ相當ス可キモノナルヲ以テ本條ニ依リ之ヲ處分ス可キモノナリトス。

第二、暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルコトヲ要ス、

暴行脅迫ノ何タルヤハ既ニ第四章及ヒ第五章ニ於テ詳論シタルヲ以テ茲ニ之ヲ再說セサルモ只茲ニ注意スヘキハ假令數人共同シテ暴行脅迫ヲ加フルモ財物ヲ奪取スル目的ニ出テタル彼ノ强竊盜罪ノ如キ法令上特ニ明文ヲ設ケタル場合ハ本罪ニ非サルコト是レナリトス、而シテ又本罪暴行脅迫ノ客體ハ單ニ一私人ニ對スル場合モ亦之ヲ包含スルモノトス、故ニ例ヘハ債權者カ債務者ニ對

シ債務ノ履行ヲ促ス手段トシテ多數人ヲ使嗾シ其ノ門前ニ到リ暴行脅迫ヲ爲スカ如キ罪ニ一人一家ニ直接ナルモノト雖モ事情ニ照シテ本條ヲ適用スルヲ妨ケサルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備シタルトキハ首魁ハ一年以上十年以下ノ懲役又ハ禁錮(第一號)他人ヲ指揮シ又ハ他人ニ率先シテ勢ヲ助ケタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮(第二號)附和隨行シタル者ハ五拾圓以下ノ罰金(第三號)ニ處ス可キモノトス而シテ茲ニ首魁其ノ他ノ者ノ何タルヤニ付キテハ既ニ第二章內亂罪ニ於テ述ヘタル所ト彼是相對照シテ明ラカナルヲ以テ茲ニ再ヒ之ヲ述フルノ煩ヲ避ク可シ。

第百七條　暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シ當該公務員ヨリ解散ノ命令ヲ受クルコト三回以上ニ及フモ仍ホ解散セサルトキハ首魁ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其他ノ者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ前條規定ノ罪ヲ犯サントスルニ際シ公務員ノ解散命令ヲ受ケ仍ホ解散セサル場合ニ於ケル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第百三十六條ト其ノ立法趣旨同一ナリトス蓋シ前條規定ノ犯罪ノ如キ彼ノ國事犯ヲ企ツルカ如キ重大ナルモノニアラスト雖モ一旦其ノ既遂ニ至ルトキハ其ノ因テ生スル所ノ害必スシモ大ナラスト謂フ可カラサルカ故ニ可成犯人ヲ誘導遷善シテ以テ大事ニ至ラサラシムルコトヲ要ス爰ヲ以テ法律ハ本條ヲ設ケ以テ所謂騷擾罪ヲ犯サントシ其ノ豫備ヲ爲スト雖モ公務員ノ命令ニ從ヒ解散シタルトキハ其ノ罪ヲ問ハサルコトヽ爲シタル所以ナリトス。

本條規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一、暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シタルコト及ヒ第二、當該公務員ヨリ解散命令ヲ受ケタルコト三回以上ニ及フモ仍ホ解散セサルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シタルコトヲ要ス。

本條所謂暴行又ハ脅迫ヲ爲ス爲メ多衆聚合シタルコトハ暴行又ハ脅迫ヲ以テ或ル一定ノ目的ヲ達センカ爲メ多衆聚合シタルニ止マル場合即チ前條規

定ノ罪ヲ犯サンカ爲メ其ノ豫備ヲ爲シタル場合ヲ謂フモノナリトス、但シ其ノ實行ノ端緒ハ之ヲ包含スルヤ否ヤ聊カ疑ナキヲ得スト雖モ元來本條ノ規定アル所以ノモノハ上述ノ如ク前條規定ノ犯罪タルヤ其ノ多クハ犯人一時ノ情念ニ基因スルモノニシテ其ノ豫備ノ所爲ノ如キ未タ必スシモ之ヲ罰セサル可カラサル程ノ實害ヲ生セサルヲ以テ犯人ニ有利ナル規定ヲ設ケ以テ之ヲシテ可成大事ニ至ラサラシメントノ政策ニ出テタルモノナルニ拘ラス若シ夫レ已ニ着手ニ至リタリトテ必ス之ヲ罰ス可キモノトスルトキハ徒ラニ罪人ヲ增加スルノミニシテ益スル所ナキニ據リテ之ヲ觀レハ其ノ着手ノ端緒モ亦之ヲ包含スルモノト爲スヲ妥當トスルカ如シ、故ニ例之彼ノ多數職工カ雇主ニ對シ暴行ヲ爲サンカ爲メ一定ノ場所ニ集合シタル所爲ノ如キハ勿論既ニ集合所ヲ出發シテ雇主ノ邸宅ヲ襲ハントシ其ノ門前ニ達シタル場合ノ如キモ亦本條ノ範圍ニ屬ス可キモノト爲スカ如シ、果シテ然ラハ本條ハ所謂騷擾罪ノ既遂以前ノ所爲ニ付キ規定シタルモノニシテ前條ハ其ノ既遂ノ所爲ニ付キ之ヲ規定シタルモノナリトス、而シテ既遂以前ノ所爲ハ公務員ノ命令ヲ受ケ仍ホ解散セサルトキニ於テ始メテ之ヲ罰ス可キモノナルカ故ニ此ノ間更ラニ未遂犯ヲ適用スルノ餘地ナキ結果前條規定ノ犯罪ニハ未遂犯ナルモノナシト謂ハサル可カラサルモノトス。

第二、當該公務員ヨリ解散命令ヲ受クルコト三回以上ニ及フモ仍ホ解散セサルコトヲ要ス、

玆ニ當該公務員トハ通常人民ヲシテ其ノ命令ニ服セシムル職權ヲ有スル公務員、即チ之ヲ換言セハ不穩ノ集合ニ對シ解散ヲ命スル行政警察權ヲ有スル公務員、例ヘハ府縣知事、警察官、郡區長等ヲ謂フモノナリトス從テ彼ノ各省ノ參事官又ハ裁判所ノ判事、檢事等ノ如キ解散命令權ヲ有セサル公務員ノ命令ニ服シテ解散セサルコトアルモ決シテ本條件ヲ充シタルモノト謂フヲ得サルモノトス、而シテ本條規定ノ犯罪ハ當該公務員ノ解散命令ヲ受クルコト三度以上ニ及フモ仍ホ解散セスト云フ點ヲ以テ成立條件ト爲スカ故ニ一回又ハ二回ノ命令ニ服シ解散シタルトキハ一タヒ成立シタル罪ノ刑ヲ免除スルニアラスシテ犯罪ハ初メヨリ全然成立セサルモノナリトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ首魁ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處シ其ノ他ノ者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス而シテ茲ニ其ノ他ノ者トハ前條第二號及ヒ第三號規定ノモノヲ指稱スル意ナリトス。

第九章　放火及ヒ失火ノ罪

本章ハ放火及ヒ失火ノ罪ヲ規定シタルモノナリ舊法ハ之等ノ罪ヲ以テ財産ニ對スル罪ト爲シ其ノ第三編第二章第七節ニ規定シタリト雖モ法律ハ自己ノ家屋ヲ燒燬スルモ尚ホ罪ヲ構成スルモノト爲スカ故ニ本罪ハ寧ロ公共ニ危害ヲ及ホス罪ニ屬ス可キモノナルヲ以テ本法ハ是ヲ本章即チ第八章騷擾ノ罪ノ次ニ規定スルコト、爲シ舊法ニ多少ノ修正ヲ加ヘタリ蓋シ元來放火及ヒ失火ハ我國ニ在テ其ノ數頗ル多ク其ノ危害モ亦極メテ大ナルヲ以テ舊法ニ於テモ稍々詳細ナル規定ヲ設ケタリト雖モ尚ホ脫漏セルモノ尠少ナラサルノミナラス其ノ規定モ亦稍々明瞭ヲ缺ク嫌ナキニアラサルヲ以テ本法ハ一方ニハ其ノ規定ノ趣旨ヲ明ニスルト共ニ一方ニハ其ノ不備ヲ補修シタルモノナリトス。

元來本章規定ノ犯罪ノ如キハ上述ノ如ク其ノ性質不定ノ多數人ニ種々ノ實害又ハ危險ヲ生スルモノ即チ公共ノ安全ヲ害スルノ點ヲ主眼トシテ其ノ犯人ヲ處罰セサル可カラサルモノトス若シ然リトセハ人家稠密セル土地ニ於ケル犯罪ト他ニ多クノ人家アラサル土地ニ於ケル犯罪トニ付キ其ノ處分ヲ異ニスヘキノ理ナリ殊ニ他人ノ所有ニ係ル家屋ナリトスレハ人ノ住居スルト現在スルト然ラサルトハ舊法ノ如ク大ナル差別ヲ立テ、論ス可キニアラサルナリ依テ本法ハ斯ル目的ヲ以テ本罪處分ノ標準ト爲セリ。

第百八條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス

本條ハ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物其ノ他ノモノニ對スル放火罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百二條及ヒ第四百五條第一項ヲ合シ之ニ修正ヲ加ヘタルモノナリトス蓋シ舊法ハ家屋、船舶及ヒ滊車ノ燒燬ニ付

テノミ規定ヲ設クルモ此ノ滊車ノミヲ保護シテ電車ヲ保護セサルヘキ理由ナキノミナラス殊ニ彼ノ鑛坑ノ如キ放火ノ危害却テ家屋ニ勝ルモノアルニ不拘其ノ規定ヲ缺クカ爲メ實際ニ往々不便ヲ感セシ所ナルヲ以テ本法ハ更ラニ電車及ヒ鑛坑ヲ加フルコトニ爲シタリ又舊法ハ本罪ニ對シ單ニ死刑ノミヲ科スト雖モ其ノ刑ノ範圍狹キニ過キ從テ其ノ情狀輕キモノニ對シテモ尙ホ無益ノ酷刑ヲ科スル結果ヲ生シ其ノ害弊ニ困ミシヲ以テ本法ハ刑ノ範圍ヲ廣クシ情狀ニ應シ其ノ刑ヲ定メシムルコトヽ爲シタリ

本罪ノ成立ニハ第一、火ヲ放チテ燒燬シタルコト第二、現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛坑タルコトノ二條件アルヲ要ス

第一、火ヲ放チテ燒燬シタルコトヲ要ス、

火ヲ放チトハ放火ノ目的物自體若クハ其ノ目的物ニ傳火スヘキ媒介物ニ火ヲ移シタル所爲ヲ謂フ換言セハ法律ノ規定シタル物件其レ自身ニ火ヲ移スカ又ハ是等ノモノニ傳火ス可キ或ル媒介物ニ火ヲ移シタル所爲ヲ謂フモノトス之ヲ例ヘハ家屋ノ軒場ニ火ヲ移スカ又ハ其ノ軒下ニ積置キタル芝草ニ火ヲ移スカ如キ之レナリトス而シテ燒燬トハ火ヲ以テ目的物ヲ毀損スル謂ナリトス然レトモ如何ナル程度ニ達シタルトキニ於テ燒燬ノ行爲ヲ遂ケタリトス可キヤニ付キテハ從來學說殆ント歸一スル所ナキカ如シ然シ要スルニ法律カ本罪ノ犯人ニ對シ極メテ嚴重ナル刑罰ヲ科スルコト及ヒ法文ニ火ヲ放チテヽヽヽヽヽヽヽヽヽヲ燒燬シタルモノトアリテ單ニ放火シタルノミニ止マラス其ノ結果ニ付テ燒燬ナル條件アルヲ要スルヨリ之ヲ觀レハ法律ハ規定シタル目的物カ各其ノ性質ニ從ヒ其ノ物件トシテノ存在ヲ亡失セシムルノ程度ニ至ラスンハ燒燬シタリト云フヲ得スト爲スヲ以テ最モ妥當ナル解釋ナリトス故ニ彼ノ建造物ノ如キ單ニ材木其ノ他ノモノトシテハ兎ニ角建造物トシテ旣ニ其ノ存在ヲ失ヒタルカ如キ場合ニハ本條所謂燒燬シタルモノニシテ本罪ノ旣遂ナリトス從テ又彼ノ艦船ノ如キモ單ニ帆柱、煙筒及ヒ甲板ノ一部ヲ燒燬シタルカ如キ場合ニハ未タ以テ艦船ヲ燒燬シタリト謂フヲ得サルナリ。

第二、現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛

坑タルコトヲ要ス、

茲ニ所謂建造物トハ家屋、神社、佛閣、廳舍、學校、博物館、劇場、倉庫等人ノ生活ノ本據トシテ常住起臥ノ爲メ又ハ其ノ他ノ目的ニ於テ土地ニ定着シテ建造セラレタル物件ヲ謂ヒ、而シテ其ノ木造タルト石造又ハ煉瓦造タルト及ヒ其ノ大小種類ノ如何ハ之ヲ問ハサルモノトス、又茲ニ汽車、電車トハ陸上ニ於テ人及ヒ貨物ヲ運搬スルコトヲ目的トシ蒸汽力又ハ電氣力ニ因テ運轉スル車輛ヲ謂フ、而シテ法文汽車、電車ト特定スルカ故ニ馬車、人車、自働車ハ之ヲ包含セサルモノトス尚ホ茲ニ艦船トハ水上ニ於テ如上ノ目的ヲ以テ蒸汽力其ノ他ノ機械力ニ因テ運轉スル船舶ヲ謂フ、而シテ其ノ大小形狀ノ如何ハ之ヲ問ハサルモノトス、尚又茲ニ鑛坑トハ明治二十三年法律第八十七號鑛業條例第二條ニ規定シタル總テノ鑛物ヲ採堀スル坑口ヲ謂フモノトス。

以上ノ建造物カ現ニ人ノ住居ニ使用セラレタルトキ之ヲ燒燬セハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス、然シ本法ハ舊法ト異ナリ假令此等ノ建造物カ現ニ人ノ住居ニ使用セラレサルモ現ニ人カ其ノ所ニ存在スルニ於テハ矢張リ之ヲ燒燬セハ本罪ニ依リ處分セラル可キモノトス、而シテ茲ニ現ニ人ノ住居ニ使用シトハ所有者ノ何人タルヲ問ハス現ニ人カ生活ノ本據トシテ住居ニ使用セルヲ意味スルモノトス故ニ舊法ト異ナリ現在其ノ所ニ人カ居ラスト雖モ居住者ノ存在スルモノナルニ於テハ矢張リ茲ニ所謂現ニ人ノ住居ニ使用スルモノナリトス而シテ又茲ニ人ノ現在スルトハ假令人ノ住居ニ使用スル目的ヲ以テ建造セラレタルニアラス從テ居住者ナキモ放火ノ當時休息其ノ他ノ目的ヲ以テ現ニ人ノ居リシコトヲ意味スルモノナリトス。

尚ホ本罪ノ成立ニハ火ヲ放ツコト、燒燬スルコト、ノ意思アルヲ要スルヤ勿論ナリトス故ニ例ヘハ單ニ人ヲ驚カサンカ爲メ直チニ消シ止ムル意思ヲ以テ家屋ニ放火シタル者ノ如キハ實際之ヲ燒燬スルノ意思ナキモノナルヲ以テ本罪ヲ構成スルコトナキモノトス、但シ意外ニモ家屋ヲ燒燬ノタルトキハ失火罪ヲ構成スルニ過キサルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ死刑又ハ無期懲役若クハ五年以下ノ懲役ノ範圍ニ於テ裁判官其ノ情狀ニ依リ之ヲ量定シテ處分ス可キモノトス。

第百九條　火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス
前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス但公共ノ危險ヲ生セサルトキハ之ヲ罰セス

本條ハ人ハ住居セス又ハ人ハ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノハナリ。
本條第一項ハ犯人以外ノ者ノ所有ニ係ル現ニ人ノ住居セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百三條及ヒ第四百五條第二項ノ規定ヲ合シ之ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ、而シテ其ノ修正ノ理由ハ前條ト同一ナリ但シ汽車、電車ニ付キテハ必要ナキヲ以テ之ヲ除キタリ。
本條第一項規定ノ犯罪ヲ構成スルニハ第一、火ヲ放テ燒燬シタルコト及ヒ第二、人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル他人ノ建造物、艦船若クハ鑛坑タルコトノ二條件アルヲ要ス。
第一、火ヲ放テ燒燬シタルコトヲ要ス。
茲ニ火ヲ放テ燒燬シタルコトハ前條ニテ既ニ説明シタルカ如ク現ニ人ノ住居ニ使用セサルカ又假令使用スルモ現ニ人ノ存在セサル犯人以外ノ者ノ所有ニ屬スル建造物、艦船若クハ鑛坑ニ對シ火ヲ移シ以テ是等ノ物ノ大部分ヲ燒キタル所爲ヲ謂フモノトス其ノ詳細ニ付キテハ請フ前段ヲ參照セヨ。
第二、現ニ人ハ住居ニ使用セス又ハ人ハ現在セサル他人ハ建造物、艦船若クハ鑛坑タルコトヲ要ス。
茲ニ現ニ人ハ住居ニ使用セサル建造物トハ人ノ生活本據トシテ起臥常住ノ爲メニ現ニ使用セサル建造物例ヘハ神社、佛閣、土藏、物置等ノ如キモノヲ謂フ然シ是等ノモノト雖モ現ニ人カ在住スルニ於テハ前條ノ範圍ニ屬ス可キモノニシテ本條ノ範圍外ナリトス、又茲ニ人ハ現在セサル建造物トハ人ノ住居用ニシタルモノニアラサルハ勿論假令人ノ住居用ニ建造シタルモノト雖モ現ニ人ノ

在住セサル建造物例ヘハ明屋ノ如キモノヲ謂フ意ナリトス、而シテ尚ホ玆ニ艦船若クハ鑛坑ノ意義ニ付テハ既ニ前條ニ於テ述ヘタルト同一ナリ、但シ是等艦船又ハ鑛坑モ現ニ人ノ住居ニ使用セサルカ又ハ人ノ現在セサルモノタルコトヲ要ス、而シテ此等ノ物ハ必ラス犯人以外ノ者ノ所有ニ係ルコトヲ要ス若シ犯人ノ所有ニ係ルトキハ本條第二項ノ支配ヲ受ク可キモノナリトス。

以上ノ條件ヲ具備シタルトキハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ハ犯人ノ所有ニ係ル物ニシテ現ニ人ノ住居セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百七條ヲ修正シタルモノナリ、蓋シ舊法ハ家屋ニ關スル規定ノミヲ設クト雖モ是又前條ト同一理由ニ因リ本法ハ廣ク建造物トナスト共ニ艦船ト鑛坑トヲ加ヘタリ。

本條第二項規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一、火ヲ放テ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト及ヒ第二、現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル犯人所有ノ建造物、艦船若クハ鑛坑タルコトノ二條件ヲ要ス。

第一、火ヲ放テ燒燬シ因テ公共ハ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

玆ニ公共ハ危險ヲ生セシメタルコトハ公衆ニ危懼ノ念ヲ抱カシムルノ所爲ヲ謂フモノトス、蓋シ其ノ公共ノ危險ヲ生セシメタルヤ否ヤハ結局事實問題ニシテ偏ニ裁判官ノ判定ニ委ス可キモノナリト雖モ例之彼ノ人家ヲ離レタル一軒屋ニシテ自己ノ所有ニ係ルモノナルニ於テハ之ヲ燒燬ストモ何等公衆ヲ騷擾セシメタルニアラサル以上ハ本條但書ニ依リ之ヲ罰セサルモノト知ル可シ、是レ蓋シ上ニモ述ヘタルカ如ク元來放火罪ナルモノハ公共ノ安全ヲ害ストノ點ヲ主眼トシテ處罰スルモノナルカ故ニ其ノ物件ニシテ自己ノ所有ニ係リ而モ何等公共ノ危險ヲ生セシメタルニアラサル以上ハ以テ公共ノ安全ヲ害シタリト云フヲ得サルカ故ニ之ヲ處罰スルノ必要ナシトシ因テ本條第二項ノ但書ヲ設ケタル所以ナリトス、然リト雖モ其ノ物ニシテ苟クモ犯人以外ノ者ノ所有ニ係ルニ於テハ假令人里ヲ離レタル一軒屋ナルニ於テモ之ヲ燒燬セハ本條第一項ニ依リ所罰セラル可キモノトス。

犯人若シ自己ノ家屋ナリト信シテ他人ノ家屋ヲ燒燬シタルカ如キ目的物ト

意思トノ間ニ錯誤アリタルトキハ第三十八條第二項ノ適用ヲ受ケ本條第一項ニ依リ之ヲ論スルコトヲ得サルモノトス。

第二現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル犯人所有ノ建造物、艦船若クハ鑛坑タルコトヲ要ス、

本條第一項ハ犯人以外ノ者ノ所有ニ係ル物件ニ關スル規定ナルモ本項ハ犯人ノ所有ニ係ル物件ニ關スル規定ナルノ差異アルニ止マリ其ノ他ハ第一項ト同一ナルヲ以テ別ニ論セス。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。終リニ一言ス可キハ若シ他人ヲ敎唆シテ現ニ人ノ住居ニ使用セサル自己ノ家屋ヲ燒燬セシメタル場合ニ於テ其ノ行爲者及ヒ敎唆者ハ如何ニ處分ス可キヤノ問題是ナリトス、蓋シ一見本條第一項ヲ以テ處斷ス可キモノナルカ如シト雖モ元來主觀的放火ノ原因タル唯一ノ意思カ所有者自身ニ在ルモノニシテ恰モ彼ノ人ヲ敎唆シテ自殺ヲ補助セシメタルト同樣ナルヲ以テ本條第二項ニ依リ論ス可キモノニシテ行爲者タル他人ハ正犯、敎唆者タル所有者ハ其ノ敎唆者トシテ處分ス可キモノト爲スヲ妥當トス。

第百十條　火ヲ放テ前二條ニ記載シタル以外ノ物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ物自己ノ所有ニ係ルトキハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ前二條ニ記載シタル以外ノ物件ニ對スル放火罪ヲ規定シタルモノナリ。

本條第一項ハ舊法第四百四條及ヒ第四百六條ヲ合シ之ヲ擴張修正シタル規定ニシテ犯人以外ノ者ノ所有ニ係リ前二條ニ記載シタル以外ノ物件ニ放火シ因リテ公共ノ危險ヲ生セシメタル場合ニ關スルモノナリトス。

本條第一項ノ規定ハ罪ヲ構成スルニハ次ノ二條件アルヲ要ス即チ第一、火ヲ放テ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト及ヒ第二、前二條ニ記載シタル以

外ノ物ニシテ他人ノ所有ニ係ルモノナルコト是レナリトス。

第一、火ヲ放テ焼燬シ因テ公共ハ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

前條ニ於テ既ニ説明シタル如ク茲ニ公共ノ危險ヲ生セシメトハ火ヲ放テ前二條ニ例示シタル以外ノ物ヲ焼燬シ爲メニ公衆ニ危懼ノ念ヲ抱カシメタル所爲ヲ謂フモノトス故ニ前二條ニ記載シタル以外ノ物ヲ焼燬スルモ因テ公衆ニ何等危懼ノ念ヲ抱カシメタルニアラサルトキハ第四十章毀棄罪ニ依ルハ兎ニ角本罪ニヨリ之ヲ論スルコトヲ得サルモノトス、蓋シ前二條ニ記載シタル物件ノ如キハ其ノ物ノ焼燬自身當然公共ノ危險ヲ生ス可キモノナルカ故ニ殊更ニ本條件ヲ附スルノ必要ナシト雖モ本條記載ノ物件ノ如キハ其ノ物自身ノ焼燬ノミニテハ必スシモ常ニ公共ノ危險ヲ生スルモノト云フヲ得ス、故ニ法律ハ只公共ノ危險ヲ生セシメタルトキニ限リ之ヲ罰ス可キコトヲ特記シタルモノナリトス、而シテ茲ニ公共ノ危險トハ必スシモ他人ノ財産ニ損害ヲ及ホシタルコトノミヲ意味スルモノニアラス時ト場所ニヨリテハ假令藁一束焼燬スルモ公共ノ危險ヲ生スルコトナキニアラス其ノ事實果シテ公共ノ危險ヲ生セシメタルヤ否ヤハ畢竟實際ニ臨ミ決ス可キ事實問題ナリトス。

第二、前二條ニ記載シタル以外ノ物ニシテ他人ノ所有ニ係ルモノナルコトヲ要ス、

前二條ニ記載シタル以外ノ物ニシテ他人ノ所有ニ係ルモノトハ犯人以外ノ者ノ所有ニ係ルモノニシテ第百八條及ヒ第百九條ニ記載シタル物件以外ノ有ラユル動産不動産ノ有體物ヲ總稱スル意ナリトス(民法第八十五條參照)故ニ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル汽車、電車及ヒ凡テノ人車馬車ハ勿論舊法第四百四條及ヒ第四百六條記載ノ物件等其ノ公有ナルト私有ナルトヲ問ハス凡テ本條所謂物ノ中ニ包含スルモノトス、然レトモ有體物ナルヲ要スルカ故ニ自然的及ヒ人工的ノ力ハ茲ニ所謂物ニアラス其ノ他苟クモ有體物ナルニ於テハ其ノ固形體ナルト流動體ナルト將又瓦斯體ナルトヲ問ハス凡テ物ナリトス、但シ人體ハ勿論彼ノ太陽、月、星ノ如キ吾人ノ權力ニ服從セシメ得可カラサルモノハ素ヨリ物ニアラス。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス

本條第二項ハ新ニ設ケタル規定ニシテ犯人ノ所有ニ係ル第一項記載ノ物ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノナリトス。

本條第二項規定ノ罪ノ成立ニハ第一、火ヲ放テ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト及ヒ第二、前二條ニ記載シタル以外ノ自己ノ所有ニ係ルモノタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、火ヲ放テ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

前ニモ述ヘタルカ如ク元來自己ノ所有物ヲ燒燬スルハ一種ノ處分行爲ニシテ之ヲ罪スルヲ得サルカ如シト雖モ因テ以テ公衆ニ不安ノ念ヲ抱カシムルニ至リテハ公共ノ安全ヲ妨クルモノナルカ故ニ法律ハ公共ノ安寧ヲ維持スルノ必要上之ヲ罰スルコトヽ爲シタルモノナリトス、而シテ如何ナル場合ニハ公共ノ危險ヲ生セシムルヤハ前述ノ如ク結局裁判官ノ判定ヲ俟テ知ル可キコトナリト雖モ彼ノ往々人家稠密ノ場所ニ於テ自家ノ塵芥ヲ燒燬スルカ如キ若シ爲メニ附近ノ人々ヲシテ火事ト誤認セシメ不安ノ念ヲ抱カシムルニ至リタルカ如キ場合ニハ公共ノ危險ヲ生セシメタルモノトシテ本條ニ依リ處分ス可キモノナリト信ス。

第二、前二條ニ記載シタル以外ノ自己ノ所有ニ係ル物タルコトヲ要ス、

既ニ第一項ニ於テ説明シタル所ト同一ナルヲ以テ再説セス只第一項ハ他人ノ所有ニ係ル物ニ關スル規定ナルモ本項ハ自己ノ所有物ニ關スル規定タルノ差異アルニ過キス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ一年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス。

第百十一條　第百九條第二項又ハ前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ第百八條又ハ第百九條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前條第二項ノ罪ヲ犯シ因テ前條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタル時ハ三年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ自己ノ所有物ヲ燒燬スル意思ヲ以テ放火シタル結果他人ノ所有物ニ

延燒シタル場合ニ於ケル罪ヲ規定シタルモノニシテ本法ノ新設ニ係ル規定ナリトス。

本條第一項ハ自己ノ所有ニ係リ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑又或ハ第百八條及ヒ第百九條ニ記載シタル以外ノ自己ノ所有物ヲ燒燬シ因テ其ノ結果現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛坑又或ハ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル他人ノ所有ニ係ル建造物、艦船若クハ鑛坑ニ延燒セシメタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本罪ハ成立ニハ第一、第百九條第二項又ハ第百十條第二項ノ罪ヲ犯シタルコト、第二、其ノ結果第百八條又ハ第百九條第一項ニ記載シタル物ニ延燒シタルコト及ヒ第三、第百九條第二項又ハ第百十條第二項ノ罪ノミヲ犯スノ意思アリタルコトノ三條件アルヲ要スト雖モ前段ノ説明ヲ參照セハ別ニ説明ヲ要セスシテ明カナルヲ以テ茲ニ之ヲ詳論セス只茲ニ注意ス可キハ第三ノ條件ナリトス即チ本罪ハ自己ノ所有物ヲ燒燬スル意思ヲ以テ放火シタルコトヲ要ス若シ初メヨリ他人ノ物ニ延燒セシムル意思ヲ以テ自己ノ所有物ニ放火シ因テ延燒セシメタルモノナルニ於テハ其ノ目的物ノ如何ニ從ヒ第百八條第一項第百十條第一項ノ罪成立シ本罪ヲ構成スルコトナキモノトス而シテ以上ノ三條件具備スルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ハ第百八條第百九條ニ記載シタル以外ノ物件ニシテ自己ノ所有ニ係ル物ヲ燒燬シ其ノ結果同一種類ノ物件ニシテ他人ノ所有ニ係ル物ニ延燒セシメタル場合ニ於ケル罪ヲ規定シタルモノニシテ本罪ハ成立ニハ第一、第百八條第百九條ニ記載シタル以外ノ物件ナルコト、第二、自己ノ所有ニ係ル物ヲ燒燬スル意思ヲ以テ燒燬シタルコト及ヒ第三、他人ノ所有ニ係ル物ニ延燒シタルコトノ三條件アルヲ要ス而シテ此三條件ヲ具備シタルトキハ三年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

第百十二條　第百八條及ヒ第百九條第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本章ハ火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル罪及ヒ火ヲ放テ他人ノ所有ニ係リ現ニ人ノ住居ニ

使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ヲ燒燬シタル罪ノ未遂罪ハ之ヲ處罰ス可キコトヲ規定シタルモノナリ、舊法ニ於テハ重罪タル放火罪ハ總則適用ノ結果別ニ規定ヲ要セスシテ其ノ未遂ヲ罰スト雖モ輕罪タル放火罪ノ未遂ハ之ヲ罰セサリシカ（舊法第百十三條參照）本法ハ總テ未遂罪ヲ罰スル場合ハ各本條ニ於テ之ヲ定ムト爲シタルカ故ニ特ニ本條ヲ新設シ以テ第百八條及ヒ第百九條第一項ノ罪ノ未遂罪ハ之ヲ罰スト爲シタル所以ナリトス（第四十四條參照）。

元來放火罪ノ既遂未遂ノ分界如何ハ頗ル議論ノアリタル問題ニシテ或ハ曰ク目的物ニ傳火ス可キ媒介物ニ火ヲ移シタルトキハ既遂ナリ或ハ曰ク目的物自體ニ傳火シタルトキハ既遂ナリ或ハ曰ク目的物ノ燃出シタル火力カ當然目的物ヲ燒失セシム可キ狀況ニ達シタルトキハ既遂ナリ或ハ曰ク目的物カ其性質上其ノ物トシテノ存在ヲ亡失シタルトキハ既遂ナリト學說殆ント歸一スルナキカ如シト雖モ既ニ第百八條ヲ釋義スルニ當リ說明シタルカ如ク最後ノ說ヲ以テ最モ妥當ナリト信ス、故ニ例ヘハ家屋ニ對スル放火罪ニ於テ假令一枚ノ板一本ノ柱又ハ家屋ノ床トシテハ何等缺クル所ナシト雖モ苟クモ一軒ノ家屋トシテノ存在ヲ失ヒタル場合ニハ既遂ナリト爲スモノトス。

第百十三條 第百八條又ハ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其ノ豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

本條ハ第百八條又ハ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其ノ豫備ヲ爲シタル者ヲ罰スヘキコトヲ規定シタルモノニシテ本法ノ新設ニ係ル規定ナリトス、蓋シ第百八條及ヒ第百九條第一項ニ規定スルカ如キ重要ナル財物ニ對シ放火ヲ爲スノ目的ヲ以テ其ノ準備ヲ爲スカ如キハ事極メテ危險ナルニ由リ其ノ準備行爲ヲ罰シテ以テ大害ヲ未發ニ防止スルノ必要大ナリトス、舊法之ヲ罰セサリシハ大ナル缺點ナルカ故ニ本法ハ社會公共ノ安寧上之ヲ罰スルコト、爲シ本條ヲ設ケタル所以ナリトス。

而シテ茲ニ豫備トハ放火ニ對スル準備行爲ヲ謂フモノナリト雖モ其ノ範圍

如何ニ付キテハ結局事實問題ナリトス、斯ク其ノ豫備ノ範圍極メテ廣汎ニシテ彼ノ燐寸ヲ携ヘテ徘徊スルカ如キモ其ノ目的放火ナルニ於テハ矢張放火罪ノ豫備ナリト謂フヲ得ヘキカ如クナルヲ以テ苟クモ本條所謂第百八條又ハ第百九條第一項ノ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其ノ豫備ヲ爲シタル者ナルニ於テハ凡テ之ヲ二年以下ノ懲役ニ處スルハ稍々苛酷ニ失スルノ嫌アリ殊ニ彼ノ痴情ノ結果又ハ失戀ノ餘リ前後ノ思慮モナク放火セント準備シタル場合ノ如キ時ニ何等之ニ刑罰ヲ科スルノ必要ナキコト多カル可シ爰ヲ以テ本條ハ其ノ但書ニ於テ情狀ニ因リ其ノ刑ヲ免除スルコトヲ得ト爲シタリ、然レトモ何等免除ノ情狀ナキニ於テハ常ニ二年以下ハ懲役ニ處ス可キモノハトス。

第百十四條　火災ノ際鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ鎭火ヲ防害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ火災ノ際鎭火ノ防害ヲ爲シタル罪ニ付キ規定シタルモノニシテ本法ハ新設ニ係ル規定ナリトス、蓋シ斯ル所爲ハ公共ノ安寧上最モ悪ム可キ所爲ニシテ處罰ノ必要アルモ舊法ノ缺如セル所ナリシヲ以テ本法ハ之ヲ補充シタルモノナリトス。

本條規定ノ犯罪ヲ構成スルニハ第一、火災ノ際タルコト及ヒ第二、鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其ノ他ノ方法ヲ以テ鎭火ヲ妨害シタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、火災ノ際タルコトヲ要ス、

茲ニ火災ノ際トハ放火タルト失火タルト又人爲ニ基クト天災ニ基クト其ノ何レタルヲ問ハス火力ニ依リテ災害ヲ受クル總テノ場合ヲ謂フモノトス、而シテ其ノ程度如何ニ付キテハ畢竟事實問題ニシテ結局ハ裁判官ノ判定ニ委ス可キモノトス。

第二、鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其ノ他ノ方法ヲ以テ鎭火ヲ妨害シタルコトヲ要ス、

本條鎭火用ノ物トハ消防用ノ機械器具其ノ他苟クモ火ヲ消シ止ムル爲メニ

通常使用セラルヽ所ノ總テノ物件ヲ謂フモノトス、又茲ニ隱匿トハ總テ他人ノ發見ヲ妨クル所爲ヲ謂ヒ損壞トハ其ノ物件ノ性質ニ應シ其ノ用ヲ失フ程度ニ物質的損害ヲ加フルヲ謂フモノトス、故ニ例之消防用ノ梯子ヲ他人ノ發見シカタキ所ニ隱スカ如キ又ハ其ヲ使用スルコト能ハサルマテニ破壞スルカ如キハ即チ茲ニ所謂鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞スルノ所爲ナリトス、而シテ法文ニ其他ノ方法ヲ以テ云々トアルカ故ニ鎭火用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞スルノ所爲ハ單ニ鎭火ヲ妨害スルノ方法ヲ例示シタルニ止リ法律ハ決シテ之ノ所爲ノミニ制限シタルモノニアラス故ニ彼ノ水道ヲ堰キ止ムルカ如キ又ハ消防夫ノ通行ヲ妨クルカ如キハ勿論苟クモ鎭火ヲ防害シタルニ於テハ其ノ方法ノ如何ヲ問ハス凡テ本罪ヲ構成スルモノトス、但シ素ヨリ鎭火ヲ妨害スルノ意思ヲ以テ爲サレタルモノタルヲ要スルヤ言フ迄モナシトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス

第百十五條　第百九條第一項及ヒ第百十條第一項ニ記載シタル物自己ノ所有ニ係ルト雖モ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノヲ燒燬シタルトキハ他人ノ物ヲ燒燬シタル者ノ例ニ同シ

本條ハ差押ヲ受ケ物權ヲ設定シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル自己ノ所有物ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本法カ新ニ設ケタル規定ナリトス蓋シ假令自己ノ所有物ナリト雖モ若シ其ノ物カ差押ヲ受ケ又ハ物權若クハ賃貸借契約ノ目的物ト爲リ或ハ之ヲ保險ニ付シタルカ如キ場合ニハ之ヲ燒燬スルニ於テハ因リテ其ノ結果他人ノ物ヲ燒燬スルニ均シキモノナルヲ以テ他人ノモノヲ燒燬シタル場合ノ例ニ準シ之ヲ處罰シ以テ彼我ノ權衡ヲ得セシムルノ必要アリ故ニ本法カ本條ヲ新設スルニ至リタルモノナリトス。

本罪ノ成立ニハ次ノ三條件ヲ具備スルヲ要ス即チ第一、自己ノ所有ニ係ル第百九條第一項及ヒ第百十條第一項ニ記載シタル物ナルコト第二、差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノナルコト及ヒ第三、燒燬シタルコト是レナリトス。

第一、自己ノ所有ニ係ル第百九條第一項及ヒ第百十條第一項ニ記載シタル物

タルコトヲ要ス、

即チ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車、艦船若クハ鑛坑ヲ除キタル其他一切ノ自己所有物タルコトヲ要ス、故ニ以上ノ如キ物件タリトモ現ニ人ノ現在セサル物ナルニ於テハ勿論其ノ他一切ノ有體物ニシテ自己ノ所有物ハ凡テ茲ニ之ヲ包含スルモノトス、蓋シ是等ノ自己所有物ハ假令之ヲ燒燬スト雖モ是レ一ノ處分行爲ナルカ故ニ因テ其ノ結果公共ノ危險ヲ生セシメタルニアラサル以上ハ何等罪トナラサルモノナリト雖モ然レトモ尚ホ是等ノ物ト雖モ次ノ條件ヲ具フルニ於テハ本條規定ノ犯罪ヲ構成スルコトトナルモノトス。

第二、差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル物ナルコトヲ要ス、

茲ニ差押ヲ受ケタル物トハ民事訴訟法第六編所謂强制執行ニ因ル差押ヲ受ケタル物ヲ謂ヒ又物權ヲ負擔シタル物トハ民法第二編所謂地上權、永小作權、地役權、質權、若クハ抵當權ヲ設定シタル物ヲ謂ヒ又賃貸シタル物トハ民法第六百一條所謂相手方ニ或物ノ使用及ヒ收益ヲ爲サシムルコトヲ約シ相手方之ニ其ノ賃金ヲ拂フコトヲ約シ引渡シタル物ヲ謂ヒ且又保險ニ付シタル物トハ相手方偶然ナル一定ノ事故ニ因リテ生スルコトアルヘキ損害ヲ塡補スルコトヲ約シ當事者又之ニ對シ其ノ報酬ヲ與フルコトヲ約シタル目的物ヲ謂フモノトス（商法第三百八十四條參照）故ニ例ヘハ自己ノ負擔セル債務ヲ辨濟スル能ハスシテ債權者ノ爲メニ差押ヘラレタル自己所有ノ倉庫ノ如キ又ハ自己ノ債務ノ擔保ニセンカ爲メ抵當權ノ目的物トナシタル家屋ノ如キ又ハ他人ニ賃貸シタル船舶ノ如キ又ハ保險契約ノ目的物タル家屋ノ如キハ即チ茲ニ所謂差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル物ナリトス

第三、燒燬シタルコトヲ要ス、

茲ニ燒燬ノ意義ニ付キテハ既ニ述ヘタルヲ以テ再説セス只茲ニ注意ス可キハ其ノ燒燬シタル物件カ即チ第二條件ニ於テ述ヘタルカ如キ差押其ノ他ノ目的物ナリシコト是レナリトス、尚ホ犯人ニ於テ是等ノ目的物ヲ燒燬スルノ意思アリシヲ要スルヤ勿論ナリトス。

從來往々自己ノ家屋其ノ他ノ建造物ヲ火災保險ニ附シ而シテ自ラ是等ノ物ニ放火シ因テ保險金ヲ詐取セントシタルカ如キ實例之レアリシモ本法ノ實施ト共ニ今後是等ノ不德漢ハ本條ニ依リ嚴罰セラル可キモノトス。

以上ハ條件ヲ具備スルニ於テハ他人ノ物ヲ燒燬シタル者ハ例ニ準シテ處罰スヘキモノハトス、即チ其物カ現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ナルニ於テハ第百九條ニ依リ二年以上ノ有期懲役ニ處ス可ク又若シ其ノ物カ第百十條記載ノ物件ナルニ於テハ同條ニ依リ處分ス可キカ如ク要スルニ其ノ目的物ノ區別ニ從ヒ第百九條乃至第百十二條ノ規定ヲ適用シ之ヲ處罰ス可キモノトス

第百十六條　火ヲ失シテ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ燒燬シタル者ハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス

火ヲ失シテ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

本條ハ失火ノ罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百九條ヲ少シク修正シタルニ止リ其ノ趣旨ニ於テハ同一ナリト雖モ舊法ノ刑ハ稍々輕キニ失スルヲ以テ本法ハ之ヲ重クシタリ、蓋シ本罪ノ如キハ假令罪ヲ犯スト雖モ其ノ意ニアラサルノ所爲ナルカ故ニ刑法ノ原則上之ヲ罰スルヲ得サルモノナリト雖モ其ノ結果タルヤ常ニ社會ニ多大ノ損害ヲ與フルモノニシテ公共ノ安寧ヲ害スルコト實ニ甚タシキモノナルカ故ニ特ニ法律ハ本條ヲ設ケテ之ヲ罰スルコト、爲シタルモノナリトス(第三十八條第一項但書參照)。

本條第一項ハ火ヲ失シテ第八條記載ノ物件ヲ燬燒シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本罪ノ成立ニハ第一、火ヲ失シテ燒燬シタルコト及ヒ第二、第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物タルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、火ヲ失シテ燒燬シタルコトヲ要ス、

本條火ハ失ストハ過失ニ因リテ火ヲ出スコトヲ謂フ、而シテ過失トハ豫見ス可ク從テ豫見セサルヘカラサルニ拘ラス之ヲ豫見セサリシ不注意ト云フ意思ノ狀態ニ於テ爲シタル行爲ヨリ豫期セサル結果ヲ惹起セシメタル事實ヲ云フモノトス、從テ假令責任能力者ト雖モ何等注意スヘキ義務ナキコトニ關シテハ不注意ナル問題ヲ生セサルカ故ニ過失ヲ爲スヲ得サルヘク又假令注意スヘキ義務アル場合ト雖モ其ノ豫見シ得可キ場合ニアラサルニ於テハ即チ不可抗力ニ出ツルモノニシテ是又不注意ト云フヲ得サルヘク從テ過失ノ問題ヲ生セサルヘシ、蓋シ此事ニ付キテハ從來實際家ノ最モ困難ヲ感シタル所ナリトス、如何トナレハ凡ソ火災ノ虞ルヘキコトハ何人モ之ヲ識ル所ナルヲ以テ通常注意スルモ尚ホ且意外ノ邊ヨリ火ヲ發スルコト往々之アル所ナルカ故ニ其ノ果シテ豫見シ得ヘキ場合ナリシヤ或ハ又不可抗力ニ出テシモノナルヤニ付キ判定スルニ困難ナルモノアレハナリ而ラハ其ノ果シテ犯人ニ於テ過失アリヤ否ヤノ問題ハ之ヲ如何ニ決ス可キカ蓋シ此ハ過失ハ標準タルヤ必ラス一般抽象的即チ一般ハ慣習ニ依リテ定ムヘキモノハニシテ犯人ト其ノ他諸般ノ事情トヲ酌量シ以テ主觀客觀ヲ折衷シ由テ之ヲ決定スヘキモノナリトス。

以上ノ如ク過失犯ハ結果ノ發生ヲ俟テ發生スヘキ無意犯ナルモ彼ノ未遂犯ハ常ニ有意犯タルヘキモノナルカ故ニ過失犯ニハ未遂犯ナク茲ニ所謂燒燬ハ前述ノ如ク目的物ノ原體ヲ亡失セシムルノ程度ニ達シタルコトヲ要スルカ故ニ彼ノ大事ニ至ラスシテ止ミタルカ如キ場合ニハ無罪タルヘキモノトス。

第二、第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物タルコトヲ要ス、

即チ既ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦船若クハ鑛坑ハ其ノ他人ノ所有ナルト自己ノ所有ナルトヲ問ハス苟クモ火ヲ失シテ之ヲ燒燬スルニ於テハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス、而シテ尚假令現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物、艦船若クハ鑛坑ナリト雖モ苟クモ其ノ物ニシテ他人ノ所有ニ屬スル以上ハ此又常ニ本罪ノ客體タルヘキモノトス、然シ必ラスヤ他人ノ所有物タルコトヲ要スルカ故ニ假令質、抵當其ノ他ノ原因ニ由リ他人ノ占有スル物ト雖モ第百九條記載ノ物件ハ苟クモ自己ノ所有物ナル以

上ハ決シテ本條第一項規定ノ犯罪ノ目的物タルコトヲ得サルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス、

本條第二項ハ火ヲ失シテ第百九條又ハ第百十條記載ノ自己ノ所有物ヲ燒燬シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本項ノ罪ノ成立ニハ第一、火ヲ失シテ燒燬シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト、及ヒ第二、第百九條又ハ第百十條記載ノ自己ノ所有物タルコトノ二條件アルヲ要スルモノナリト雖モ畢竟本罪ハ第百九條第二項ノ規定及ヒ第百十條第二項ノ規定ヲ本條第一項ノ規定ニ適用シタルニ過キサルモノナルヲ以テ以上ノ各條件ハ孰レモ既ニ述ヘタル所ニ依リ明瞭ナルカ故ニ茲ニ別ニ說明セサルヘシ請フ前段ヲ參照セヨ、但シ本罪モ以上ノ二條件ヲ具備シタルトキハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス。

第百十七條　火藥、滊鑵其他激發ス可キ物ヲ破裂セシメテ第百八條ニ記載シタル物又ハ他人ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物ヲ損壞シタル者ハ放火ノ例ニ同シ自己ノ所有ニ係ル第百九條ニ記載シタル物又ハ第百十條ニ記載シタル物ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

前項ノ行爲過失ニ出テタルトキハ失火ノ例ニ同シ

本條ハ火藥、滊鑵其ノ他激發スヘキ物ヲ破裂セシメテ物ヲ損壞シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百十條ニ該當スル規定ナリトス。

本條第一項規定ノ罪ノ成立ニハ第一、火藥、滊鑵其ノ他激發スヘキ物ヲ破裂セシメタルコト、第二第百八條又ハ第百九條第一項記載ノ物ヲ損壞スルカ或ハ第百九條第二項記載ノ物件ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ要ス、

第一、火藥、滊鑵其ノ他激發スヘキ物ヲ破裂セシメタルコトヲ要ス、

其ノ火藥タルニ於テハ如何ナル種類ノモノタルト又其ノ分量ノ如何ハ之ヲ問ハサルモノトス而シテ茲ニ火藥及ヒ滊鑵ハ單ニ激發スヘキ物ヲ例示シタル

ニ止ルカ故ニ只ニ火藥又ハ瓦罐ニ限ラス其ノ他如何ナル物ト雖モ苟クモ激發スヘキ性質ノ物タルニ於テハ總テ本罪成立ノ手段タル破裂ノ目的物タルコトヲ得ルモノトス而シテ尚ホ本條件ハ彼ノ第四十章規定ノ毀棄罪ト區別セラル丶要點ニシテ若シ如上ノ手段ニ依ルコトナクシテ他人ノ建造物又ハ艦船ヲ損壞シタルトキハ本罪ヲ構成スルコトナクシテ第二百六十條規定ノ犯罪ヲ構成スルモノナリトス。

第二、第百八條又ハ第百九條第一項記載ノ物件ヲ損壞スルカ或ハ又第百九條第二項又ハ第百十條第二項記載ノ物件ヲ損壞シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

本罪カ前數條放火及ヒ失火罪ト異ナル所ハ犯罪ノ結果カ彼ノ燒燬ナルモ是ハ損壞ナルニ在リトス從テ本罪所謂損壞ハ放火及ヒ失火罪所謂燒燬ニ對向スルモノナルカ故ニ其ノ既遂、未遂ノ區別ハ放火及ヒ失火罪ノ例ニ依ルヘキモノナルヲ以テ茲ニ損壞トハ其ノ目的物ニ物質的損害ヲ加ヘ其ノ物トシテノ存在ヲ失ハシメタル所爲ヲ謂フモノナリトス、其ノ他本條件ニ付キテハ深ク說明ヲ要スヘキ點ナシ讀者諸君請フ前段放火罪ノ規定ト對照シ以テ其ノ意義ヲ一層鮮明ニセラレンコトヲ。

以上ハ二條件ヲ具備スルトキハ放火ノ例ニ準シ各其ノ目的物ニ從ヒ第百八條以下ヲ適用シテ處罰ス可キモノナリトス。

本條第二項ハ過失ニ出テ自己又ハ他人ノ所有ニ係ル第一項規定ノ物件ヲ損壞シタル罪ヲ規定シタルモノ即チ自己ノ不注意ヨリ意外ニモ前項規定ノ罪ヲ犯シタル場合ニハ前條失火ノ例ニ依リ處罰スヘキコトヲ規定シタルモノナリトス、（本條ニ付キテハ明治十七年布告第三十二號爆發物取締規則ヲ參照セヨ）

第百十八條　瓦斯、電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ノ生命、身體又ハ財產ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

瓦斯、電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮

斷シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

本條ハ瓦斯電氣又ハ蒸氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷シ因テ人ノ生命、身體又ハ財産ニ危險ヲ生セシメタル罪及ヒ因テ人ヲ死傷ニ致シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本法ノ新設ニ係ル規定ナリトス、蓋シ此等ノ行爲ハ從來往々是レアル所ナリシト雖モ決シテ之ヲ不問ニ付スヘキモノニアラサルカ故ニ本法ハ特ニ本章ヲ設ケ是等ノ犯人ヲ嚴罰スルコトヽナシタルモノナリトス

本條第一項規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一、瓦斯、電氣ヲ漏出若クハ流出セシメ又ハ之ヲ遮斷スルノ所爲アルコト、及ヒ第二、其ノ結果因テ人ノ生命、身體又ハ財産ニ危險ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ要スルモ各條件孰レモ一讀明瞭ナルヲ以テ茲ニ深ク論セサル可シ。

以上ノ二條件ヲ具備スルトキハ三年以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス、

本條第二項ハ第一項規定ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ其ノ情狀重キヲ以テ之ヲ傷害罪ニ比較シテ重キニ從テ處罰スルコトヽ爲シタルモノナリ故ニ即チ本條第一項規定ノ刑罰ト第二百四條以下ニ規定ノ刑罰トヲ比較シ其ノ重キ刑ヲ科ス可キモノトス。

第十章　溢水及ヒ水利ニ關スル罪

本章ノ規定ハ舊法第三編第二章第八節決水ノ罪ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ

蓋シ本章ノ罪モ亦前章ノ放火及ヒ失火ノ罪ト同シク公衆ニ實害及ヒ危險ヲ與フルヲ處罰スル性質ノ罪ニシテ其及ホス所ノ影響ハ決シテ一個人ノ財産ニ止マルモノニアラス、故ニ本法ハ本罪ヲ公共ノ安全ヲ害スルノ罪ト爲シ本章ニ規定スルコトヽ爲シタルナリ、尚ホ之カ處分ヲ設クルニ付テモ其注意ヲ以テ規定セサルヘカラサルカ故ニ舊法之ヲ缺クモ本法ハ本罪ノ性質上缺クヘカラサル規定ト思量シ彼ノ水害ノ際水防ヲ妨害シタル罪ヲ本章第百二十一條ニ新ニ規定スルコトヽ爲シタリ、尚且本法カ舊法ニ決水ノ罪トアルヲ改メ溢水及ヒ水利ニ關スル罪ト爲シタルハ單ニ文字ヲ修正シタルニ止リ趣旨ニ於テハ敢テ改變

シタルニアラサルナリ。

第百十九條　溢水セシメテ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車若クハ鑛坑ヲ浸害シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス

本條ハ溢水セシメテ法律規定ノ物件ヲ浸害シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ、舊法第四百十一條第一項ヲ修正シタルナリ蓋シ舊法ハ溢水セシムル手段ヲ堤防ノ決潰ト水閘ノ毀壞トノ二者ニ制限シタルモ實際上狹キニ失スルヲ以テ本法ハ其手段方法ヲ問ハサルコトト改メ且ツ犯罪ノ物體ニ舊法規定ノ物以外滊車、電車及ヒ鑛坑ヲ加ヘ其範圍ヲ擴充シタリ、而シテ本條ハ前章第百八條ト其立法趣旨ハ同一ニシテ唯前章ノ規定ハ火力ニ因ル侵害ナルモ本章ノ規定ハ水力ニ因ル浸害タルノ差異アルニ過キサルナリ。

本條規定ノ溢水罪ヲ構成スルニハ第一溢水セシメ浸害シタルコト及ヒ第二現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、滊車、電車若クハ鑛坑タルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一溢水セシメ浸害シタルコトヲ要ス、

茲ニ溢水トハ水ヲ汎濫流出セシムルノ所爲ヲ謂フ而シテ法律ハ其手段方法ヲ問ハサルカ故ニ舊法規定ノ如ク堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞スルカ如キハ勿論其他如何ナル手段方法ニ因リタルヲ問ハス苟クモ水ヲ汎濫流出セシメタルノ所爲ハ常ニ本條ニ據リ論ス可キモノトス、然レトモ其結果法律ノ規定シタル物件ヲ浸害シタルコトヲ要ス故ニ假令堤防ヲ決潰シ溢水セシメタリト雖モ何等法律規定ノ物件ヲ浸害シタルニアラサルトキハ第百二十三條規定ノ犯罪ヲ構成スルハ兎ニ角本條ニ依リ處分スヘキ限リニアラサルモノトス、而シテ茲ニ浸害トハ法律規定ノ物件ヲ濡ラシ濕メシテ以テ損害ヲ加フルヲ謂フ但シ其損害ノ程度タルヤ本條浸害ハ第百八條所謂燒燬ニ對立スル語ニシテ其物件ノ性質ニ應シ其物トシテノ用ヲ失フニ至リタルコトヲ要スルモノトス、故ニ例ヘハ溢水ノ爲メ家屋ヲ流失破壞シタルト否トヲ問ハス苟クモ家屋トシテノ用ヲ失フニ至ラシメタルトキハ本條所謂浸害ナリトス、從テ舊法ノ如ク單ニ家屋其

他ノ建造物ヲ漂失シタル場合ノミニ限ラス家屋其他ノ建造物ヲ水中ニ浸シタルニ止マル場合ト雖モ因テ其結果家屋其他ノ建造物トシテノ用ヲ失フニ至ラシムル程度ノ損害ヲ加ヘタルニ於テハ本罪ヲ構成スルモノトス。

第二、現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鑛坑タルコトヲ要ス、

茲ニ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鑛坑トハ前章第百八條ニ於テ詳論シタル物件ト同一ナルヲ以テ茲ニ再說セサルカ故ニ就テ參照セラレンコトヲ請フ、但シ本條艦船ヲ除外シタルハ其性質上溢水ノ爲メ浸害ヲ被ル可キモノニ非サルヲ以テナリ。

尙ホ本罪ノ成立ニハ單ニ溢水セシムルノ意思アルノミナラス進テ法律規定ノ物件タルコトヲ知リナカラ之ヲ浸害スルノ意思アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス故ニ若シ法律ニ規定シタル建造物其他ノ物件ニ非スト信シ本條規定ノ所爲ヲナシタルニ圖ラスモ法律ニ規定シタル物件ナリシ場合ノ如キハ本條ニ依ルコトナク第四十章規定ノ毀棄罪ニ依リ其罪ヲ論スヘキモノナリトス、尙ホ本罪ノ意思ノ實行ハ其性質上水力ト云フカ如キ自然力ヲ假リテ行ハルヽモノニシテ往々浸害ノ目的物ニ對スル意思ハ不定ナルコトアルヘシト雖モ其當然生スヘキ結果ニ對シテハ常ニ其結果ヲ生セシムルノ意思アリトセサルヘカラサルモノトス、蓋シ恰モ彼ノ人ノ死ヲ生スヘキコトアルヲ知リナカラ群集ニ向テ發砲シタルト同シク不測ノ結果ヲ生スヘキ自然力ヲ發生スヘキコトヲ知リナカラ之ヲ爲シタリト云フ行爲自身ノ上ニ於テ犯人ハ之ヨリ當然生スヘキ結果ニ向テ意思アリト云フヘキモノナルカ故ニ敢テ其不明ナル事實ヲ認定スルノ要ナケレハナリトス、從テ彼ノ單ニ人ヲ驚怖セシメンカ爲メ又ハ一時ノ戲謔ニ出テ因テ偶然ノ出來事ヨリ不虞ノ大事ニ至ラシメタルモノニアラサル以上ハ假令犯人ノ意思ニ於テ浸害ノ目的物確定セサルモ苟クモ浸害ノ意思アリテ法律規定ノ物件ノ存在ヲ知リナカラ溢水シ因テ其結果法律規定ノ物件ヲ浸害シタルモノナルニ於テハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス。

以上ノ條件ヲ具備シタルトキハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

第百二十條　溢水セシメテ前條ニ記載シタル以外ノ物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

浸害シタル物自己ノ所有ニ係ルトキハ差押ヲ受ケ、物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル場合ニ限リ前項ノ例ニ依ル

本條第一項ハ溢水セシメテ前條記載以外ノ物件ニシテ他人ノ所有ニ係ルモノヲ浸害シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百十二條ヲ修正シタルモノナリ、即チ同條ニ於テハ溢水ノ場合ヲ制限セルモ本法ハ例示ノ方法ヲ採ラス概括的ニ各場合ニ關スル規定ヲ設ケタルナリ又舊法ハ本條ノ規定ニ鑛坑ニ關スルコトヲ規定セリト雖モ本法ハ前條ニ於テ之カ規定ヲ設ケタルヲ以テ刪除シタリ而シテ本條第一項ハ前章放火及ヒ失火罪中ノ第百十條第一項ト其立法趣旨ヲ同一ニスルモノナリトス。

本條第一項規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一溢水セシメ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト及ヒ第二前條ニ記載シタル以外ノ他人ノ物タルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一溢水セシメ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

即チ單ニ溢水セシメ前條記載以外ノ他人ノ物件ヲ浸害スルモ左マテ公共ノ安全ヲ害シタルモノト云フヲ得サルカ故ニ因テ其結果公共ノ危險ヲ生セシメタルニアラサル以上ハ本章規定ノ罪ニ依リ論スル限リニ非スト爲シタルモノナリ、故ニ單ニ溢水セシメ現ニ人ノ住居セサル他人ノ家屋ヲ浸害シ其結果何等公共ノ危險ヲ生セシメタルニアラサル場合ニハ第四十章規定ノ罪トナルハ格別本條ニ依リ處分スルヲ得サルモノトス、而シテ茲ニ所謂溢水及ヒ浸害ノ意義ニ付キテハ前條ニ於テ既ニ説明シタル所又公共ノ危險ノ何タルヤハ既ニ前章第百九條第二項及ヒ第百十條ニ於テ詳論シタル所ナルヲ以テ茲ニ再説セサルヘシ。

第二前條ニ記載シタル以外ノ他人ノ物タルコトヲ要ス、

前條ニ記載シタル以外ノ物トハ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車電車若クハ鑛坑ヲ除キタル其他一切ノ動産不動産ヲ含ム所ノ有體物ヲ謂フモノトス、故ニ舊法第四百十二條規定ノ田圃牧場等ハ勿論現ニ人ノ住居ニ使用セス又ハ人ノ現在セサル建造物其他有ラユル有體物ハ凡テ之ヲ包含スルモノトス、然レトモ此等ノ物タルヤ他人ノ所有ニ係ルコトヲ要ス蓋シ自己ノ所有ニ係ル此等ノ物ニ付キテハ本條第二項ニ規定スル所アレハナリ、今本罪ニ該當スヘキ一例ヲ示サンニ例ヘハ現ニ人ノ住居ニ使用セサル水車小屋ヲ貫流セル河水ヲ汎濫流出セシメ其小屋ヲシテ再ヒ使用スルヲ得サル程度ニ破壞セシメ且其結果該小屋ニシテ若シ漂失スルコトアラハ爲メニ附近ノ人家ニ多大ノ損害ヲ蒙ラスヘキ狀態ニアリシヲ以テ其附近ノ人々ヲシテ大ニ危懼ノ念ヲ抱カシメタルカ如キ所爲ハ即チ本罪ニ依リ處罰スヘキモノナルカ如キ是レナリトス但シ此場合ニ於テ若シ該小屋ヲ漂失セシメ以テ附近ノ人家ヲ浸害シタルトキハ前條ノ罪ニ擬ス可キモノトス。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス

本條第二項ハ前項所謂浸害シタル物カ自己ノ所有物ニ係リ且ツ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタルモノニ關スル場合ヲ規定シタルナリ、而シテ其規定ノ理由タルヤ前章第百十五條ト全ク同一ナリトス。

本條第二項規定ノ罪ノ成立ニハ第一溢水セシメ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコト及ヒ第二差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸シ若クハ保險ニ付シタル自己ノ所有物タルコトノ二條件アルヲ要ス然シ此等ノ條件ハ孰レモ前章第百十五條及ヒ本條前項ノ說明ヲ參照セハ極メテ明瞭ナルヲ以テ茲ニ更ニ說明スルコトヲ避クヘシ、而シテ此等ノ條件ヲ具備スルトキハ前項他人ノ物ヲ浸害シタルト同シク一年以上十年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

第百二十一條　水害ノ際防水用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ水防ヲ妨害シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス

本條ハ水害ノ際防水ヲ妨害シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本法ノ新設ニ

係ルハ規定ナリトス蓋シ本章規定ノ溢水ノ罪タルヤ前章規定ノ放火罪ト等シク公共ノ安寧ヲ害スル重大ナル犯罪ナルカ故ニ水害ノ際防水ヲ妨害スルカ如キハ彼ノ火災ノ際鎭火ヲ妨害スルト同シク之ヲ嚴罰スルノ必要アルヲ以テ本法本條ヲ新設シタルモノナリトス從テ本條ハ前章第百十四條ト其立法ノ趣旨ヲ同ウスルモノナリ。

本罪ノ成立ニハ次ノ二條件アルヲ要ス即チ第一水害ノ際水防ヲ妨害シタルコト第二防水用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ爲シタルコト是レナリトス。

第一水害ノ際水防ヲ妨害シタルコトヲ要ス、

茲ニ水害ノ際トハ洪水ノ爲メ損害ヲ生スル虞アル凡テノ場合ヲ總稱スルモノトス其天災ニ因ルト將タ前二條規定ノ犯罪ノ結果ニ因ルトヲ問ハサルモノトス而シテ水防ヲ妨害シタルトハ洪水ノ爲メ受クルノ虞アル損害ノ除去ニ必要ナル凡テノ處置行動ヲ妨ケタルコトヲ謂フモノトス而シテ其妨ケタルニハ水防ノ妨害トナル行動ヲ作爲シタルト將タ水防ヲ爲ス義務アルモノ水防ヲ爲サスシテ之ヲ妨ケタルトヲ問ハス苟クモ水防ノ妨害トナル行爲ヲ作爲又ハ不作爲ニヨリテ敢テシタルトキハ常ニ本條ニ依リ論スヘキモノナリトス但シ妨害スルノ意思ヲ以テ行動シタルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス只單ニ驚愕ノ餘リ茫然自失往來ノ眞中ニ立チ居リ爲メニ防水者ノ往來ヲ妨ケタルカ如キハ本條ニ依リ論スルノ限リニアラサルモノトス。

第二防水用ノ物ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ爲シタルコトヲ要ス、

茲ニ防水用ノ物トハ水害防止ノ用ニ供スル凡テノ物件ヲ總稱スルノ意ナリトス然シ法律ハ只水防妨害ノ方法ヲ例示スルニ止リ何等之ヲ制限セサルカ故ニ如何ナル手段方法ヲ用ユルトモ苟クモ防水ノ妨害トナル所爲アリタル者ハ凡テ本條ニ依リ處分ス可キモノトス而シテ上ニモ述ヘタルカ如ク本條ハ前章第百十四條ト同一趣旨ノ規定ナルカ故ニ本條規定ノ意義ニ付キテハ請フ同條ノ釋義ヲ參照セヨ。

以上ノ條件具備スルトキハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處スヘキモノトス。

第百二十二條　過失ニ因リ溢水セシメテ第百十九條ニ記載シタル物ヲ浸害シタル者又ハ第百二十條ニ記載シタル物ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ過失ニ因ル溢水罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百九條ノ規定ニ該當ス而シテ其趣旨ニ於テハ同一ナルモ只舊法ノ刑ハ輕キニ失スルヲ以テ本法ハ之ヲ重クシタリ。

本罪ノ成立ニハ第一過失ニ因リ溢水セシメタルコト及ヒ第二第百十九條記載ノ物件ヲ浸害シタルカ又ハ第百二十條記載ノ物件ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、過失ニ因リ溢水セシメタルコトヲ要ス、

即チ豫見スヘク從テ豫見セサルヘカラサルニ拘ラス不注意ニモ其結果ノ發生ヲ豫見スルコトナクシテ水ヲ汎濫流出セシメタルヲ要スルナリ其詳細ノ意義ハ前章第百十六條ノ釋義ト本章既ニ述ヘタル所トヲ參照セハ明ラカナルヘシ

第二、第百十九條記載ノ物件ヲ浸害シタルカ又ハ第百二十條記載ノ物件ヲ浸害シ因テ公共ノ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、

即チ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鑛坑ヲ浸害シタルカ或ハ又其以外ノ他人ノ物件若クハ自己ノ物件ニシテ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ賃貸シ又ハ保險ニ附シタル物ヲ浸害シ因テ其結果公衆ニ危懼ノ念ヲ抱カシメタルコトヲ要スルナリ、故ニ過失ニ因リ溢水セシメ第百十九條記載ノ物件ヲ浸害シタルトキハ直ニ本罪ヲ構成スルモノナリト雖モ若シ第百二十條記載ノ物件ヲ浸害シタル場合ナルニ於テハ因テ其結果公共ノ危險ヲ生セシメタルニアラサル以上ハ決シテ本條ニ依リ處分スルヲ得サルモノナリトス是レ蓋シ第百十九條ニ記載シタル物件ノ如キハ重要ノ物ニシテ是等ノ物ヲ浸害スルハ其所爲自身既ニ公共ノ安全ヲ害スルモノナルカ故ニ假令過失ニ基クトモ別ニ何等ノ條件ナクシテ之ヲ罰スヘキモノナリト雖モ第百二十條ニ記載

シタル物件ニ至リテハ左マテ重要ノ物件ニアラス從テ法律ハ假令過失ニ基カス故意ノ場合ト雖モ尚ホ其結果公共ノ危險ヲ生セシメタルニ非サル以上ハ之ヲ罰セスト爲シタルカ故ニ(第百二十條釋義參照)殊ニ本條ノ如キ過失ニ基ク場合ニハ尚其結果公共ノ危險ヲ生セシメタル場合ノ外之ヲ罰スルノ必要毫モ之ナキニ由ルモノナリトス

本條ノ規定ハ前章第百十六條失火ノ罪ノ規定ト同一趣旨ノモノナルカ故ニ本條ノ釋義ニ付キテハ前三條ノ釋義ト共ニ同條ノ釋義ヲ參照セラレタシ。

以上ノ條件ヲ具備スルトキハ參百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス

第百二十三條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ破壞シ其他水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ハ水利ニ關スル罪ヲ規定シタルモノニシテ舊法第四百十三條ト同一趣旨ノ規定ナリ只異ナルハ舊法ハ同條ニ於テ他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メト規定シ其目的ヲ明示スト雖モ是レ全ク其必要ナキヲ以テ本法ハ之ヲ刪除シタルト本法新ニ溢水セシム可キ行爲ノ九字ヲ加ヘタルトニ在ルノミナリトス。

本罪ヲ構成スルニハ次ノ二條件アルヲ要ス即チ第一水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲シタルコト及ヒ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ破壞シ其他ノ方法ニ因リタルコト是レナリトス。

第一、水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲シタルコトヲ要ス、

茲ニ水利ノ妨害ト爲ル可キ行爲トハ水ノ流通ヲ妨ケ以テ水ニ付テ他人カ享有スル所ノ便益ヲ害シ又ハ水ニ付テ享有スヘカラサル便益ヲ不正ニ圖ルコトヲ謂フモノトス而シテ又溢水セシム可キ行爲トハ第百十九條所謂溢水トナル可キ行爲即チ水ヲ汎濫流出セシムルニ至ルヘキ行爲ヲ謂フモノトス而シテ其目的手段方法ノ如何ヲ問ハス苟クモ水利ノ妨害ト爲ルヘキ行爲又ハ溢水セシ

ムヘキ行爲ヲ爲シタルトキハ常ニ本罪ヲ構成スヘキモノトス。

第二、堤防ヲ決潰シ水閘ヲ破壞シ其他ノ方法ニ因リタルコトヲ要ス、

茲ニ堤防トハ水ノ流出ヲ防ク爲メニ造ラレタル總テノ物件ヲ謂ヒ決潰トハ水ノ流出スヘキ程度ニ達シタル損傷ヲ謂フ又茲ニ水閘トハ水ヲ導引スル爲メ造リタル物ヲ謂ヒ破壞トハ其用ヲ爲サヽル程度ニ達シタル破損ヲ謂フモノトス、而シテ法律ハ單ニ方法ヲ例示スルニ止リ之ヲ制限セサルカ故ニ其他如何ナル方法ニ因ルトモ苟クモ水利ノ妨害トナルヘキ行爲又ハ溢水セシムヘキ行爲ヲナシタルトキハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス、從テ堤防ノ決潰水閘ノ破壞以外ノ方法手段例ヘハ水車ノ用ニ供スル水ヲ堰キ止メテ其流通ヲ妨ケ隣ノ所有地ニ灌漑スル用水ヲ自己ノ所有地ニ引キ入ルヽカ如キモ又本條ニ依リ處分スヘキモノトス。

而シテ此ノ堤防ノ決潰水閘ノ破壞ハ彼ノ第百十九條溢水罪ノ場合ニ在リテハ單ニ犯罪ノ手段ナルカ故ニ之ノミニテハ未遂犯ノ所爲ヲ爲スニ過キスト雖モ本條ノ場合ニ在リテハ此行爲自身カ既ニ水利ヲ害スヘキ行爲又ハ溢水セシムル可キ行爲ナルカ故ニ其結果物件ヲ浸害シタルト否トヲ問ハス常ニ既遂犯トシテ本條規定ノ處分ヲ受クヘキモノトス、從テ本條ト彼ノ第百十九條ト異ナル所ハ犯人ノ意思カ堤防ノ決潰水閘ノ破壞其他ノ手段ニ依リ法律記載ノ物件ヲ浸害セントスルニ在ルカ將タ何等其意ナク單ニ水利ヲ妨害シ又ハ溢水セシムルノ意思ヲ以テ堤防ノ決潰其他ノ行爲ヲ爲サントスルニ在ルカニ存スルモノトス、但シ單ニ水利ヲ妨害センカ爲メ堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ破壞シタルニ其結果第百十九條記載ノ物件ヲ浸害シタルカ如キ場合ニハ既ニ第百十九條ヲ釋義スルニ當リ述ヘタルカ如ク其浸害カ當然避ケ得ヘカラサルモノニシテ犯人ノ之ヲ知レルニ於テハ之ヲ浸害セシメントノ不定ノ意思アルモノナルヲ以テ本罪ト第百十九條規定ノ罪トノ數罪倶發即チ併合罪ヲ以テ論スヘキモノ而シテ若シ然ラサルトキニハ本罪ト前條規定ノ罪トノ併合罪ヲ以テ論スヘキモノナリトス。

以上ノ條件具備スルトキハ二年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス。

第十一章　往來ヲ妨害スル罪

本章ハ一般ノ往來妨害罪及ヒ滊車、電車、船舶ノ往來妨害罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第二編第三章第六節ニ同第三編第二章第九節ヲ合セ之ニ修正ヲ加ヘタルモノナリ、其ノ本法修正ノ主要ナル點ハ舊法第百六十三條及ヒ第六十四條ハ之ヲ特別法ニ讓ル目的ヲ以テ第百六十七條ハ其ノ必要ナキヲ以テ共ニ之ヲ删除シタルト、舊法ハ彼ノ船舶覆沒ノ罪ヲ以テ單ニ財產ニ對スルモノトナシ之ヲ第三編第二章ニ規定スト雖モ本法ハ前々章及ヒ前章即チ放火罪及ヒ溢水罪ニ付キ說明シタルト、同一理由ニ依リ寧ロ本罪ハ公共ノ安全ヲ害スルモノ即チ往來ヲ妨害スルノ所爲ト認メ本章ニ於テ其ノ規定ヲ設ケタリ、從テ舊法第四百十六條ハ之ヲ删除シタルト及ヒ本章中ノ或罪ニシテ其ノ過失ニ出テ之ヲ犯シタル場合ノ規定ハ舊法ノ缺如スル所ナルヲ以テ本法ハ之ヲ補修シタルトノ三點ナリトス。

第百二十四條　陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス

本條第一項ハ一般ハ往來妨害罪ニ付キ規定シタルモノハニシテ舊法第百六十二條ニ修正ヲ加ヘタルモノハナリ、即チ舊法ハ道路、橋梁、河溝、港埠ノ損壞ニ付キテノミ規定セルモ狹キニ失スルノ嫌アルヲ以テ本法ハ之ヲ改メ廣ク公共ノ用ニ供スル陸路、水路ト爲シ損壞ノ外尙ホ壅塞ヲ加ヘ本條ノ適用ヲ完全ナラシメタリ。

本條第一項規定ノ犯罪ノ成立ニハ第一、陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シタルコト、及ヒ第二、往來ノ妨害ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一　陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シタルコトヲ要ス。

茲ニ陸路、水路又ハ橋梁トハ一般公共ノ用ニ供スル陸上ノ道路又ハ海上若ク

ハ河川ノ航路、又ハ橋梁ヲ謂フモノトス、而シテ法文ニ別段ノ制限ナキヲ以テ其ノ公有ナルト私有ナルトヲ問ハス苟クモ公衆ノ往來ヲ許シタル水陸路ハ凡テ之ヲ包含スルモノトス、但シ私有通路ハ其ノ所有者自ラ之ヲ損壞スルハ權利行爲ナルカ故ニ罪ト爲ラサルヤ勿論ナリトス、而シテ又茲ニ損壞又ハ壅塞トハ道路、橋梁等ヲ破損シ又ハ他ノ物件ヲ以テ之ヲ塞キ以テ其ノ用ヲ失フニ至ラシメタルコトヲ謂フモノトス、故ニ例ヘハ道路、橋梁ヲ物質的ニ破壞シ又ハ路上若クハ水底ニ大石巨木ヲ横ヘ因テ往來ノ妨害ヲ生セシメタルトキハ常ニ本罪成立スルモノトス

第二往來ノ妨害ヲ生セシメタルコトヲ要ス、往來ノ妨害ヲ生セシメタルトハ通行ヲ不能ナラシメ又ハ通行ニ重大ナル不便ヲ來サシメタル狀況ヲ謂フモノトス、而シテ其ノ結果害ヲ受ケタル者アルト否トハ之ヲ問ハサルナリ、而シテ尙ホ本條ハ損壞又ハ壅塞ノ所爲アリタルカ爲メ道路其ノ他ノ交通機關カ交通ノ働ヲ失フカ或ハ減少スル場合ヲ規定シタルモノナルカ故ニ彼ノ往來止ノ札ヲ建テ若クハ此先ニ通行止ノ個所アリト僞リ其ノ通行ヲ阻止シタル場合ノ如キハ假令其ノ結果ハ同一ニ至ルトスルモ本條ニ依リ處分スルコトヲ得サルモノトス、尙ホ其ノ他損壞又ハ壅塞ノ事實ナキ以上ハ彼ノ詐僞ノ標識ヲ設クルカ如キ凡テノ場合ニ於ケル往來妨害ノ所爲ハ皆本條ニ依リ論スルノ限リニアラサルモノトス、而シテ又往來ノ妨害ヲ生セシメサル以上ハ假令陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞スルモ本罪ヲ構成セサルモノナルカ故ニ彼ノ橋桁ヲ除去スルハ本罪トナルモ擬寶珠ヲ除去スルハ本罪ト爲ラサルモノトス。

以上ノ條件具備シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス可キモノトス、

本條第二項ハ前項ノ罪ヲ犯シ其ノ結果人ヲ死傷ニ致シタル場合ニ關スル規定ニシテ舊法第百六十八條ト全ク同一規定ナリトス、即チ前項ニ規定スルカ如キ罪ヲ犯シ因テ其ノ結果人ヲ死ニ致シ又ハ人ニ負傷セシムルカ如キ所爲ヲナシタル者ハ其ノ罪重大ナルヲ以テ單ニ本條第一項規定ノ刑ヲ科スルコトナク第二十七章傷害罪規定ノ刑罰ト比較シテ其ノ重キ刑ヲ科シ以テ嚴罰スルコト

、爲シタルモノナリトス。

第百二十五條　鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ滊車又ハ電車ノ往來ノ危險ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ

本條第一項ハ滊車又ハ電車ノ往來妨害罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百六十五條ト全ク同一趣旨ノ規定ニテ唯新ニ電車ヲ加ヘタルナリトス。

本罪ノ成立ニハ第一、鐵道又ハ其ノ標識ヲ損壞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ用ヒタルコト、及ヒ第二、滊車又ハ電車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ必要トス。

第一、鐵道又ハ其ノ標識ヲ損壞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ用ヒタルコトヲ要ス、茲ニ鐵道トハ滊車又ハ電車ノ運轉ニ使用セラル、軌道ヲ謂ヒ其ノ標識トハ同シク滊車又ハ電車ノ運轉ニ必要ナル凡テノ標目例ヘハ彼ノ滊車ノ「シクナール」ノ如キヲ謂フモノトス、而シテ鐵道ハ官設タルト私設タルトヲ問ハサルモノトス、但シ馬車鐵道ハ之ヲ包含セス、而シテ又茲ニ損壞トハ物質的損害ヲ加ヘ以テ其ノ用ヲ失ハシメタルノ所爲ヲ謂フモノトス、然シ法文ニ其ノ他ノ方法ヲ以テトアルカ故ニ單ニ線路、鐵軌、標識ノ破損ノミナラス其ノ他鐵道線路上ニ大石巨木ヲ横フルカ如キ又ハ前條規定ノ罪ト異ナリ僞リノ標識ヲ示スカ如キ苟クモ其ノ結果滊車又ハ電車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルニ於テハ凡テ本罪ヲ構成スルモノトス。

第二、滊車又ハ電車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス、滊車又ハ電車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルトハ滊車又ハ電車ノ通行ニ危險ナル障礙ヲ爲シタルコトヲ謂フモノニシテ之カ爲メ滊車ノ不通又ハ轉覆等ノ結果ヲ生シタルヲ俟タス常ニ本罪ノ既遂ト爲ルモノナリトス。

尙ホ本罪ノ成立ニハ滊車又ハ電車ノ往來ニ危險ヲ生セシムルノ意思アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス、其ノ他本罪ニ付キテハ鐵道營業法ヲ參照セラレタ

シ。

以上ハ條件具備スルトキハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス可キモノトス。

本條第二項ハ艦船ノ往來妨害罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第百六十六條ノ規定ニ該當スルモノナリ、唯舊法ニ於テハ艦船ノ往來ノ危險トナル可キ方法ヲ列擧シタレトモ本法ニ於テハ燈臺又ハ浮標ノ損壞ノミヲ例示シ概括的規定トナシタルノ差アルノミナリトス。

本罪ノ成立ニハ第一、燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ用ヒタルコト、及ヒ第二、艦船ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ用ヒタルコトヲ要ス、

玆ニ燈臺トハ航海ノ安全ヲ保護スル爲メ政府又ハ私人ノ設置シタル燈明臺ヲ謂ヒ、浮標トハ海中又ハ河中ノ暗礁、洲等ヲ示サンカ爲メニ其ノ上ニ浮置セル標目ヲ云フモノトス、而シテ此等ノ物件ヲ破損シテ其ノ用ヲ爲サヽルニ至ラシムルカ如キ又ハ燈臺ノ光ヲ消シ止ムルカ如キ若クハ浮標ノ位置ヲ變更シ又ハ僞リノ浮標ヲ設置スルカ如キ凡テ其ノ結果艦船ノ往來ニ危險ヲ生セシメタルニ於テハ常ニ本罪ヲ構成スルモノトス、

第二、艦船ハ往來ニ危險ヲ生セシメタルコトヲ要ス

玆ニ艦船ハ軍艦タルト商船タルト其ノ大小並ニ船籍ノ如何ハ之ヲ問ハス苟クモ艦船ノ航海ニ危險ヲ生スルノ虞アル狀況ニ至ラシメタル所爲ハ凡テ本罪ニ擬ス可キモノトス。

尙ホ本罪ニ付キテハ明治二十一年勅令第六十七號航路標識條例、明治二十五年六月法律第五號海上衝突豫防法及ヒ明治三十二年三月法律第四十七號船員法等參照セラレタシ。

以上ハ條件具備スルトキハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス可キモノトス。

第百二十六條　人ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

人ノ現在スル艦船ヲ覆沒又ハ破壞シタル者亦同シ

前二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ

無期懲役ニ處ス

本條第一項ハ汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタル罪ヲ規定シタルモノニシテ本法ノ新ニ設ケタル規定ナリトス蓋シ舊法ハ其ノ第四百十五條ニ於テ船舶ヲ覆沒シタル罪ヲ規定シタルニ拘ラス汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタル罪ノ規定ヲ缺キタリシカ汽車又ハ電車ノ顚覆又ハ破壞ハ船舶ノ覆沒又ハ破壞ト危險ノ程度ヲ同ウスルヲ以テ之ニ關スル規定ヲ缺クハ聊カ權衡ヲ失スルノ嫌アリシカ故ニ本法ハ船舶ヲ保護スルト同一ノ理由ニ基キ本條ヲ新設シタル所以ナリトス。

本條第一項規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一、人ノ現在スル汽車又ハ電車タルコト、及ヒ第二、顚覆又ハ破壞シタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、人ノ現在スル汽車又ハ電車タルコトヲ要ス、

苟クモ現ニ人ノ存在スル汽車又ハ電車ナルニ於テハ貨車ナルト無蓋車ナルト其ノ種類ノ如何ヲ問ハス凡テ本罪ノ客體タルコトヲ得ルモノトス而シテ其ノ人ノ現在スル場合ニノミ限リタルハ本章ノ罪ハ往來ヲ妨害スル場合ノ規定ナレハナリ斯ク本罪ハ人ノ現在スル汽車又ハ電車タルコトヲ要スルカ故ニ人ノ現在セサル汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタル場合ニハ第四十章規定ノ罪トナルハ格別本罪ニ擬ス可キモノニアラサルナリトス。

第二、顚覆又ハ破壞シタルコトヲ要ス、

茲ニ顚覆トハ汽車又ハ電車ヲ軌道外ニ脫出セシメタル凡テノ所爲ヲ指稱スルモノナリトス蓋シ單ニ彼ノ脫線セシメタルカ如キ場合モ尙ホ之ヲ顚覆セシメタルモノト爲スハ文字ノ意義上稍々不妥當ナルカ如シト雖モ元來本條ハ往來ヲ妨害スルノ點ニ基キ規定セラレタルモノナルヲ以テ單ニ脫線セシメタルカ如キ場合モ亦之ヲ包含スルモノト爲スハ蓋シ立法ノ精神ニ適合シタルモノナレハナリ又破壞トハ物質的損害ヲ加ヘ以テ使用不能ニ至ラシメタル所爲ヲ謂フモノトス而シテ法文上顚覆又ハ破壞ノ結果ヲ生スルニ至ラシメタル行爲自身ニ付テハ別段ノ制限ヲ爲サヽルヲ以テ前條規定ノ如キ鐵道又ハ其ノ標識ヲ損壞シ以テ汽車又ハ電車ノ衝突ヲ起サシメ因テ汽車又ハ電車ヲ顚覆又ハ破壞シタルモノナルト發砲又ハ地雷ノ敷設等ノ手段ニ出テタルモノナルトヲ問

ハス苟クモ顚覆又ハ破壞ノ意思ヲ以テ其結果ヲ惹起セシメタル場合ニハ常ニ本罪ヲ擬ス可キモノトス。

以上ハ條件具備スルトキハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス可キモノハトス。

本條第二項ハ艦船ヲ覆沒又ハ破壞シタル罪ニ付キ規定シタルモノニシテ舊法第四百十五條ヲ修正シタル規定ナリトス、即チ舊法ニハ覆沒ノ方法ヲ例示スト雖モ其ノ必要ナキヲ以テ之ヲ刪除シ覆沒ノ外更ニ破壞ヲ加ヘタルナリ。

本條第二項規定ノ罪ヲ構成スルニハ第一、人ノ現在スル艦船ナルコト、及ヒ第二、覆沒又ハ破壞シタルコトノ二條件アルヲ要ス。

第一、人ノ現在スル艦船ナルコトヲ要ス。

單ニ艦船トアリテ其ノ大小形狀ヲ問ハサルカ故ニ彼ノ數萬人ヲ容ルヽニ足ル所ノ一大艦船ニ係ルト單ニ一人ノ外乘載スルコト能ハサル小船ニ係ルトヲ區別セス凡テノ艦船ハ皆本罪ノ客體タルコトヲ得ルモノトス、人ノ現在セサル艦船ハ第二百六十條以下規定ノ罪ノ客體タルハ格別本罪ノ客體タルコトヲ得サルモノトス。

第二、覆沒又ハ破壞シタルコトヲ要ス。

玆ニ覆沒トハ顚覆又ハ沈沒ノ意ナリトス、而シテ法文何等顚覆又ハ破壞ノ方法ヲ制限セサルカ故ニ艦船ニ發砲シ又ハ水雷ヲ放チ若クハ船體ニ穴ヲ穿チ又ハ暗礁又ハ淺瀨ニ乘リ上ケシムル等苟クモ之ニ因リテ艦船ヲ覆沒又ハ破壞セシムルニ足ルヘキモノハ皆之ヲ包含スルモノトス、而シテ又其ノ場所ニ付キテモ法文別段ノ制限ナキカ故ニ太平洋ノ眞中ニ於テスルト漸ク膝ヲ沒スルニ足ル小川ニ於テスルトハ之ヲ問ハス常ニ本條ヲ擬ス可キモノトス。

以上ハ條件ヲ具備スルトキハ前項ノ罪ト同シク無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス可キモノハトス。

尙ホ第一項及ヒ第二項ノ罪ノ成立ニハ人ノ現在スル汽車又ハ電車若クハ艦船ナルコトヲ知リ顚覆又ハ覆沒若クハ破壞スルノ意志アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス、故ニ例ヘハ人ノ現在セサルモノト信シタルニ其ノ實人ノ現在シタルカ如キ場合ニハ第四十章規定ノ罪ニ擬ス可ク本條第一項又ハ第二項ノ罪ニ依リ處分スルヲ得サルモノトス。（第三十八條第二項參照）